
死んでまさかのトリップ（ネギま）

ユウスケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死んでまさかのトリップ（ネギま）

【Nコード】

N9232R

【作者名】

ユウスケ

【あらすじ】

主人公は妹の誕生日プレゼントを買った帰り、車にひかれ運悪く死んでしまう。その後神様に五つの頼みごとを聞いてもらい異世界へ。あと、作者は素人のため駄文ですのでご注意ください

プロローグ（前書き）

課題がまだ終わっていませんが、息抜きで書いてみました。
死んでまさかのトリップと一緒に連載していくつもりですので
よろしくお願いします。

プロローグ

俺の名前は鶴野ぬえの 雄介ゆうすけ（17歳）

今日俺は、妹の誕生日プレゼントを買った帰り……。

俺は、車にひかれてしまった、その後のことは、意識がなくなり覚えていない。

そして俺は今、何も無い真っ白な空間の中に居る……。

「ここは何処だ？」

俺は立ち上がり、辺りを見渡した。

本当になにもない、ここが死後の世界というやつだろうか？

「ほう、よく分かったの」

誰も居なかったはずの後ろから声が聞こえる。

バツ！

俺は急いで振り返った。

「なんじゃい、急に振り返るなビックリするじゃろ！」

「あ、すみません」

振り返った時に、白い服を着て、白い髭を生やしたおじいさんが居た。

胸を抑えて本当にビックリさせてしまったようなので、とりあえず謝る。

それよりも、このじいさん誰？

「すみません、おじいさんは誰ですか？それとついでに、「コ」がどこだか教えてください」

「わしは神じゃ、それとここは、さっきお主が考えておった死後の世界じゃな、ただしここは、少し違うがの」

「そうか神様だったのか、それにしても死後の世界か・・・ん？でもさっき少し違うって、言ったような・・・」

「すみません、少し違うとは、どういう事なんですか？」

「それは、ここがまだ死後の世界と現世の中間だからじゃ」

「中間ということは僕はまだ死んでないのかな？」

「ちなみにお主は、完全に死んどるぞ」

「なんですかそれ！じゃあなんで俺はここにいるんですか？」

「死んだのに中間に居る、これはもしかしたら地獄か天国の分かれ道なんじゃ・・・」

「それは、お主が死んでしまったのは、わしにも予想外の事だったんじゃ」

「予想外とは？」

「お主は本来あと70年は生きる予定だったんじゃが、運命がどこかで狂ってしまったようなんじゃ」

「そして、予定にもなかったお主の魂はここから動く事はできぬ」

は？それってあと70年もこのなにもない所で待ってるって事？

「ちょっと待ってください、それじゃあ俺は70年ずっとここにいないといけないんですか？」

「いや、そうならないためにわしが来たんじゃない」

よかった、どうやらなんとかかなりそうだ。

正直こんな、なにもないところでまたされていたら発狂する。

「その、処置の方じゃがお主には別の世界に行ってもらおう」

「別の世界ですか？」

「そうじゃ、お主の居た世界とは異なる世界じゃ、お主にはそこに行ってもらおう」

別の世界か・・・ファンタジーな世界がいいな。

「ちなみに、世界はランダムに選ばれる、世界の中には危険な世界もある、だからお主の要望に五つ応えよう」

五つか・・・そうだなとりあえず生き残れそうなものを名前も似ているしアレを頼もう。

「じゃあ、一つ目鬼の手が欲しい、二つ目は鬼の手の制御を百パーセントできるようにして欲しい」

三つ目は地獄先生ぬ〜べ〜に出てきた妖怪を式紙として扱えるようにして欲しい、

四つ目は技術などあらゆる知識が欲しい、五つ目はサポートとして僕の好きなアニメキャラを呼び出して従者にしたい」

「わかった、とりあえずサポートキャラは呼び出したり用がないときは消しておけるようにした、これでもうよいな？」

「はい」

「そうか・・・」

とりあえず、これでいいかな。

「では、お主を送るが・・・心の準備がいるか？」

「いえ」

「じゃあ送るぞ、気をつけてな」

「はい」

僕は意識を失い、異世界に飛ばされた。

そして、僕の二度目の人生が始まる。

「あ・・・そういえば鬼の姿になる時気をつけないと激痛がするって言っの忘れてた」

ブログ（後書き）

課題はまだ終わっていませんが休憩している時に書いて更新しますので

不定期になりますが応援よろしくお願いします。

一話 麻帆良に来た、鬼の手を持つ男（前書き）

休憩に書きました。

エムゼロも書いている途中ですのでお楽しみに

一話 麻帆良に来た、鬼の手を持つ男

―雄介視点―

意識が戻ってきたので体を起こし回りを見渡す。
どうやら俺は見知らぬ部屋に飛ばされたらしい。
どうゆうことだ？

コッ

「ん？」

左腕に何かがあたったので、それを見る。

白い箱とその上に神と書いてある手紙のようなものが置いてあった。
俺はそれを神からの手紙だと判断し読むことにした。

カサ

―お主がこれを読んでおるといふことは無事ついたようじゃな、この部屋は男子学生寮の部屋じゃ、お主はまだ学生じゃったようじゃし学生にしといたぞい、それからお主とこの世界について説明する、まず、お主がある世界じゃがどうやら魔法先生ネギまという漫画にとてもよく似た世界のようにじゃ、だから漫画のような展開があるから気をつけるもしくは、自分の手でハッピーエンドにするか
好きにするといいいじゃろう、そしてお主の事じゃが、まず霊力は魔力や気にしておいた、
しかもかなりの魔力量と気じゃから、ラカンとかよゆうで倒せる、

それから、

鬼の手はぬぐべくと同じように左手についておるが見た目は普通の人間の手にしておいた、

ちゃんと開放すれば鬼の手になるから安心せい、それとお主のあらゆる知識のおまけに戦闘経験を

付けといたから瞬動とかその気になれば魔法も使えるからの、そしてお主の戸籍はちゃんと作ってあるから、

将来に困る事はない、最後にお主の容姿と近くにある白い箱について説明する、

まず、白い箱じゃが、その中にサイフ、預金通帳、念珠、霊水晶と経文があるから何かあったら使うといいじゃろ、

最後に容姿じゃが、玉藻京介を高校生にした感じにしておいたから頑張るんじゃぞ。ー

俺は手紙を読み終わると、とりあえず中の物を確認する。

確かに手紙に書いてあった通りの物が入っている。

そして、容姿を確かめるため洗面所を探すため歩き出す。

10秒くらいで洗面所にたどり着き自分を鏡で見る。

「すごい・・・そっくりだな」

銀の髪に整った顔、どこかの学生服を身にまとう高校生ヴァージョンの玉藻

すこしの違いはあるものの、思わず口にしてしまうほどそっくりだった。

せめて容姿をいじるならぬぐべ〜にして欲しかったがこれ以上、贅沢言うのはよそう。

そしてさっきまでいた居間に戻りこの世界について調べる。

数時間ほど外に出て調べてみたが神の手紙に書いてあった通りここ

は漫画と酷似した世界のようなのだ。

なぜならここは、麻帆良学園の近くにある男子寮だったからだ。

まあ、マンガは買って読んでいたし別に平気だろ。

さて、今日の日付けは……。

テレビを付けて番組表と時間を見る。

なるほど今日は金曜日の午前8時30分か……。

あれ？平日？しかも午前？学校は……

やばい遅刻だ！

いや、まて落ち着け俺、たぶん今日は休みか月曜日に転入するのだろうきつとそうだ。

部屋の中になにかないか探す。

あつた約10分程度で見つかったこれは運がいい。

資料のような物を広げしてみる。

どうやら、俺は今度の月曜日に麻帆良学園高等部に転入するようだ。よかつた正直マジあせつた。

とりあえず、今日は生活必需品や食料を買って風呂に入って寝るかな。

そうして俺は、外に出るため私服に着替え、もう一度外に出てコンビニなどで買い物をして寮の部屋に帰ってきたが、

思ったより時間が空いていしまつていたので学校までの道を覚えようと念のため経文を持ってもう一回外に出た、

はじめは、少し迷ってしまったが、お巡りさんのおかげでなんとかたどり着いた。

道も覚えたしこれで大丈夫だろ、さて帰るかな。

そう、来た道に戻ろうとした時だ。

集団の女子達が歩いて登山家のような装備をしてどこかに歩いて行くのが目に入った。

ん？あれってたしか……。

そうだ思い出した、たしか2-Aが期末テストのために図書館島に魔法の本をとりに行くところだと思う。

思うというのはストーリー通りになって行くのかがわからないからだ。

それを確かめるために気配をけして尾行する。

少しすると気づく尾行に気づかれ顔を見られたら……。

100%やつかになる。

だから俺は正体を隠せそうな物を尾行中に購入した。

そうしてしばらく歩いたところに大きな建物が見えてきた。

「これが図書館島……」

「でも……大丈夫かなー、したの階は中学生部員立ち入り禁止で危険なトラップがあるらしいけど……」

「大丈夫それはアテがあるから」

「へー」

集団の会話がわづかに聞こえてくる。

そうか……トラップもあつたんだっけ、まあ経文使えばなんとかなるだろうし、いざとなったら鬼の手を使えばいい。

そうして集団が中に入るのを見て俺もついていく事にする。

ーアスナ視点ー

私は今、魔法の本探しのため、図書館探検部の皆と成績の悪い私を含め4人とネギのメンバーで図書館の中に入る。

しかし、あてにしていたネギの魔法は使えないらしい。

しかもいつもの運動能力も魔法が使えてたから出来ていたものらしく、魔法の使えない今ではただの足手まといの子供。

正直トラップもあるこの図書館では大怪我をするかもと、とても心

配だ。

心配して上着を貸したら友人のこのかに言われるし、ネギもなんかいいように解釈しているし。

やっぱりつれて来ないほうがよかった、ガキうざっ!!
それからしばらく進むとまるでRPGのような部屋に出た。

「私こーゆーの見た事あるよ弟のPSで!」

「ラスボスの間アルー!」

上からまき絵とクーフェが興奮して叫ぶ。

「魔法の本の安置室です」

「こんな場所が学校の地下に・・・」

「見てあそこに本が!!」

「!?!あつ・・・あれは!?!」

「どうしたのネギ!?!」

まき絵の声に反応したネギが叫びながら本を指差す。

私はその指の先を見る。

するとそこには本が一冊、置いてあった。

まさかあれが・・・。

「あれは伝説のメルキセテクの書ですよ!!信じられない!!僕も見るのは初めてです」

「てことは本物・・・？」

「本物も何も、あれは最高の魔法書ですよっ！確かにあれならちよつと頭を良くするくらい簡単かも！！！」

「やったー！！！」

「これで最下位脱出よー！」

「一番ノリあるー！」

「あ、あたしもー！」

「あんな貴重な魔法書絶対畏があるに決まっています、気をつけて！」

私は魔法の本に向かって走り出したほかの四人も同じように走る。ネギが気をつけるようにという言葉をした瞬間・・・。

バカン！

ドテ！

「きゃー！」

「いたー！」

地面が無くなり下に落下してしまい尻餅をついてしまった。いったいなんなの？

「こ、これって・・・？」

「ツ……ツインスターゲーム……？」

下を向いたらツインスターゲームのようなボードがあった。
なぜツインスター？

「フオフオフオ……この本が欲しければ、わしの質問に答えるの
じゃーフオフオフオフオ」

ズズウ……ン！！

「……キャー……ッ！！」「……」

石像が突然喋ったと思ったら動き出した。

「ななな、石像が動いたー！！！」

「いやーん！！！」

「おおおおー！！！」

「こ、これは！」

「では第一問……」

そして私達は、喋る石像に英語の問題を出され、それに答えていく。
しかし……。

「……おさる？」

「ハズレじゃな」

「アスナさんー!!!」

「まき絵ー!!!」

バゴン!!!

ハズレと言った後、石像は持っていたハンマーを私達のすぐ近くに振り下ろし、

私達の立っていた場所を崩してしまった。

「アスナのおさるー!!!」

「いやー!!!」

私達は暗い穴へと吸い込まれるように落ち始めた。

それぞれ皆が叫び、私も叫んだその時。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光

経文よ我らを救いたまえ!!!」

男の人の声らしきものが聞こえたと思ったら、お寺のお坊さんが持っていたそうなものが私達の回りを囲む、

すると落下速度が落ちてきて私達はゆっくりと地面に着地した。

これは一体なんなの？

そう思ったとき私達を囲っていたものは私達から離れ知らない男の人に回収される。

しかしこの男の人なぜ馬のマスクを・・・？

私達を助けてくれたのはいいのだけれど何故馬のマスクを？正直、

台無しだと思っ。

周りも私と同じ事を考えているのか黙っている。

― 雄介視点 ―

まずい正直ミスった一緒に落下してしまっと思わす助けてしまっ。
しかもこの空気重いし最悪だ、それに皆は怪しそっに見ているし、
しようがなかつたんだ、

コンビニでこれしか売っていなかつたんだから！

それにしても、大丈夫かな？今回は戦闘とかないし別にいいけど、
戦闘とか正直勘弁して欲しい。

そんなことを考えていると・・・

「あの・・・ありがとうございますおかげで助かりました」

「ちよつとあんた・・・」

野菜が話しかけてきた、正直この空気を打開するチャンスをくれて
嬉しく思っ。

「気にするな偶然だ、それより君たちなんでこんな遅くにこんな所
に居るんだ？」

とりあえず変態と思われないうにしないと、そう思い常識人っぽ
い話題をする。

「それは、魔法の本を探しに来たんです」

「いや、それよりもあんたは、なんでそんな変な馬のマスクをして、
ここにいるのよ」

野菜と会話をしていたら、横から神楽坂さんに横槍を入れられた。しかし、この発言は的確で正直どうしよう……。そうだ！

「おれは学校の関係者でね、図書館に無断で入る女子中学生の集団が見えたんで注意するためにここにいる、それと、この馬のマスクは正体を明かせない事情があるからしているだけだ」

「怪しいわね、事情って何よ」

くそ〜なかなか言い訳するのってめんどくさい、神楽坂さんぐいぐい聞いてくるし。

しかたがないここは少し攻撃的に行きますかな。

「事情を話す前に君たちについても聞かせてもらおうよ、なぜ魔法の本を探しに来たんだ？」

「そ、それは……」

よし、神楽坂さんのはぎれが悪くなった。

「どうした、答えられないのか？」

「それは、僕達のクラスが期末テストで最下位をとったらずいことになるから、それで必要なんです」

答えなかった、神楽坂さんの代わりに野菜が答えた。

知っていたとはいえちよつとムカつくな……。

「ほう、つまりお前達は期末テストでズルをするために図書館に不法侵入をして

魔法の本を盗み出そうとしていた訳だな？」

「ち、違います！！僕達は盗むつもりなんてありません！！」

正論を言ったら、いい訳をする野菜

うわゝこの野菜、本当に自分の事しか頭にないな……。

「そこの黒髪の女子生徒、少し質問をするがいいかな？」

「はい、べつにええけど……。」

俺は図書館探検部である近衛さん話しかける
なぜ彼女に話しかけたというと

「この図書館に女子中学生は地下三階より下の階に入ってはならないという規則があったはずだ、
違うかな？」

「……いえ」

近衛さんの返事で理解できたのか周りは沈黙する。

「しかもだ、貸し出し許可の得ていない本を持ち出すのは窃盗だ、
これも間違っているかな？」

「……間違っていない」

質問に答える近衛さんだか正直、どんどん暗くなるから心が痛む。

「さて、その少年、つまり盗むつもりはなくても盗みになる、これでわかったかな？」

「で、でも！」

「そうよ、少しぐらい使わせてくれてもいいじゃない!..!」

さすがに分かっただろうと思ったが、まだ何か言う野菜、それに便乗して少しぐらいならいいだろう

と言う神楽坂さん、まったくここまで言っても理解できないのかこいつ等は.....。

「少しでも駄目に決まっているだろう、そんなに警察のお世話になりたいのかい？」

「う.....」

さすが警察、名前を出しただけで神楽坂さんを黙らせた。

しかし、雰囲気最悪だ、しかたがないここは助け舟を出すか。

「まあ、魔法の本をあきらめて、ここで出口が見つかるまで勉強をするというなら黙っててあげるが.....どうする?」

「わかったわよ、魔法の本は諦める.....ってあんたこの出口分らないの!？」

「ああ、ここに来たのは君たちに巻き込まれて落下した今日が初めてだからね」

「うっ・・・」

俺が出口が分からないと言うと、急に大きな声を上げた神楽坂さんだが自業自得だと思ったのか少し声を出し、
黙り込む。

「そ、それじゃあ私達このまま、お家に帰れないんじゃないか・・・？それにあの石像もまたでるかもだし！」

「ど、どうするアルか？それでは、期末テストまでに帰れないアルよー！」

「み、皆さん落ち着いてください！」

出口が分からないと分かったとたん、周りが騒ぎ始めた。

まあ、女子中学生だし、しかたがないか。

たしか、試験当日になると石像が来てエレベーターの所まで追い詰めてくれるんだったよな。

原作通りそれを待つか・・・。

「痛ッ・・・」

「アスナさん！？」

「いや、大丈夫なんでもないよ」

「か、肩を怪我したんですか！？」

どうやら落ちる時に怪我をしたようだ、野菜はそれに気づき心配し

ている。

しかたがない、俺も不法侵入だし少しぐらい助けてあげるかな。

「そのツイントールの君、少しいいかな？」

「へ？」

話しかけられたのが意外だったの少し間抜けな声を出す神楽坂さん。

「怪我をしたのは左肩？」

「え？そうだけど・・・それがなに？」

「いいから少し、じっとしていてくれ」

神楽坂さんの怪我をしていると思われる左肩に手をそえてハンドヒールリングを行う。

「あれ？痛みが・・・」

「これから気をつけろよ」

「う、うん」

ハンドヒールリングで怪我を治していた後周りは食料探しや勉強の準備などを始めた。

それから俺は、女子達とそれなりに仲良くなり、勉強を教えたり出口の探索の手伝いをしたり、

勝負を挑まれ逃げたり、それなりにエンジョイしていた。

そして今日原作通りなら石像が来るはず。

俺はいつでも走れるように準備をする。

「あ……玉藻さん」

「ん？」

準備を終えると野菜が話しかけてきた。

おや？原作通りだとたしか覗きをしているはずの野菜がなぜここに？
ちなみに、皆には玉藻と名乗っている。

「どうした？」

「もしかして、その……」

「キヤーーーーー！！誰か助けてーッ！！！」

「ま、またあのでかいの！？」

野菜が何かを言いかけた時、遠くから皆の叫び声が聞こえた。
来たか！

「早く行かないと！！」

野菜が皆のところ走り出す、ここで俺が行ったら覗きになるのか
な？

たしか原作だとタオル巻いていたし大丈夫だろ、それに行かないと
怪しまれそうだし。

そう思って俺は野菜を追いかける。

「キ、キヤーーーー、助けてーッ！！！」

「さ、佐々木さーん!!」

俺が野菜に追いついたとき、石像は右手に佐々木さんを掴みこちらに向かってくる。

「ぼぼ、僕の生徒をいじめたな!いくらゴーレムでも許さないぞ!!
ラス・テル・マ・スキル・・・くらえ魔法の矢!!」

「フオ!」

しゅん

「ま・・・」

「まほーのや・・・?」

野菜の魔法の矢という言葉に驚く石像、しかし野菜から魔法の矢は放たれない。

魔法の事を知らない人が居るのにこの野菜は・・・。
しかたがない、顔もマスクでわからないだろうし俺がやるか。

シュン!

ガン!!

「フオ!??」

「キヤ!」

石像の右腕の近くに瞬動で近づき、右足に気をため石像の右手首を蹴る。

すると、石像は佐々木さんを放した。

「よっ」と

がし！

スタツ！

「ありがと、玉藻さん」

「ほら早く立って、逃げるぞ」

「は、はい！」

俺はすかさず佐々木さんをキャッチして、地面に降ろし逃げるように指示する。

それから俺達は石像から逃げ出し、逃げながら原作にあった非常口を探す。

そして、非常口を綾瀬さんが見つけた。

その後も原作どつりに扉の問題を解いていき・・・

「あうっ！！！」

「夕映ちゃん！！！」

「こんな所で・・・すみません、足をくじいてしまいました、みなさん先に行ってください」

階段を上っている途中、綾瀬さんが転んだしまった。思い出した、そういえば転ぶシーンがあっただった。しかたがない。

「綾瀬さん、悪いが少し我慢してくれ」

「え？ちよちよっと・・・」

ぐい

「文句は後から聞く、ほら、行くぞ！」

「は、はい！」

俺は足をくじいた綾瀬さんを問答無用で抱え込み走る。そして、地上に行くためのエレベーターに全員乗り無事、地上に出る。

チーン

「外に出られたー！！！」

「いえー！」

皆、それぞれ歓喜の声を上げる、さて俺は寮に帰るかな。

シュン！

俺は皆に気づかれないように瞬動をして寮の部屋に帰った。これでもう関わる事もないだろう・・・。

「ネギ視点」

僕は図書館の外に出たことをそれぞれで喜んでいました。

そして、綾瀬さんやまき絵さんについてお礼を言うため、玉藻さんを探しましたが、

さっきまでいたはずの玉藻さんが居ません。

「皆さん、玉藻さんがどこに行ったか知りませんか!？」

「あ、そういえば……」

皆さんも気づいていなかったようです、どこにいつてしまったんでしょう?」

「それにしても不思議な人だったよね」

「正体を隠して助けてくれるなんて、まるでヒーローアルね!」

「今度あったらぜひ勝負して欲しいでござる」

「お礼を言うのを忘れました」

上からまき絵さん、クーフエさん、楓さん、夕映さんがそれぞれいます。

確かにクーフエさんの言うとおりなのかもしれませんが、僕も今度あったらお礼を言おう。

そうして、僕は寮に帰りました。

一話 麻帆良に来た、鬼の手を持つ男（後書き）

次回 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼
お楽しみに！

雄介「俺、ヒーローのつもりないんだが・・・」

二話 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼 「Aパート」(前書き)

まだ、課題は終わっていませんが
なんとか書けました。

これからも応援よろしくお願いします。

二話 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼 「Aパート」

― 雄介視点 ―

さて、あれから特に何もなく転入しすぐに進級した。

特に何もなく平和な日常を過ごしている。

だが、最近原作通りの桜通りの吸血鬼の噂がすごい、おかげで女子達と一緒に帰って欲しい

など、頼まれたりしていたが、それも最近はなくなった。

さて、今日の授業も終わったようだし帰るかな。

俺は、寄り道をせず寮の自分の部屋に帰った。

今でテレビを見ているとき、ふと思いついた事がある。

そう、サポートキャラの事だ。

知っている世界だし特に問題ないだろうと思って呼んでいなかったが暇だし呼んでみようと思う。

さて、誰にするかな・・・。

そうだ、フェイトのセイバーを呼ぼう、いかにも従者っぽいし。

そして俺は、呼んでも大丈夫なようにテーブルなどを片付けた。

こんなもんでいいかな、部屋の中央に移動して呼ぶ。

「来い、セイバー」

パァァ

「サーヴァント・セイバー召喚に応じ参上いたしました」

床に魔法陣が展開され騎士姿のセイバーが出てきた。

さて、とりあえず自己紹介でもしようかな。

「はじめましてセイバー、俺の名は鶴野 雄介よろしく」

「セイバーです、これからよろしくお願いいたしますマスター」

お互いに自己紹介が終わる。

さて、どうしよう。

とりあえず、色々質問をする事にする。

「セイバー、いくつか質問をするがいいか？」

「はい、かまいません」

それから、質問をしているとこのセイバーは聖杯を知らないらしい。士郎について聞いてみてみたが知らないと答えた。

もしかしたら彼女は俺の都合の良いように神に作られた存在なのかもしれない。

まあ、それは神と会話するときまで考えるのをやめる事にした。

その後セイバーの質問に答る、質問が終わったら今後のため鬼の手について話す。

初めは驚いていたが、どうしてそうなったかと質問をされたのでぬぐぐぐの話の少しオリジナルを加えて使わせてもらい、本当に体験したように演技をして話をした。

彼女は神の事を知らないようなので、正直に話したら正気を疑われそうだったからだ。

その後もごまかすためぬぐぐぐ設定の話のある程度する。

「そうだったのですか・・・」

「ああ・・・」

納得してもらって少し暗い感じになるセイバー、正直見ていると罪悪感がする。
しかし正気を疑われたりするよりかマシだ。
俺は我慢してこれから何かあったら呼ぶようにすると伝え帰ってもらった。
さて夕飯にするかな。

ーセイバー視点ー

私はマスターに呼び出された。
はじめて会ったはずなのになぜかこの人がマスターだとわかった。
呼び出された後、自己紹介をお互いにして質問をした。
私も質問をされ最初の方は意味がわからなかったが、最後まできちんと答える事ができた。

その後マスターは自分の力について話してくれたが正直驚いた。
人の手だと思っていた左手が突然おぞましい異形の手となったのだ。
10秒ぐらい経って冷静になり何故そうなったか質問をする
なんでも一年前クラスメイトの親友が鬼に取り憑かれ救おうとした
のだが

鬼があまりにも強力であったため、鬼を自分の左手に封印したそう
だ。

私はふと疑問に思ったそんな強力な鬼をどうやって封印したのか。
私はマスターにその事を聞いて聞かなければよかったと後悔した。
それは幼い頃、命をかけてマスターを守ってくれた先生がいて、その人は悪霊のせいで地獄に連れて行かれ
マスターの親友に取り憑いた鬼に魂を地獄で食べられてしまったらしい。
そして食べられた魂は鬼の一部となってしまうのだが意思だけは残った、

だから、先生は鬼をマスターに封印してもらったために地上に出た鬼

をマスターのところまで誘導し
内側から先生が鬼を抑えて、やっと封印ができたそうだ。
正直私はこれほど重い話だとは思わなかった。
それから私はマスターに何かあったら呼ぶと言われ帰る事にした。
マスター私はあなたの従者、辛そうに話すあなたをもう見たくありません。
いつか私は、あなたを支えられる騎士になります。
それまで、待っていてください。

―雄介視点―

心が罪悪感に潰されそうになる前にセイバーに帰ってもらった後。
夕飯を作ろうとしたのだが材料をきらしてしまっていたのを思い出しコンビニへ行く事にする。
出かけるとき一応、馬のマスクと霊水晶などのアイテムを携帯する。
それから外に出てコンビニで買い物をする。
買い物をした後、寮の自分部屋に帰るため桜通りを通らなければならぬ。
そして現在、桜通りの前にいる。
だが平気なはずだ、いつも魔力や気は抑えているし察知される事もないだろ。
俺は桜通りを歩き出した。
ん？あれは・・・
しばらくあるいたところで人影が見えた。
あ・・・あれってたしか宮崎のどかさんじゃないかなかったっけ？
そうだ、あの前髪は間違いないじゃあこの後って・・・。
幼女に見つかる 戦闘 厄介ごと
最悪だ！早く逃げたほうが良いな。
そう思ってコンビニに向かおうとしたときだ。

「あの〜すみません」

後ろから宮崎さんに声をかけられる。

まずい、どうしよう何かないかこの場を逃れる必殺の何か……。とりあえず考えても分からなかったため、馬のマスクをつけて振る向く。

「なにかようかな？」

「え！いやっそのっ！」

振り向いたらかなり驚いている様子これなら逃げてくれそうだな。ん、後ろからなにか来るな。

「あ、危ない！」

宮崎さんが叫ぶと同時に宮崎さんを抱え何かをジャンプして避ける。

ガン！

さっきまでいた所に魔法らしきものが着弾する。これってまさか……。。

「ほう、あれを避けるか……。貴様何者だ？」

あらら、幼女来ちゃったかでも顔隠れているし問題ないはずだ。

あ、そういえば宮崎さん大丈夫かな？

腕の中にいる宮崎さんを見る

「きゅ〜」

どうやら気絶してしまっているようだ。
まあ、騒がれるよりいいかな。

「おい、聞いているのか？」

「俺は……」

「ぼ……僕の生徒に何をするんですかー！」

「ちっ、もう気づいたか」

どうやら野菜が来たようだ、しかし杖に乗って来るのってまずい
だる。

「魔法の射手・戒めの風矢！！」

「氷盾……」

バキキキキン！！

「僕の呪文をはじき返した！！」

野菜の魔法矢を少女が魔法ではじく、まあこれで俺の事はひとまず
忘れられるだろう。

「くっ……驚いたぞ、凄まじい魔力だな……」

「き、君はうちのクラスの……エ、エヴァンジェリンさん！？」

「フフ・・・新学期に入った事だし改めて歓迎の挨拶と行こうか先生・・・いや、ネギ・スプリングフィールド、10歳にしてこの力さすがに奴の息子だけはある」

「な・・・何者なんですかあなたは！僕と同じ魔法使いのくせに何故こんな事を！？」

野菜が幼女に問いかける、しかし野菜には呆れるな魔法使いの全員が正義の味方と勘違いしている。

まあ、俺に害がなければ正直どうでもいいが。

「この世には・・・いい魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよネギ先生、

氷結武装解除！！」

幼女が魔法薬の入ったピンを投げる。

あれ、これって俺にも当たらない？

宮崎さん抱えているしまずいな、瞬動をしてくすったりしたら俺は確実に変態の仲間入りと野菜に正体がばれる。

しかたがないか。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光

経文よ我らを魔法から守りたまえ！」

バキン！

経文が幼女の投げた魔法薬で発動した魔法をはじく。

これで、正体がばれる事も服が破けて変態の仲間入りも回避した。回避したのはいいのだが・・・。

これってまずいよね・・・？

―エヴァンジェリン視点―

私は宮崎のどかの血を吸うために近くにいた。

しかし吸おうと思ったとき変な男がいた、私はもしかしたら魔法関係者じゃないかと思い

男を観察する。

しかし、この男は何故馬のマスクをしている？

もしかしてただの変態じゃないのか？

魔力も一般人並だしおそらくただの変態だろう。

そう思い私は男を気絶させ宮崎のどかの血を吸うために、男に魔法を放つ。

しかし、男は宮崎のどかを抱えてジャンプして魔法を回避した。

どうやらただの変態ではないようだ、もしかしたら私の気配を察知して宮崎のどかを守るために来たのか？

そう考えるとあの馬のマスクも理解が出来る。

おそらく奴は私に今後、狙われないためにあの馬のマスクをしているのだろう。

私が何者かと、質問したときも奴の腕の中にいる宮崎のどかに視線を落として様子を見ている。

どうやら私の考えが当たっていたようだ。

再び、質問をすると奴は答えようとしたのだが、坊やに気づかれてしまった。

まったく、空気の読めないやつめ！

私は坊やの放つ魔法の射手を防いだがは奴の息子、魔力量だけはすごいようだ。

そして坊やと会話をして武装解除の魔法を奴と坊やに当たるように魔法薬の入ったビンを投げる。

だが……。

バキン！

私の魔法は奴にはじかれてしまった。
はじく瞬間奴の魔力が上がった、どうやら奴は力を抑えているらしい。

私は奴に興味が出た。

「実力を隠していたのか・・・さっきは坊やのせいで聞けなかったが、貴様は何者だ？」

「俺は・・・なんや今の音!？」

「あつ、ネギ!!」

また横槍が入った今度は近衛このかと神楽坂明日菜の二人だ。
私はとりあえずその場を離れる事にする。

ーアスナ視点ー

私とこのかは本屋ちゃんを送るため追いかけていた。
しかし追いかけている途中で大きい音がしたので走るスピードを上げた。

そして何人かの人影が見えたので近づいてみると、馬マスクの玉藻さんとネギさん
そして何故か玉藻さんに抱えられている気絶した本屋ちゃん。
まさか！

「玉藻さんが吸血鬼やったんか~~~~!？」

このかが私の考えていた通りの事を言う。

「それは違つぞ、近衛さん」

「そうですね、玉藻さんは宮崎さんを助けてくれたんです」

あれ？どうやら違つたらしいじゃあ何故こんな事に？

「あつ、待て!!」

ネギが奥の方を向いて叫ぶ。

私も見たが人影のようなものが見えた。

「え・・・今は・・・？」

「ア、アスナさんこのかさ玉藻さんは宮崎さんを頼みます！

僕はこれから事件の犯人を追いますので先に帰っていてください！」

「ネギく・・・うわっ、はやっ!？」

「ちよつとネギーーツ!？」

ネギは私達に本屋ちゃんの事を頼むと風のように走っていった。
つた。

私も追いかけないと!

でも、もし本当に吸血鬼だったら・・・。

そう思いふと玉藻さんを見る。

そつだ!玉藻さんは私の怪我を魔法で治してくれたんだつた。

「玉藻さん!本屋ちゃんはこのかに任せてネギを追いますよ!..!」

「は？でも……」

本屋ちゃんを見る玉藻さん、どうやら本屋ちゃんが心配らしい。図書館の時もそうだったがやはり優しいと思う。さつき疑っていた自分が恥ずかしい。ただ今のは考え事をしている時じゃない。

「玉藻さん、うちに任せてネギ君の所に行ってあげて」

「……わかった」

このかに説得され了承する玉藻さん。

そして私と玉藻さんはネギを追うことにする。

それからしばらく走っていると屋根に立っている数人の人影を見つけた。

「こらー！そこの変質者どもー！！！」

私と玉藻さんは屋根に上り私はネギを襲っている二人を蹴り飛ばす。

―雄介視点―

宮崎さんを理由に帰ろうとしたら神楽坂さんに止められ、しかたがなく野菜を追うことにした俺。

建物の屋根にいる野菜を見つけ上げる事になった。

ようやく屋根に着いたとき、幼女と茶々丸さんは顔面スライディングをしていた。

「か、神楽坂明日菜！！！」

「あ、あれー？」

幼女は自分を蹴った人間の名前を叫び、神楽坂さんは予想外の人物で理解できていないらしい。

「あんた達ウチのクラスの・・・ちよつ、どーゆーことよ!？」

質問をする神楽坂さん、いやもう気づいても良いだろ・・・。

「ま・・・まさかあんた達が今回の事件の犯人なの!？」

しかも二人がかりで子供をいじめるような真似して・・・答えによつてはタダじゃ済まないわよ!！」

「よくも私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜・・・お、覚えておけよ〜」

「あ、ちよつと!！」

捨て台詞を吐いて屋根から飛び降りる幼女と茶々丸さん。

さて、俺も帰るかな、これ以上よけいな頼まれごとをされないよういつものように

瞬動で寮の部屋に帰る事にした。

二話 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼「Aパート」(後書き)

次回Bパート

オコジョが出ます。

三話 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼 「Bパート」

― 雄介視点 ―

桜通りの出来事から数日たった今日、俺は自分の部屋にセイバーを呼んだ。

呼んだ後、会話をしてこのあたりの道を覚えたいと言うので、案内をすることになった。

外に出る際セイバーはアニメで着ていた白い上着と青いスカートになつて姿を見えないようにした。

それからしばらく案内をしていたのだが喉が渴いて自販機でジュースを買う事にした。

「ありがとうございます、マスター」

「別に気にしなくていい」

セイバーにお礼を言われ、気にしなくてもいいと答えたとき。面倒なものを見てしまった。

「と、ともかく今がチャンスっす！心を鬼にして一丁ボカーっとお願ひします！！」

「で、でも……」

「……しよーがないわねー」

物陰に隠れて茶々丸さんを襲撃しようとしている野菜たちがいた。

「なんですか、あれは？オコジヨが喋っていますが」

「あれは、オコジヨ妖精で妖精の一種だな」

セイバーにエロオコジヨについて聞かれたので答える。
しかし、オコジヨむかつくな・・・。

「彼らは何をするのでしょうか？」

「あそこに女子生徒がいるだろ」

「はい」

「その女子生徒を二人がかりで倒そうとしているんだよ」

「なっ！！」

質問に思わず答えてしまった俺、しまったと思ったがもう遅い。
セイバーがとても怒った顔をしている。

「マスター行きますよ、そんなの許せません」

「お、おいちよつと・・・」

俺は説得を試みたが無駄に終わってしまった。

一応携帯していた馬のマスクをして行くことになった。
はあ、なんてこった・・・。

「はっ！！」

「きゃあ！」

セイバーはデコピン合戦をしていた茶々丸さんと神楽坂さんの間に割って入って。

二人の肩を掴み引き離す。

セイバーが現れたし、まあ、これで茶々丸さんも攻撃されないだろ。

「魔法の射手 連弾・光の11矢!!！」

野菜が魔法で茶々丸さんを攻撃してきた。

なぜだ!?

よく見ると野菜は目を閉じている。

そういえば原作でも目を閉じていたのを思い出した。

このままだと茶々丸さんとセイバーに当たる!

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光」

経文よ我らを守りたまえ!」

ドカカカン!

俺はセイバー達の前に出て経文で野菜の魔法を防ぐ。

ふう、なんとかなったな・・・。

「ありがとうございます、マスター」

「二人とも怪我はないか?」

「いえ、ありません」

「私もありません」

どうやら二人とも怪我はしてないようだ。

「それよりも何故私を助けてくれたのですか？」

茶々丸さんが質問をしてくる、まあ数日前のことがあるし聞かれてもしょうがないな。

「私とマスターはただ卑怯者どもの行いを止めるために来ました」

「そうですか」

セイバーが質問に答える、さてどうするかなこの状況……。野菜と神楽坂さんとオコジョはなんか話しているしどうしよう。

「助けていただいた理由はわかりましたが、私はロボットです代わりはいくらでもいます

ですから別によかったのですよ」

なるほどこの時の茶々丸さんはまだ……。しかたがないちょっと、くさいけど言うか。

「でも、この世界で君は君だけしかいないんだ、たとえ代わりが来たとしても

それは君じゃないからね」

「……そうですね」

うん、どうやらわかってくれたらしい恥ずかしい台詞を言ったかいるよ。

「私は絡繰茶々丸と申します茶々丸とおよびください」

「ああ」

「わかりました」

「では……」

シユボー……！

茶々丸さんは頭を下げ飛んで行った。
さて……。

「た、玉藻さんこれはどうゆうことですか!？」

「そ、そうですね、どうゆうことなんですか!？」

野菜と神楽坂さんが聞いてくる。

「それは、あなた方が一人を相手に二人がかりで倒そうとしていたからです」

何故かセイバーが答える。

まだ、怒ってたんだ……。

「あ、あなたは誰ですか？」

「普通は名を聞くとき自分から名乗るものでは？」

「すみません・・・ネギ・スプリングフィールドです」

「神楽坂明日菜です」

「やいやい、こつちも名乗ったんだから、そつちも名乗ったらどうでい！」

「・・・セイバーです」

名乗るセイバー、だけど小動物にイラついていて怖い。
少し話題を変えるか。

ーネギ視点ー

僕はカモくんの言うとおりに明日菜さんと茶々丸さんが戦っているうちに魔法を放つ準備を

して、隙が出来たと思いい目をつむって魔法を撃ちました。

しかし、これは僕の目指すマジステル・マジじゃないと気づき魔法を戻そうと目を開けると

馬のマスクの玉藻さんが茶々丸さんと金髪の綺麗な女の人を守っています。

これはいったいどういう事でしょう？

「ネギ！」

「アニキ!!」

カモくんと明日菜さんが僕の元に駆け寄ってきます。

「明日菜さん怪我はありませんか？」

「ないけど、それいより・・・」

明日菜さんは玉藻さん達の方をむいて様子を見ています。

そう、何故玉藻さんはエヴァンジェリンさんの従者である茶々丸さんを助けたんでしょう？

「アニキ！奴らが喋っている今がチャンスですぜ！

ここは一発派手な呪文をドバーと！！」

「駄目だよ、カモくん玉藻さんに話を聞かないと」

「そ、そうよなにか事情があるのかもしれないし・・・」

僕らが話をしている間に茶々丸さんは飛んでどこかに行ってしまった。

僕達は玉藻さんと金髪の女の人のところに行きました。

そこで話をしてみると、僕の想像ですが

どうやら玉藻さんたちは僕らの間違いを正しに来てくれたようです。やはり玉藻さんは正義の味方なんだと再確認しました。

しかし、カモくんが金髪の人・・・じゃなかった、セイバーさんを挑発してかなり怖いです。

「君達は何をしたか、理解しているのか？」

「・・・はい」

「なんでえ！偉そうにしゃがってこの馬野郎が！！」

「キサマ!！」

「ひっ!！」

やはり、僕の想像どつりに来てくれたと思つたのと同時に反省をしました。

明日菜さんも同じ考えに至つたのか、玉藻さんの質問に僕と答えません。

しかし、初めて玉藻さんと会つたカモくんが何か勘違いをしてしまつて玉藻さんを怒鳴ります。

そして、カモくんの言葉に怒つたセイバーさんがカモくんに殺気を飛ばします。

カモくんは驚いて僕の懐に隠れます。

カモくんに向けられた殺気なのに僕も殺されてしまふのかと思ひました。

「す、すみません!カモくんには後でちゃんと言い聞かせますので許してください!」

僕は急いで謝りました。

するとセイバーさんはもういいという感じに玉藻さんの方を向きました。

「マスター、もう帰りましょう」

「ああ」

このままでは玉藻さん達は帰つてしまふ、せめてもつしないという事を伝えないと!

「玉藻さん！僕はもうこんな卑怯な真似はしません！
正々堂々エヴァンジェリンさん達と戦います！」

僕が玉藻さんに言った後、玉藻さん達はいなくなってしまったけど
たぶん聞いてくれたと思います。

そのあと僕達は、寮にある自分たちの部屋に帰りました。

―明日菜視点―

私は茶々丸さんとデコピンで戦っていた時、金髪の綺麗な女性に私
と茶々丸さんの肩を掴み
私達を引き離す。

そのあとネギが茶々丸さんと金髪の人に魔法を放つ。

ちよつと関係ない金髪の人に当たっちゃう！

私がそう思ったとき馬のマスクの玉藻さんが二人を、魔法？で守り
ます。

そして三人は会話をし始めた。

私は近くにいたカモとネギの元に駆け寄る。

それから、私達は玉藻さんに事情があるかもしれない話をしてい
る時に茶々丸さん

はどこかに飛んでいってしまった。

私達は玉藻さんの所に行く。

そして、話をしているわかった、玉藻さん達は私達のすることを止
めに来てくれたのだと。

本当に優しい正義の味方なんだと思った。

しかし、カモが余計な事ばかり言うせいで金髪の人、セイバーさん
が怒る。

それにしてもセイバーって本名かしらもしかして怒って偽名を名乗
ったんじゃない。。。

まあ、カモの態度ならしかたがないかな。。。

私はとりあえず納得して話を聞く。

そして私とネギに質問をしてきた玉藻さんに返事をする私とネギ。だが、ここでもまたエロガモは……。

「なんでえ！偉そうにしゃがってこの馬野郎が！！」

「キサマ！！」

「ひっ！！」

玉藻さんに失礼な事を言ったカモはセイバーさんに殺気をたたきつけられる

カモはたまらずネギの懐に隠れてブルブルふるえている。

正直いきみだと思うが殺気を出された瞬間、私も殺されると思っ
てしまった。

その後、もう興味はないという感じに玉藻さんに帰るよう言って、
ネギが

最後にもうこんな事はしないと叫んだときにはもう玉藻さんたちは
いなかった。

それよりも、セイバーさんは玉藻さんの事をマスターと呼んでいた
もしかしてそれって……。

私はそんな事を考えながら寮の自分の部屋に戻った。

―茶々丸視点―

私は猫達に餌をあげ終わったときにネギ先生と神楽坂明日菜さんに
襲撃を受けました。

神楽坂明日菜さんと戦闘行為をいている時に金髪の女性に私と神楽
坂明日菜さんは

肩を掴まれ引き離されてしまいました。

その後ネギ先生の魔法の射手がこちらに向かってきたので避けられるか計算をします。

計算の結果、回避は不可能なので私はマスターに対しての謝罪と頼みごとを記録します。

「すみませんマスター・・・もし、私が動けなくなったら猫の餌を・・・」

しかしここで私の前に見覚えのある人物が現れ、経文と呼ばれるものでネギ先生の魔法から私を守ります。

この人物はたしか屋根でネギ先生達といたつまり私は敵のはず。そのあと私は何故、敵である私を助けてくれたのか不思議に思い聞いてみました。

すると金髪の女性がネギ先生たちの行為が許せなかったと答えてくれました。

そして私は別に助けなくてもよかったと二人に言ったら馬のマスクをした男性に・・・。

「でも、この世界で君は君だけしかいないんだ、たとえ代わりが来たとしても
それは君じゃないからね」

「・・・そうですね」

この世界には私しかいないと言ってくれました。
なぜでしょう、少しモーターの回転数が上がっていきます。

私は自己紹介の後ハカセ達に見てもらったため、自己紹介だけをして飛んで帰りました。

四話 野菜逃亡につきオリジナル話その1（前書き）

エムゼロの方も13時ごろに更新されますのでお楽しみに。
これからも応援よろしくお願いします。

四話 野菜逃亡中につきオリジナル話その1

ーエヴァンジェリン視点ー

私は昨日じじいに呼び出された。

理由は桜通りの件がばれてしまったからだ、私は満月まで派手に動けない事を

茶々丸に伝えに行くする、しかし茶々丸の様子がおかしい何かあったのかと聞いても

何もないと答える、まあコイツはもう一人の従者と違って素直だ、だから本当に

なにもなかったんだろう。

もしかしたら何かの不具合か？

まあ、ハカセにも見てもらえば大丈夫だろ。

それにしても、あの馬マスクいったい何者だ？

魔法生徒や魔法教員でも経文を使う人間はいなかった。

だとすると奴は……。

ー雄介視点ー

今日俺は学校の美術の宿題である絵を描きに世界樹の前に来ている。

それにしてもでかいな……。

マンガと違って迫力がある。

そして、俺は集中して書き始めた。

書き終わった後回りを見てみると人影はなく暗くなってきた。

俺は帰ろうと準備をするのだが、小さいが今まで感じた事のないものを感じる。

俺は一応、馬のマスクをして感じる方向に歩き出した。

そして世界樹の近くにある森の中に入っていき、するとそこにいたのは
半透明の小さな10歳くらいのパジャマ姿の女の子だ、
女の子は寂しそうに座っている。
知識のお陰で幽霊だと分かったのだが、この子はなぜこんなところに？

俺は無害そうなのでマスクを取り、女の子に話しかけるため近づく。

「どうかしたのか、こんな所で？」

「お兄ちゃん、私が見えるの・・・？」

「ああ」

質問に答えてくれる女の子、どうやら意識もはっきりしているし話も通じるようだ。

これで通じなかったら鬼の手を使って話す事になっていたな。

「それで、どうしたんだ？」

「わからない気がついたらここにいたの」

どうやらこの子は自分が何故このような所にいるのか理解していないらしい

相坂さよさんみたいに忘れてしまったのだろうか？

「そういえば、お兄ちゃんは誰？」

「俺か？俺は鶴野 雄介だ、君は？」

「私、佐藤 雪江よろしくね、お兄ちゃん」

「ああ、よろしく」

少女は雪江ちゃんという名前らしい。

それから俺はしばらく雪江ちゃんと話をする。

「あのさ雪江ちゃんは成仏したい？」

「それはしたいけど、どうして？」

「俺が雪江ちゃんを成仏させてあげられるからだ」

「ほんと？」

雪江ちゃんは成仏できるのが信じられないのか聞いてくる。

「もちろん本当だ」

「そっか・・・」

ん？思ったより反応が・・・。
もしかして。

「なあ、もしかして心残りがあるのか？」

「そうじゃないけどもう少し町を見ていたいんだ」

「..どうして？」

俺はなんで町を見ていたのか聞いた。
もしかしたら何かほかにあるのか？

「成仏する前に私が住んでいた町を見てここに私が居たんだったって、自分の心に刻みこみたいんだ」

「そうか・・・わかった、じゃあ好きだけ見ておいで、俺は準備しているから」

「うん、ありがとう雄介お兄ちゃん！」

元気よくお礼を言った雪江ちゃんはピューと世界樹の広場へと飛んで行った。

お兄ちゃんか・・・久しぶりに言われたな。

思わず妹の事を思い出してしまったが今は雪江ちゃんを成仏させるため経文をポケットから取り出す。

正直、準備なんて必要がないのだが少しでも雪江ちゃんが満足できるように時間を作りたかったのだ。

それから20分ぐらい経ったおかしいさすがにもう来てもおかしくないはずなんだが・・・。

！？

突然世界樹のほうから雪江ちゃんとは違う気配がしたまさか！

俺は嫌な予感がして雪江ちゃんが向かった世界樹の方に走り出した。

「きゃーっ！ー！」

雪江ちゃんの叫び声が聞こえた、まずい！

俺は森を抜け出し世界樹の広場にたどり着いた。

そして広場の中心で鬼に捕まっている雪江ちゃんの姿が目に入った。

「おい、その子を離せ！」

「ん〜？」

「お兄ちゃん！！！」

俺の声に反応した鬼がこちらに振り返り、捕まっていた雪江ちゃんも俺に気づく。

「離せと言っているのが聞こえないのか？」

「聞こえているが、それは無理だな」

「何故だ？」

「今度あったら勝ちたい譲ちゃんたちが出来てな、俺は強くなりた
いだから

この譲ちゃんの魂を食べて、俺の糧にして俺は強くなる」

なるほど、覇鬼が美奈子先生を食べて力にしたように
コイツも雪江ちゃんを食べて力にする気のようなのだ。

「悪いがそうはさせない！宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光
経文よ、鬼の動きを封じたまえ！」

「何！？」

「きゃあー！」

経文が鬼の動きを止めた時、苦しいのか鬼が雪江ちゃんを放す。

「お兄ちゃん！」

「ぐううう！！おのれええ！！！」

鬼から離れた雪江ちゃんが俺の後ろに隠れる。

よし、もういいな。

「初め言ったときに離していれば、別になにもするつもりはなかったが

お前は俺を怒らせた」

さすがに送り帰そうと思ったがコイツは許せない。

俺は鬼の手を出し鬼に近づく。

「な！？お前同属だったのか！！！」

「知るかそんな事、黙って無に還れ！！！」

動けない鬼を鬼の手で切り裂き存在を抹消した。

そして、雪江ちゃんの無事を確かめるため振り返る。

「大丈夫か？」

「うん、大丈夫だけどお兄ちゃんその手・・・」

どうやら大丈夫なようだが雪江ちゃんは俺の手を見ている。

小さい子はやっぱり怖いよなこの鬼の手はどういったものか考えているとき。

「大丈夫だよお兄ちゃん、怖くないから」

怖くないと話しかけてくれる雪江ちゃん正直嬉しいが何故？

「どうしてだ？怖いだろこの手」

不思議に思い、思わず聞いてしまった。

もしかしてこうゆうの好きなの？

「助けてくれたお兄ちゃんの手だもん！大丈夫だよ！！」

元気よく笑顔で答えてくれる雪江ちゃん。

ああやばい涙でそう。

「じゃあ、そろそろ成仏するか？」

「うん！短い時間だったけどお兄ちゃんありがとう！！」

雪江ちゃんは目に少し涙を流しながら笑顔で答る。

俺は泣きそうになるのを必死に抑え経文を雪江ちゃんの肩にかける。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光
吾人左手 所封百鬼尊我号令 只在此刻
天地混沌 乾坤蒼茫人世蒙塵 鬼怪猩狂」

「暖かい……ありがとう、お兄ちゃん……またね……」

「またな……」

経文が光、雪江ちゃんを天へと導いた。

雪江ちゃんが成仏した後、我慢していた涙が出た。さて、俺も鬼の手しまつて寮に帰るかな。

「待つてください!」

後ろから声を掛けられ思わず振り向いてしまう。

―刹那視点―

私とマナが西の侵入者を捕まえたのだが、鬼を一匹戦闘時に逃がしてしまった

ため私とマナはその鬼を探すため走り回った、そして世界樹の広場の方で強い魔力を感じ

たのでそこに向かった。

そこでは銀の髪をした男性と幽霊の少女それと私達が探していた鬼が居た。

初めは襲われていると思いつけに行こうとしたが、どうも様子がおかしい。

よく見ると鬼は男性の経文に締め付けられている。いったいどういう事だ？

「初め言ったときに離していれば、別になにもするつもりはなかったが

お前は俺を怒らせた」

男性の声を聞いた瞬間、男性の左手が異形のものへと変化し男性の目は黒から赤色になった

一体なんなんだあの手は、とてつもない力を感じる。

「マナあれが何か分かりますか？」

「……………」

「マナ？」

マナの様子がおかしい話しかけても青い顔をして男性を見ている。
もしかして魔眼で何か見たのか？

「マナ見えたんですね、何を見たんです？」

私はマナを揺すりながら質問をしました。

「……鬼だ」

「鬼？」

もしかして、縛られている鬼の事だろうか？
でもあの鬼からはそんなに強い力を感じないが？

「あの男を見たとき、あそこで縛られている鬼より強力で、とても
比べ物にならない鬼が見えた
私達では簡単に殺されてしまうだろう」

「なっ！！」

マナが言った事は信じられなかった。
だが、マナの実力は私がよく知っている。
そのマナにここまで言わせると言う事は、奴は相当強い。

「な！？お前同属だったのか！！」

「知るかそんな事、黙って無に還れ!!」

男性が左手で鬼を切り裂く、そして信じられない事に鬼は還るのではなく消え去ってしまったのだ。

すごい……。

しかし、消える前に鬼が同属と言っていたどうやらマナの言う通り強大な力を持つ鬼で間違いないだろう。

それにしても何故、鬼は同属を倒したのでしょうか？

私がそんな事を考えているとき幽霊の少女の声で思考が途切れた。

「助けてくれたお兄ちゃんの手だもん！大丈夫だよ!!」

幽霊の少女の言っている事が一瞬、理解できなかった。

助けてくれた？あの鬼が？

「刹那どうやらあの鬼は幽霊の少女を助けるために鬼を倒したようだ」

私が理解できていない事を悟ったのか教えてくれるマナ。

そうか、少女を助けるために……ん？

鬼とは元来、人に厄災をあたえるものだ、じゃあ奴は一体……。

「じゃあ、そろそろ成仏するか？」

「うん！短い時間だったけどお兄ちゃんありがとう!!」

は？鬼が幽霊の少女を成仏？そんなこと鬼が出来るはずがない。

じゃあ人間なのか？

頭の悪い私ではこれ以上考えるのは無理と判断し、マナと様子を見

る事にした。

「宇宙天地うちゅうてんち 與我力量降伏群魔よがりきりょうこうふくぐんま 迎來曙光ようらいしゅくわう
吾人左手われんざしゅ 所封百鬼尊我号令しょほうひゃくきそんがこうれい 只在此刻ただいましゆく
天地混沌てんちこんとん 乾坤蒼茫人世蒙塵けんこんそうほうじんせいもうじん 鬼怪猩狂きかいしゅうきやう」

「暖かい・・・ありがとう、お兄ちゃん・・・またね・・・」

「またな・・・」

鬼と思っていた男性が経文を少女の肩に掛け経文を唱える。

すると少女は安心した笑顔で男性にお別れを言い、天に導かれ成仏した。

その後、私は男性に視線を戻す。

そして、男性は少女の別れが辛かったのか涙を流す。

そこで私はあることに気がついた、鬼でもない人でもないつまりそれは・・・。

私と同じ半妖という事になる。

男性がこの場を去ろうとしたとき私は思わず男性を呼び止めてしまいました。

男性は振り向きこちらを見ます。

「なにかようか？」

「貴方は何者なんですか？」

今は男性が半妖であることよりもお嬢様の敵になるかどうかを確かめなければ。

「別に名乗るほどのものじゃない、時間も遅いし帰らせてもらおうよ」

「まっ……！」

待つてと言う前に男性は瞬動で消えてしまった。

いや、早すぎて消えたように見えた。

やはり強い……。

「刹那この事を学園長に報告しに行くか？」

「そうですね」

敵か味方がまだわかりませんが、どうか害ある存在ではないことを祈りながら

私達は報告のため学園長の元に向かった。

ーマナ視点ー

私は今、刹那と学園長の元へ向かっている。

そして、先程の事を思い出す。

あれは間違いない……あれは鬼だった、強大で恐ろしい存在。

あのエヴァンジェリンよりも格上の存在だと私は思う。

しかし、彼は鬼のはずなのに人間らしさがあった。

それは、私の想像だが彼はもしかしたら半妖なのかもしれない。

そしてもう一つ、これは可能性が低いのだが彼がああ鬼を自分の左手に封印したのかもしれない

ということだ。

まあ、それはいつか彼と会ったときに聞くとしよう。

四話 野菜逃亡につきオリジナル話その1（後書き）

次回もオリジナル話になります。

五話 奥義、陽神（ようしん）の術 オリジナル話その2 （前書き）

感想で急ぎすぎているというご意見をいただきました。
たしかに更新を早くしないと、と思い焦っていました。
課題が終わったら少し修正を加えたいと思います。
これからも応援よろしくお願いします。

五話 奥義、陽神（ようしん）の術 オリジナル話その2

― 雄介視点 ―

昨日美術の宿題を終わらせたのはいいが桜咲さんと龍宮さんに素顔を見られてしまった。

これは、ぬらりひょんにばれるのも時間の問題だな。

まあ、その時に何とかすればいいだろう。

それよりも、今日はぬゝべゝの奥義（おんぎ）「陽神の術」を試そうと思う。

しかし、術の使用中は力を一切つかえない保険のためセイバーを呼んでおこう。

「こい、セイバー」

ペアア

「はい、マスター」

床に展開された魔方陣からセイバーが出てきた。

「セイバー、これから俺は試したい術を使用する

使用中は俺は力が使えなくなるからもしもの時のため待機して欲しい」

「わかりました」

了解して、頷くセイバー。

さて始めるかな。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光、
陽神の術！」

ポウ！

「なるほど、この量だと小学生の体になるのか」

術は見事に成功した、だが最初だから練った力を少なくしたせいで小学生ぐらいの体になった。

近くにあった手鏡で自分を見る。

年齢は大体9歳〜10歳ぐらいかな？

しかし、この術は気や魔力を練るから、この体は力の塊なんだよな。もし、魔法使いに見られたらばれるかな？

ちょっとセイバーに見てもらおうか。

「セイバーちょっと・・・」

「・・・はっ！はい、なんででしょう!!」

何かセイバーの様子が・・・。

まあ、いいそれよりも質問だ。

「セイバーこの体どう見える？」

「へっ！か、体ですか!？」

しまった、もうちょっと分かりやすく説明しないと。

しかし、セイバーがなんか別の意味で怖く感じる。

「セイバー俺は今、この体を魔力と気の力で作っている

だからお前の目には普通の人間として映っているかを聞きたいんだ」

「そうですね・・・しかし魔力と気もそこらに歩いている一般人と変わりませんよ」

「・・・そうか」

さっきほどの態度とは違って今度は真面目に答えるセイバー。

よかった、どうやらさっきのは気のせいらしい。

そして、セイバーの話聞いてわかった事がある。

つまり、この術は小学生くらいの姿なら誰も感知できないという事だ。

そうなる、この術はかなり使えるかもしれない。

とりあえず体を動かすため外に出るかな。

「とりあえずこの体で何が出来るか調べるために外に行ってくるよ」

「わかりました、では私はここで待機しています」

「それじゃあ、行ってきます」

「行ってらっしゃいませ」

そして、俺は寮から出て街に向かった。

ーセイバー視点ー

今日マスターに、呼び出された私は現在もしもの時のため自宅待機をしている。

しかし、先程のマスターには驚いた。
マスターは試したいと言っていた術を使い9歳〜10歳くらいの少年に姿を変えたのだ。
正直、子供姿のマスターは今のかつこよさを残し愛らしくなられた。
私は抱きしめたい衝動を理性で抑え、マスターを送り出した。
もし、抱きしめさせて欲しいと言ったら了解してもらえるだろうか？
今度聞いてみよう。

―雄介視点―

街に来たとき妙な寒気を感じた。
もしかしてこんな時期に風邪でもひいたかな？
そんなことを考えながら街を歩く。
それにしても回りの物が大きく感じる。
子供の頃を思い出すな。
どうせならついでに買い物をして行こうと食料を買いに店に入る。
そして食材を籠の中に入れて、レジに持っていく。

「合計、三千二百十五円です」

レジの女の人に、お金を払おうとポケットに手を突っ込んだとき。
しまった！財布は本体のポケットの中だ！！

「す、すみません！どうやら財布を忘れて来ちゃったみたいで・・・」

「ちょっとお待ちなさい」

謝って、商品を返しに行こうとした時だ。
後ろの列から、待ったの声が掛かった。

女の人の声だったけど誰だろ？

「その子のお金は私が払います」

「まあまあ、あやかったら」

なんと、声を掛けて来たのは野菜のクラスの雪広 あやかさんと那波 千鶴さんだった
しかし何故？

「あの、別にいいんですよ、そんな事をしなくても・・・」

「気にしないでください、私が勝手にやっている事ですから」

とても、いい笑顔で答える雪広さん。

その後も何度か遠慮してみるも聞いてもらえず。
結局そのまま会計を済ませ外に出る。

「あの、お金は後で返しますので住所を教えてください」

さすがに、初対面で奢ってもらうのはいけないと思い返すために住所を聞く。

「さきほど言ったように、気にしないでいいですよ」

「でも・・・」

どうしよう、全然聞いてもらえない。

那波さんはニコニコ見ているだけだし。

ちなみに何故敬語で喋っているかという俺は子供の頃はこんな感

じだったからだ。

「じゃあ、私達の買い物に付き合ってください
それでなしということでもいいです」

「へ？」

「それはいい考えね、あやか」

凄い笑顔ので言ってくる二人。
もしかして選択ミスった？

「そらじゃあ、さっそく服を見に行きましょう!」

「ええ!」

「ほほほほ」

すぐく目をキラキラさせた雪広さんに手を引かれ那波さんは笑いながら

後を付いてくる。

誰かたすくけくて・・・!

そして服の専門店に拉致された俺。

しかし、しかしだ・・・。

「きゃ、とても愛らしいですわ!」

「そうね、あやか」

愛らしいと評価する、雪広さんと那波さん。

何で俺の服選びに〜!!

そう、何故かこの二人は俺を子供服の売り場に連れて行き、俺を着せ替え人形にしているのだ。

誰かヘルプミ〜!!!

「あら、そういえばまだお名前を聞いていませんでしたわ」

「そういえばそうね」

名前を聞くこととする二人。

まずい！名前なんて考えてない！！

「名前はなんていいますの？」

「陽神 準じゅんです」

名前を聞かれ、とっさに名乗った。

名字はまんまめ〜べ〜のあれだが、名の方はオリジナルにした。

「準さんですか、いい名前ですはね」

「そうね」

その後も着せ替えをさせられ三時間ぐらい経ったときによつやく開放された。

そう思っていたがその後も色々つれまわされる事に。

そして近くのベンチに座り世間話をする。

「それにしても準さんは偉いですわね」

「へ？何故ですか？あやかさん」

あれから、仲良くなり二人とは名前で呼び合う仲になった。

「だって家のお手伝いのためにお使いをしていたのでしょっ？」

「いや、別に手伝いじゃなくていつも自分でやっているんですよ」

「え？じゃあご両親はどうしているの？」

両親の事を聞いてくる那波さん。

両親か、この世界だと両親の設定はたしか……。

「両方とも事故で死んでます」

「へ？」

しまった、うっかり喋ってしまった！

二人とも啞然と俺を見ている。

どうしよう……。

しばらくの、沈黙の後冷静になったあやかさんが口を開く

―あやか視点―

私は今日、千鶴さんと買い物をしていた時、運命の出会いをしてしまいました。

銀の髪をなびかせ、会計をする私の理想の少年がいました。

少年は財布を忘れたようでレジの人に謝り出したので。

思わず、守りたいと思って口をはさんでしまいました。

少年は私に遠慮して、別にいいといいますですがせっかくの出会いをふ

いにしたくないため。

私は無理やり押し切ってレジで会計をしました。

その後の少年の謙虚な姿がますます愛らしいこと。

私はお金の代わりに私達の買物に付き合うように言って

千鶴さんと三人で少年を子供服の売り場に連れて行きさまざまな服を着せ替えました。

かわいい！かわいすぎます！

そして23着目で少年の名前を聞くのを忘れていた事に気づき質問をします。

名前は陽神 準さん素敵な名前です！

しかし準さんは銀髪で外国の方だと思っていましたが一ーフなのでしょうか？

まあ、その事は後で聞くとして。

準さんの着せ替えを千鶴さんと再開しましょう。

そして40着目で着る服がもうないと言われ仕方がなく外に出る事に。

それから、夢のような幸せな時間を過ごし近くにあったベンチで世間話をします。

そして準さんにあやかさんと言われるたび幸せな気持ちに……。

間違いない、これは恋です！

それから、世間話が続き準さんの両親の話になりました。

しかしここで、私達は後悔をします。

なんと、準さんの両親は亡くなっているのです。

ネギ先生と同じくらいの歳なのに……。

私は、冷静になり口を開きます。

「準さんは今、誰かと暮らしていますか？」

「はい、親戚の人と暮らしています」

よかった、一人ぼっちと言う訳ではないようです。
では何故一人でいつもお買い物？

「じゃあ、何故一人でいつもお買い物？」

「いや、親戚にお世話になっているからせめてこれだけはやらして
欲しいと

言って、それから習慣になったんです」

「そうでしたの」

「偉いわね」

千鶴さんの言うとおりなんて偉いのでしょう。
それからしばらく明るい会話をして。

準さんと別れ自分の部屋に帰ります。

あゝ準さんまたどこかでお会いしたその時は
フッフッフフ……。

―千鶴視点―

なんかあやかが黒いわ。

でも、確実に準君に惚れたわね。

しかし、あの子どもか不思議な感じがしたわ。

まるで頭は大人、体は子供みたいだった。

気のせいかしら？

もし、あの子が歳相応なら私も危なかったわ。

でも、せっかくお友達になったのだからまた会いたいわね。

「フフフフ、そして準さんを・・・」

あらあら、あやかがいけない扉を開いてしまいそうだわ。
帰ったら、直るかどうかわからないけどネギでも刺してみましよう。

―雄介視点―

あやかさんたちと別れ自宅に帰還した俺は元の体に戻る。

セイバーはなにやら残念そうな顔をしていたがまあ、いいだろう。

その後、セイバーを帰して暇になり本屋でライトノベル的な物を買
いにいくため
再び外に出る。

もう外に出たくなかったが寮の部屋には娯楽のためのものがなく
時間をもてあますのは勿体無いと思ったから娯楽になりそうな本を
買いに行くことにしたのだ。

そして今、俺は本屋に来ている。

しかし、どれもこれも俺の趣味には合わないものが多い。

しかたがないからマンガの売っている場所に行こうと歩き出したの
だが・・・。

トン

「きゃー！」

ばさ

歩き出したとき急に前を通る女の子に反応できずぶつかってしまっ
た。

ぶつかった女の子は驚き本を落としてしまった。

「すまない、大丈夫か？」

「あ……はい、こちらでも考え事をしていたもので……すみません」

落ちた本を拾い、女の子に渡す。

あれ？この子ってたしか宮崎のどかさん？

しかし、少し元気がないひょっとしてこの間の桜通りの事をまだひきづっているのかな？

まあ、俺の素顔知らないしここは大人しく帰るかな。

「これからは、気をつけなよ」

「はい」

そして宮崎さんを背に歩き出す俺。

「あの待ってください！」

「何？」

いきなり宮崎さんに呼び止められた一体何なんだろう？

「あ……あなたは桜通りで馬のマスクを被っていた人ですよね？」

少し申し訳なさそうに聞く宮崎さん。

ばれた！！まさか！何で！？

「どうしてそう思う？」

「あなたの後姿と銀の髪が一緒だったので」

あ、これ確定だ、いいわけのしようがない。

まあ、べつに宮崎さんに経文を使っている場面を見られたわけじゃないし。

別にいいかな？

「それで、あの後で近衛さんに聞きました、助けてくれてありがとうございます」

「別に気にしなくていいよ」

頭を下げてくる宮崎さん、正直に偶然だとは言えない。

「それで、聞きたかったんですけどなんで馬のマスクをしてたんですか？」

「それは・・・」

その後、何故馬のマスクをしていたかを宮崎さんに嘘を混ぜて話した。

それからお互いに自己紹介をして、仲良くなり

近衛さんたちには内緒にして欲しいと頼んだ。

そして、助けてくれたお礼に図書券をもらいその図書券で宮崎さんにオススメの本を買って。

帰る事にした。

あれ？俺けっこうやばくない？

―のどか視点―

私は桜通りの事件以来ずっと、あの銀髪の馬のマスクの人にお礼がしたくて探したのですが

見つかりませんでした。

それで日曜日の今日、私は明日はどこで探すか考えながら本を抱えレジに向かいました。

そして、考え事をしていたせいで誰かとぶつかってしまいました。

その人は私が落とした本を拾い上げ渡してくれます。

そこで私も謝りその人の顔を見上げます。

するとその人は私の探していた人と一緒に銀髪の人でした。

もしかしたらこの人が……。

しかし、私は返事をするだけで何もいえなくなっていました。そして、その人が後ろを向いて歩き出したとき私は確信しました。

あの後姿は間違いない、この人だ！！

私は勇気を出し話しかけました。

それから話は進み、私はお礼と聞きたかった事を聞きました。

なんでも雄介さんは桜通りの吸血鬼を調べるためあそこに居て

私に来て犯人かもしれないと思いきやマスクをしたのだそうです。

それにしても学校のために調査を自分でするなんて凄い人なんだな

私は感心しました、そのあと近衛さん達にはれると恥ずかしいと言
うので

内緒にすると約束しましたそのあと世間話をして雄介さんと仲良くな
り。

お礼の図書券を渡して私のオススメの本を教えてあげて帰る事にな
りました。

それにしても雄介さんかつこよかったなまるでモデルさんみたいで
す。

しかし、私は男性恐怖症なのになんで雄介さんと仲良くなれたんでしょう？

それに、雄介さんの事を考えると顔が熱くなってきました。

さっきは大丈夫だったのに何ででしょう？

私は寮にある自分の部屋に帰りました。

また、雄介さんと話したいな・・・。

五話 奥義、陽神（ようしん）の術 オリジナル話その2 （後書き）

次回Cパートになります。
お楽しみに。

六話 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼「Cパート」

― 雄介視点 ―

ついに来たかこの時が。

今日は停電の日、そして……。

待ちに待った停電セール！！

お一人様に限りろうそく10本とカンパンとその他食品がセットで
395円なのだ！！

俺はセイバーを呼んで並んで買った。

「いや〜いい買い物したな〜」

「そうですね、マスター」

そのあと寮の部屋に帰りセイバーと、ついでにセールで買った二人
対戦のテレビゲームをする

「マスターそろそろ停電しますよ」

「あ、そうだな」

セイバーに言われて気づいた、どうやらかなり時間やっていたらしい。
い。

ゲームを切り食事とろうそくの準備をする。

「マスター、時間ですので火をつけます」

「頼む」

セイバーが火をつけて数秒たった時、街の明かりが全て消えた。

「じゃあ、食べるか」

「そうですね」

準備した料理を二人で食べる。

食べ終わって思ったのだが、この後どうしよう。

正直暇になってしまった。

食べ終わった皿を洗いながら何をしようか考えていたとき

セイバーが真剣な表情になった。

どうしたんだ？

まさか！料理に当たったのか！？

「マスター」

「なんだ？」

「闇に属する者の魔力を感じました、それもかなりの強者の部類でしょうが私達の敵ではありませんね」

どうやら、幼女の力を感知したらしい。

そういえば確かに感じる。

でも俺にはそんなに強く感じないんだが……。

まあ、ラカンを余裕で倒せるくらいの実力はあるって神の手紙に書いてあったし

それが原因だろう。

「マスターもしかしたら一般人が危険に晒されるかもしれません

いきましよう」

「いや、ちよつとま・・・」

「転移魔法を使い、現場に行きますので捕まってください」

パアア

シユン

待ったをかけようとしたら、鎧姿になり腕を掴まれ無理やり転移させられる俺。

あ・・・なんかデジャブ・・・。

そして、転移した先は空中だった。

その後、落下を開始する俺とセイバー。

しかし、なんで空中？失敗したのか？

って、そんな事を考えている場合じゃない！

まずいよこれ！厄介ごと一直線だよこれ！！

何でこうなるの！

俺なんか悪い事しました！？

ゴン！

「イダッ！」

「ブッ！！」

パサ

着地しようと準備を始めたとき。

頭を何かにぶつけて、アスファルトの地面に落ちる。
いって〜!!

一体なににぶつかったんだ？
ぶつかった物を見ようと体を起こし立ち上がる。

「いたたた、いったい何なんですか？」

うずくまり頭をさする野菜。

どうやら野菜の頭の上に落ちたようだ。

「マスター、平気ですか？」

「ああ、大丈夫なんだが・・・」

状況確認のため回りを見渡す。

右、数メートル先にこちらを睨みつけている少女と物静かにこちら
を見てくる

茶々丸さん。

「ほう、予想はしていたがやはり来たか」

腕を組みこちらを見る少女。

あれ？ひよっとしてばれてる？
なんで？

「しかし、今日はその馬のマスクをつけなくていいのか？」

「えー！！あなた玉藻さんだったんですか!？」

少女が復活して叫ぶ野菜の足元に視線を向ける。

思わず、俺もつられて視線を向ける。

視線お先には見覚えのあるマスクが落ちていた。
ぎゃー！！さつき、ぶつかった時に落としたんだ！

「まあ、いいだろうそれより貴様がここに来たという事は私と戦うのか？」

「ち「もちろんです、マスターと私はそのために来たのですから」

幼女の質問に違つと答えようとしたら、セイバーが答えてそうですよ
よね

といわんばかりの顔でこちらを見る。

ああ・・・もしかして呼ぶ人を違えた？

「はははははは！面白い、貴様ら私が誰だか分かって言っているのか？」

私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

賞金額600万ドルにして、最強無敵の悪の魔法使いだ！」

どうだ！と言わんばかりにふんぞりかえる幼女。

なんかめちゃくちやなめられてるな・・・。

まあ俺もセイバーも今は魔力とか抑えてるし、自分より弱いと思っているんだろ。

「コラー！！ 待ちなさい！！！」

「ちつ、神楽坂明日菜か、いい所で邪魔が入った」

後ろの方から声がする、どうやら神楽坂さんが来たらしい。

―明日菜視点―

私が眠っていたときエロオコジヨに起こされた。

まったくくだらないことだったら捻るわよ……。

エロオコジヨの話を聞くとなんでも、ネギが一人でエヴァンジェリンに戦い

に行ったらしい。

まったく、あのネギ坊主は！

私とエロオコジヨはこのかを起こさないように外に飛び出した。

「エロオコジヨ！あんたネギの居場所分かる！？」

「カモツス！姐さん、居場所ならアニキの魔力感じるんで大丈夫ツス！」

そして、私はエロオコジヨの言うとおりに道を進み、橋の近くまで来た。

あの人影つてもしかして……。

「姐さん！あそこツス！」

オコジヨも小さな指をさす。

間違いないみたいね……。

私は走るスピードを上げる。

「コラー！！待ちなさい！！！」

茶々丸さんが私の目の前に立ちふさがろうとこちらに向かって来る。私は肩に乗っていたカモを片手に持って投げるモーションをとった。

「カモ!!」

「合点、姐さん!!」

そしてカモを茶々丸さんの前に投げる。

「オコジョフラーシュ!!」

「!?!」

カモが持っていたライターとマグネシウムで光を作り出し。
茶々丸さんを足止めする。

「ごめん、茶々丸さん」

私は茶々丸さんに謝り、通り抜けるとエヴァンジェリンに向かって
一直線に走る。

「ア、アスナさん!!」

「フン、たかが人間が私に触れる事すらできんぞ」

片手を前に突き出すエヴァンジェリン、何かする前に蹴る！
私は勢いを利用してエヴァンジェリンに飛び蹴りをする。

ゴッ!

「あぶろばあ!!!!」

意味不明の言葉を叫びながら十メートルくらい吹き飛ぶエヴァンジェリン。

すぐさまネギの無事を確認するためネギの方を見る。

すると銀の髪をした美形の男の人とこの間、

玉藻さんと一緒にいたセイバーさんがネギの近く立っていた。

もしかしてこの銀髪の人って玉藻さん!?

「あゝもしかして玉藻さんですか？」

確認のため聞いてみる。

「まあ、そうだな」

「えー！！」

普通に答える男の人、いや玉藻さん。

そして、私が驚いていると。

「姐さん！早くアニキと・・・！」

茶々丸さんの足止めをしていたカモが来て固まる。

セイバーさんが怖いのかな？

「それよりも何で玉藻さん達がここにいるんですか？」

「それは・・・」

「待て、セイバー」

玉藻さん達の事だから戦いに来たものだろうと思ったが他にも理由

があるかもしれないと思い
聞いてみたのだが……。

セイバーさんが話そうとした所を玉藻さんが止める。
なぜ？

「俺達はただ、ネギ君の戦いを見に来ただけだ」

「あの、それってどうゆうことですか？」

私の思っていた答えとは違う答えが返ってきた。

ネギも予想外だったらしく驚いた顔で玉藻さんを見る。
私は思わず聞いてみた。

「ネギ君、これは君の戦いだ君自身がなんとかしないといけない
君が目指すもののために、わかるな？」

「はい！」

どうやら、玉藻さんはネギを見守るために来たようだ。
それから私とネギとカモが仮契約を交わすため隠れる。

ーセイバー視点ー

私は食事の後に感じた魔力が危険と感じ、マスターに報告し一般人
が危険に晒される

可能性を考え、マスターの腕を掴んで転移魔法で飛ぶ。

しかし、転移をするさいマスターが何か言った気がする。

聞こえようと思ったが、転移先をミスしてしまい目的の少し上空に来て
しまった。

私は着地できたか、マスターは真下にいたネギという赤毛の少年に頭からぶつかり落ちてしまった。

私は痛がるマスターの近くに行き無事を確かめた。どうやら平気のようです。

それからずいぶん大人向けの服を着ている少女が話しかけてきます。寒くないのでしょうか？

しかしこの少女が魔力の正体とは・・・以外です。

それから、少女がマスターに質問をしますがマスターが答えるまでもないと思い私が答えました。

そして、少女が自分は真祖の吸血鬼だと正体を明かしました。

なるほど吸血鬼ならこの魔力は理解できる。

相手にとって不足はない。

私が吸血鬼に切り込もうと足に力を入れたときだ

ツインテールの少女たしか神楽坂明日菜といいましたか

その神楽坂明日菜が叫びオコジヨを投げ、神楽坂明日菜に向かった茶々丸の前でオコジヨが光る。

そして、神楽坂明日菜が吸血鬼に向かい走っていく。

危ない！

吸血鬼が手をかざし何かをしようとする。

私は止めようと動こうとしますが。

驚く事に彼女は吸血鬼の魔法障壁を何の抵抗もなく抜け10メートルほど蹴り飛ばしたのです。

さすがの私もあんなに簡単に障壁を抜けることは不可能なのに彼女は一体・・・。

それから彼女がこちらに向かってきます。

そこで初めて出会ったときも、マスターのことを玉藻と呼んでいたが何なんでしょうか？

この戦いが終わったら聞いてみましょう。

そして彼女がマスターになぜここにいるかを質問します。

私はマスターのかわりに答えようとしたが、マスターに止めら

れました。

何故でしょう？

そして、マスターは驚くべき事を口にします。

マスターは戦わないと言っのです。

何故ですか！？と私が聞こうとしたら。

神楽坂明日菜が聞きます。

そして、私は自分があさはかだった事を知ります。

この戦いはネギという少年の戦いだったようなのです。

ようやく、マスターが最初何かを言っていた事が理解できました。

おそらくそれを知っていたから、私を止めようと何か言ったのでしよう。

それを私は聞かなかった、自分が情けなく感じた。

こんなんじゃマスターを守るなんて夢のまた夢だ私は心の中でマスターに謝罪し。

後で、改めてマスターに謝罪しようと心に決めました。

そして、マスターの情報能力に感心しました。

この人が私のマスターでよかった。

私は心の中で反省とマスターへの忠誠を改めて誓いました。

―雄介視点―

ふう、なんとかそれっぽいセリフを言ったら何とかなった。

しかし、なんか俺を見るセイバーの目がなんかすごいキラキラしているような気がする。

まあ、いいだろう。

その後、野菜が張り切りだし仮契約のため柱に隠れる。

さて、見物をするかなその場を少し離れるため歩き出す。

「おい、貴様らさっきは戦うなどと大きな事を言っておいて見物を

決め込むつもりか？」

なんかかなりの殺気を出してこちらを見てくる幼女。
あららこりゃあまずいかな？

なんか言って野菜が来るまで時間稼ぎしますかな。

「さっきのは従者の早とちりだ、俺に戦闘の意思はない」

「ふん、まあいいだろう坊やの血を吸って完全開放したときに貴様
らを八つ裂きにしてやる」

俺は殺気を飛ばしまくってくる幼女を無視して離れるため歩き出し
セイバーも黙って俺についてくる。

「すみません、マスター私はマスターの考えに気づかず余計な事を
・・・」

ある程度の距離をとって止まった時セイバーがさっきの事で謝罪し
てきた。

正直、嘘だから謝罪してくるセイバーに申し訳なく思う。
だからさっさとこの話題は終わらせよう。

「気にするなセイバー、今度から気をつけてくれればいいから、も
うこの話は終わりだ」

「はい、わかりましたマスター」

「ふん、ようやく出てきたか」

おっと、こっちが会話をしている時に野菜が出てきたようだ。

「ふふっ……どうした、ぼーや？お姉ちゃんが助けにきてくれてホッと一息か……？」

「うぐっ……」

「気にすんな、アニキ！」

「何言ってるのよ！これで2対2の正々堂々互角の勝負でしょ！？」

挑発する幼女、野菜は凶星をつかれうめく。

そして、慰めるオコジヨと言い返す神楽坂さん。

しかし、2対2と言うのが小動物会わせたら3になるのでは？

俺はそんな事を考えながら様子を見る。

「そうだな、双方パートナーも揃ってようやく正当な決闘という訳だ、

だが互角かな？坊やは杖なしで奴もただ見物をするだけ、それに貴様は

戦いの素人だろう」

二人を見ながらもっともな事を言う幼女。

早く終わらせて欲しい……。

「行くぞ私が生徒だということは忘れ、本気で来るがいいネギ・スプリングフィールド」

「……はい」

にらみ合う幼女と野菜。

野菜が右手に持っていたカードを掲げ口を開く。

「契約執行90秒間！！ネギの従者『神楽坂 明日菜』！！！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

野菜はまず神楽坂さんを強化した。

そして、幼女が始動キーを口にしたのを合図に茶々丸さんが神楽坂さんに迫る。

「あた！」

「！？」

「ロケットデコピン！？」

そして、お互いにデコピンを食らわせる。

マンガを読んでいた時から思っていたが何故デコピン？

それから、幼女と野菜の魔法の打ち合いが始まった。

そして……。

「雷の暴風！！」

「闇の吹雪！！」

最後の魔法戦となり、野菜が押し負けそうになるのだが……。

「ハックション！！」

「な、何！？」

ドオン！！

「ネギー！」

「マスター……！」

野菜が原作通りくしゃみで押し勝った。
一応野菜がくしゃみをした瞬間後ろを向いたからセーフだ。
でもこれが終わったってことはそろそろ……。

「いけない、マスター！戻って！！」

バシヤン！

「な、何！？」

茶々丸さんが叫んだ瞬間、橋から街に電気の光が点る。

「予定より、7分27秒も停電の復旧が早い！！マスター！！」

「ええい！いい加減な仕事をしおって！！」

バシン！

「きゃん！！」

「ど、どうしたの！？」

「停電の復旧でマスターへの封印が復活したのです

魔力がなくなればマスターはただの子供、このままでは湖へ……
！！」

封印の復活で湖へ落下を開始し始めた幼女。

さあ、これで野菜がたすけに……。

「しまった、もう魔力が……！」

「アニキ……！」

魔力の使いすぎで疲労した野菜どうやらもう動けないようだ。
ええ！って事はやっぱりくない確実に茶々丸さん間に合わないし。
くそっ……！！

シユン！

がし！

エヴァンジェリンの近くまで瞬動して捕まえる。

そして、経文で橋に捕まるうとするが経文じゃあ、この距離は無理だ。

しかたがない。

「はあ！」

がし……！！

左手を鬼の手にして橋の手すりまで伸ばして掴まる。
ふう、なんとか助かった。

橋にぶら下がりながら徐々に鬼の手を短くして上る。

「おい、貴様なぜ助けた？」

今正直手がいつぱいいつぱいだから答えたくないけど。
とりあえずテキトーに答える。

「さあ？」

「!？」

なんか急に幼女が静かになった、まあ騒がれるよりいいな。
そうして橋にたどり着き幼女を降ろして一息つく。

「マスター、よかったです」

「玉藻さん！大丈夫ですか!？」

茶々丸さんと野菜たちが駆け寄ってきた。

「ああ、平気だ」

「でも、玉藻さんその手・・・」

野菜達全員が俺の左手を見る。

ああ、そういう鬼の手のままだったな。

「これは、大丈夫だ問題ない」

「そうですね・・・」

その後、後日事情説明すると言つて。
とりあえず、それぞれ家に帰る事になつたのだが
野菜が魔法戦で勝つたことで調子に乗り。
名簿にメモしだして、幼女が切れた。
微笑ましいな・・・。

ーエヴァンジェリン視点ー

私は坊やを橋で追い詰め、血を吸おうと近づいたのだが上に魔力を
感じて後ろに跳んだ。

そして、上の方から銀髪の男と金髪の女が降ってきた。
何なんだ、こいつ等は？

金髪の女は見事、着地をするのだが、銀髪の男は坊やに頭から落下
する。

そして、銀髪の男が見覚えのあるものを落とす。

あれは！！

そうあれは桜通りで私の邪魔をした男の被っていたマスクだった。
予想はしていたが、このタイミングで来るということはさては見て
いたな。

しかし、あの金髪の女は何者だ？

奴と一緒だったということから仲間だと思つが人間とは思えない気
配がする。

まあいいか。

「しかし、今日はその馬のマスクをつけなくていいのか？」

「えー！！あなた玉藻さんだったんですか！？」

私が奴にした質問に驚いたように反応する坊や。

そうか、奴は玉藻というのかそれにしても坊やの反応なるほど、坊やにも正体を隠していたのかこの男。

じゃあ坊やの仲間ではないのか？

さて、そろそろ奴の目的を聞かか。

「まあ、いいだろうそれより貴様がここに来たという事は私と戦うのか？」

「ち「もちろんです、マスターと私はそのために来たのですから」

奴の従者が主が答えるまでもないと、いいかげんな顔で言ってくる。そうか、坊やに関係なく私と戦いに来たのか。じつの面白い。

「はははははは！面白い、貴様ら私が誰だか分かって言っているのか？

私はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

賞金額600万ドルにして、最強無敵の悪の魔法使いだ！」

私は名乗りを上げてふんぞり返る。だが、ここで二つの気配を感じた。

「コラー！！待ちなさい！！」

「ちっ、神楽坂明日菜か、いい所で邪魔が入った」

気配の方を見ると、神楽坂明日菜が叫びながら突っ込んできた。ふん、たかが人間が何をするつもりだ？

とりあえず茶々丸に念話で神楽坂明日菜を止めるように指示をした。そして、指示を受けた茶々丸が神楽坂明日菜に向かって突っ込んで

いく。

「カモ!!!」

「合点、姐さん!!!」

神楽坂明日菜が坊やの助言者を片手に持ち、投げるモーションをする。

ん？一体何をするつもりだ？

神楽坂明日菜はオコジヨを茶々丸に投げ光りだした。

くっ！めくらましか!!!

見ていた私はもろに光を見たためよくみえない

くそっ!!!

視界が回復して近くに神楽坂明日菜が近くに来ていた。

させるか！

「フン、たかが人間が私に触れる事すらできんぞ」

私は片手を神楽坂明日菜に向けて掲げ魔法障壁を張る。

ゴッ！

「あぶるばあ!!!」

神楽坂明日菜は私の魔法障壁を破り私は蹴り飛ばされた。
!?

な・・・ま、また、私の魔法障壁が・・・!?

「ぐっ!!!」

私は10メートルほど蹴り飛ばされ着地する。

くそ、またしても奴は何者だ!?

真祖の吸血鬼である私の障壁を簡単に破るなど……。

「大丈夫ですか？マスター」

「問題ない茶々丸私が蹴られたとき何かされたか？」

「いえ、蹴りだけでした」

茶々丸に聞いたが分からなかったようだ。

ちっ厄介な……。

茶々丸と話をしている間に奴らに動きがあった。

会話を全て聞き取れたわけではないが玉藻という男は戦つつもりはないらしい。

どういふことだこの私をおちよくっているのか？

この私を!!

「おい、貴様らさつきは戦つなどと大きな事を言っておいて見物を決め込むつもりか？」

私は殺気を込め静かに聞いた。

「さつきのは従者の早とちりだ、俺に戦闘の意思はない」

「ふん、まあいいだろう坊やの血を吸って完全開放したときに貴様らを八つ裂きにしてやる」

そうだ全ては坊やの血を吸った後だ。

私は奴を無視して坊やを探す。

そして、奴らが姿を現した。

「ふん、ようやく出てきたか」

私は手こずらせてくれた礼に嫌味の一つを言つたため口を開く。

「ふふっ……どうした、ぼーや？お姉ちゃんが助けにきてくれてホッと一息か……？」

「うぐっ……」

「気にすんな、アニキ！」

「何言つてんのよ！これで2対2の正々堂々互角の勝負でしょ！？」

たしかに神楽坂明日菜の言うとおりだ、ここから本番だ。しかし……。

「そうだな、双方パートナーも揃ってようやく正当な決闘という訳だ、

だが互角かな？坊やは杖なしで奴もただ見物をするだけ、それに貴様は

戦いの素人だろう」

黙る坊や達、まあ喋る時間が勿体無いな。

「行くぞ私が生徒だということは忘れ、本気で来るがいいネギ・スプリングフィールド」

「……はい」

返事をする坊や、まあ私に挑んでくる勇氣に免じて先手をくれてやるか。

「契約執行90秒間！！ネギの従者『神楽坂 明日菜』！！！」

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

まず、坊やが神楽坂明日菜を強化して突っ込ませる。

こちらも茶々丸に念話で指示して神楽坂明日菜を任せる。

そして、その後は坊やと魔法の撃ち合いをして、最後は坊やと同種の魔法を撃ち合う。

しかし、予想外の事が起こった。

「ハックション！！！」

「な、何！？」

ドオン！！

「ネギー！！」

「マスター……！！」

坊やはくしゃみで魔力暴走を起こし私の魔法に打ち勝つ。さすが、奴の息子と言っべきか。

「いけない、マスター！戻って！！」

バシャン！

「な、何!？」

茶々丸が戻るように叫ぶが、叫んだ瞬間に橋の電気が突然、点き始めた。

まさか!!

「予定より、7分27秒も停電の復旧が早い!!マスター!!」

「ええい!いい加減な仕事をしおって!!」

バシン!

「きゃん!!」

電気が復旧して私の封印が復活する。

そして私は、そのまま湖へと落下を開始した。

そういえば前にもこんなことがあったな……。

私は落下しながらサウザンドマスターの事を思い出す。

うそつき……

水面が近づいてきた……

私は覚悟を決め、目をつむる。

がし!

しかし、何か暖かいものに掴まれた。

私は目を開ける。

すると、満月に銀の髪を輝かせている男がいた。

私は昔の事を思い出していたせいか、あのバカにした質問この男にもした。

「さあ？」

「!？」

あの時とまったく同じ答え、私は思わず黙ってしまった。

そして、橋を上った後、奴に降ろしてもらった。

その後、茶々丸や坊や達が駆け寄ってきて。

奴の左手を見る。

なんだこの手は！

強烈な魔力を感じる、その上とても邪悪な気も一緒に。

コイツは人間じゃあないのか？

そして、奴は後日事情を話すと言ってこの場にいるものを納得させた。

それぞれ、自分の帰る場所に帰ろうとするのだが、調子乗った坊やに切れたり色々あって家に帰った。

六話 恐怖の新学期、桜通りの吸血鬼 「Cパート」(後書き)

次回 今明かされる禁断の過去「嘘話」！鬼の手誕生の秘密！！

七話 今明かされる禁断の過去「嘘話」！鬼の手誕生の秘密！！（前書き）

皆さん読んでいただきありがとうございます。

これからも頑張りますので応援よろしくお願いします。

七話 今明かされる禁断の過去「嘘話」！鬼の手誕生の秘密！！

― 雄介視点 ―

昨日の戦いの後、俺は今日の言い訳のために霊水晶にめぐべくを自分に置き換えた映像を作る。

ちなみに妄想で作った映像は二つ、一つ目は美奈子先生も紹介のためめの映像

二つ目は鬼の手誕生の映像、夢中で作ってたら沢山出来た。

これだけあればもしかしたら映画作れるかもな。

さて、昨日別れ際に聞いた幼女の住んでいるログハウスに行きますかな。

寮を出て、幼女のログハウスに向かう。

きつと野菜もそろそろ向かっているだろうし。

ちなみに野菜は父親の事を聞くついでに来るのだとか。

やっぱり京都の話になるんだろうな……。

ま、おれは関係ないから大丈夫だろう。

しかし、セイバーについてはどう説明したものか。

さて、セイバーに説明させるか？

まあ、それはあとでいいだろう。

そんなことを考えていると、幼女のログハウスについてしまった。どうやら相当考え込んでいたらしい。

さて、それじゃあ呼び鈴を鳴らしてお邪魔しますかな。

からん、ころん。

ガチャ

「いらっしゃいませ、玉藻さん中にお入りください」

「ああ」

茶々丸さんの中にに入れてもらう。

「ほう、来たか」

ソファーに座り優雅に紅茶を飲んでいる少女。
しかしマンガを読んでいていたけど人形だらけだなこの家。

「どうした、座らないのか？」

「ネギ君たちはまだ来ていないようだな？」

「そうだが、そろそろ来る頃だろ」

俺は茶々丸さんが用意してくれたイスに座る。

「紅茶です」

「ありがとう」

茶々丸さんに用意されたカップに紅茶を注いでもらった。
いい香りだな・・・。

からん、ころん。

「ん？どうやら坊や達が来たようだな、茶々丸」

「はい」

ガチャ

「いらっしゃいませ、ネギ先生に神楽坂さん」

「お邪魔します」

「お邪魔しまーす」

どうやら野菜たちが来たようだ。

「では、そろそろ話を始めるぞ、それでどちらから聞く？
サウザンドマスターについてが先かコイツについてが先か」

「父さんの話を聞いたら玉藻さんの話を聞きます」

「そうか・・・お前はそれでいいか？」

「別にかまわない」

野菜が父の話が先に聞きたいと言ったから俺の話は後になった。
まあ、別にどっちからでもいいが。

「では・・・」

それから野菜は原作通り京都にある父親の別荘にヒントがあると幼
女に言われ

飛び出そうとするが、神楽坂さんに野菜が捕まる。

「こら！バカネギ！！玉藻さんの話も聞きに来たんでしょーが！」

「あ、すみません！」

まったくこの野菜坊主は・・・。

まあ、野菜の事を今更考えた所でしようがない。

「それじゃあ、話してもらつぞ、お前の正体とその左手の事を・・・」

目を細めこちらを見る幼女。

しようがない、映像を見せるか。

霊水晶を取り出す。

「玉藻さん何で水晶を出すんですか？」

「自己紹介の前の下準備だ」

「？」

霊水晶が理解できないのか、神楽坂さんが聞いてくる。野菜や幼女などは理解しているようで黙ってみている。

「さて、まず俺の本当の名前は鶴野 雄介だ、よろしく」

「玉藻って偽名だったんですね、でもなんで偽名を・・・」

「ネギ君それをこれから話すから静かに聞いてくれ」

偽名について聞いてきた野菜を黙らせ。

映像を写すため霊水晶に魔力を通わせる。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光
靈水晶よ我が過去を映したまえ！」

靈水晶が光だし、部屋がなくなり雪の降る学校の校庭になる。
本当は過去じゃなくて妄想なんだが……。

「な、何よこれ!？」

「落ち着いてください、アスナさんこれは雄介さんの過去の映像です」

「え? そうなの?」

「静かにしろ神楽坂明日菜、話が進まないだろ」

「う……わかるかったわね」

現状が理解できないのか戸惑う神楽坂さん。

そして戸惑う神楽坂さんに野菜が説明して落ち着くが幼女がつるさ
いと

言って、反省する。

そして……。

ーアスナ視点ー

「やーい! 鶴野はバケモノー!」

「鶴野はバケモノの子だぞー！」

バシ！バシ！

雪だまを投げつけられる銀髪の子供たぶん雄介さんだろう。

「ちょ、ちよっとこれって・・・」

「ひ、ひどい・・・」

「・・・」

次々と雪だまをネギより少し小さい雄介さんにぶつける子供達。

私とネギは思わず声を漏らす、エヴァンジェリンは黙ってみている。

「やーい！バケモノー！」

バシ！

「へへへ、雄介はバケモノ〜！」

「いいかげんにしなさいよ！クソガキ！」

「ちょっとアスナさん！気持ちは分かりますが落ち着いてください
「！」

「そうっすよ、姐さんこれは映像なんですからどうにもできません
ってー！」

我慢の限界が来て映像の子供達に殴りかかろうとする私を止めるネギとカモ。

そしたら私の横から雪球が飛んできた、一体何が……。
飛んできた方向を見る。

「コラー！！」

バス！

「鶴野くんをいじめる奴は先生が許さないぞ！！」

なんかパワフルで綺麗な女の人の子供達に注意する。

「大丈夫？ 鶴野くん」

「美奈子先生！」

子供の雄介さんに笑いかけながら聞く美奈子先生と呼ばれた女の人、それに笑顔で答える雄介さん。

「雄介さんこの、美奈子先生って？」

「小学校の頃、俺の担任だった人だ」

私は美奈子先生について聞いた。

どうやら雄介さんの担任の先生らしい。

「やーい、バケモノ！！」

「君達！！」

バス！

「やーいおてんばのはねつかえり、そんなんじゃ嫁のもらいてねーぞー！」

「大きなお世話よ、はははは！」

いじめっ子達は、逃げながら捨て台詞を吐いたが、美奈子先生は気にしないで笑っている。
凄い人だな・・・。

「もう、大丈夫よ鶴野くん」

優しい笑顔で話しかける美奈子先生、いい人だな・・・。
そしてしばらく日常風景になる。

遠足のときや運動会の時もみんなに仲間はずれにされて美奈子先生と一緒に

いる雄介さん美奈子先生は本当にいい先生ね、会う機会があったら会いたいな。

今も先生をしているのかな？

雄介さんに聞いてみよう。

「雄介さん美奈子先生は今も先生を続けているんですか？」

「それは、これを見ていれば分かる」

ん？少し難しそうな顔になった雄介さん何かあったのかな？

しかしこの後、私は聞かなければよかったと後悔する事になる。

「ねえ、先生」

「何？鶴野くん」

「あのさ、先生はなんで俺にかまってくれるの？みんな俺の事バケモノだって言うよ」

「先生もね、ほら魔法が使えるでしょ、それで子供の頃よくいじめられたわアイツは人間じゃない
つて」

「へ？美奈子先生魔法使いだったの？でもなんでいじめられていたんだろ」

「ねえ、どうして美奈子先生は魔法使いなのにいじめを受けていたんですか？」

「それは、美奈子先生が一般人の家系に生まれたからだ」

「なるほど、そういうことか」

「どつゆつことよ」

エヴァンジェリンが分かったような事を言ってきたから聞いてみた。

「貴様は……まあ、いいつまり一般人の家系に急に魔力の強い者が生まれるという事はたまにある」

そして、生まれたものは異常な力を持つバケモノとしてそこにいる鶴野と同じ扱いを受けるといふことだ」

「そんな・・・」

理解はしたけど、私は間違っていると思う。

こんな理不尽はいやだ！

私が怒っていると・・・。

「何言ってるんだよ！先生の魔法は怪我を治すいい魔法じゃないか！俺のように怪我とか病気とか治してもらって感謝している人沢山いるよ！」

「君の力も同じよ鶴野くん、いつか君も自分の力を制御できるようになれば大勢の困った人が君の力を必要とする人が大勢現れる、いつかわかるわ」

「先生・・・」

私の心を代弁するかのように子供の雄介さんが美奈子先生に言う。そして、美奈子先生も雄介さんに優しい言葉を掛け。嬉しそうな顔をする子供の雄介さん。

「いい話ですね」

「そうっすね」

「そうね」

感動に涙するネギとカモと私。

しかしここで子供の雄介さんの様子がおかしくなる。

「うぐぐぐ・・・」

「どうしたの鶴野くん!？」

美奈子先生に抱えられ保健室に連れて行かれる雄介さんどうしたの!？

「これは!」

「うっうっう!!」

子供の雄介さんの体に蛇のような模様が浮き出てきた。これって一体なんなの!？

「雄介さんこれって・・・」

「そつだネギ君、悪霊だそれも強力な・・・」

ネギが雄介さんに聞き、雄介さんが答える。
魔法や吸血鬼がいるのだから悪霊くらい居るか。
つて、それより子供の雄介さん大丈夫なの相当苦しんでるけど!!

「これ大丈夫なんですか!？」

「大丈夫だここで俺が死んだら、俺はここにいない」

あ、そうか・・・雄介さんの言葉で少し落ち着いた。

「先生に任せて、もう大丈夫よ」

美奈子先生が、子供の雄介さんを助けるため魔法を使う。

これで、もう大丈夫ね。

「きゃー!!!!」

ドカ!

「せんせー!!!!」

「えっ!!」

「どういうこと!?!?」

ワケがわからなかった、美奈子先生が雄介さんを助けようと魔法を使ったら

雄介さんの体をむしばんでいた悪霊が美奈子先生の体に入ってしまった!

そして、元のエヴァンジェリンの部屋に戻る。

「雄介さん!!美奈子先生はどうなったんですか!?!映像を見せてください!!!!」

「そうですよ、雄介さん!」

「旦那、オレっ子からも頼みやすぜ!!!!」

それから、雄介さんは辛そうに口を開く。

「美奈子先生は悪霊に殺された……」

「そんな……」

そうか、それでさっきこれを見ていればわかるって、言っていたのか。
なんか重い空気になった。
そこでさっきから黙っていたエヴァンジェリンが口を開いた。

「エヴァンジェリン視点」

奴の過去を見ているとき昔の私を思い出した。
なるほど、奴も苦労したのだな……。
思わずそんな事を思ってしまった。
そして、美奈子という女に悪霊が入った所で映像が切れた。
それは、つまり……

「美奈子先生は悪霊に殺された……」

「そんな……」

辛そうな顔をする坊や達しかし、これが奴の左手とどういふ関係があるんだ？

「おい、これが貴様の左手とどういふ関係があるんだ？」

「次の映像を見ればわかる」

「じゃあ、さっさと始めるがいい」

そして、つぎの映像が再生される。
奴の水晶が光、私の部屋がどこかの学校の教室に変わる。

その教室の中心で今とまったく変わらない奴とイスに縛られている奴と同じ年くらいの男がいる。

「雄介さん、縛られている人は誰ですか？」

ようやく元気になったのか坊やが質問する。
まったく、こいつ等は静かに見ておれんのか？

「縛られているのは俺の親友だよ」

「え！それじゃあ何故!？」

「貴様、いい加減に黙れ殺すぞ」

私が、坊やに言葉に軽く殺気を出し、黙らせた。
それにしても、親友か……。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光」
我が友に宿りし悪霊よ！姿を現せ!!」

「グオオオオ!!」

奴の友から巨大な鬼がうなり声を上げ姿を現す。
なんだ、この鬼は!

映像なのに私が恐怖するほどの鬼、奴はこれをどうやって封印したのだ!？

「何よこの大きな怪物は!？」

「ぎゃー！！バケモンだー！！」

「こ、こんなのありえない！」

上から神楽坂明日菜、小動物、坊やがそれぞれ口にするが、そんなことはどうでもいい。

私は、鬼に恐怖を覚えつつも必死に平気だと見栄を張る。
くっ！この私が・・・！

「うがあああ！」

ドオン！！

「うあああ！！」

鬼は奴に指先を向け、魔力の塊を撃ちだす。

ただ、それだけ。

それだけのはずなのにその魔力の塊は凄まじい破壊力で教室を突き抜け校舎を破壊していく。

そして、そのまま魔力の塊は山の一部を消し飛ばす。

なんて、威力だ！

奴は鬼の攻撃をなんとか障壁で威力を軽減したようだが、もうボロボロだ・・・。

あの魔力の塊を軽減するだけでも奴は十分バグキャラだと思つがこれは間違つた過去なんじゃないか？

今の奴の実力はわからんが、映像の奴がこの強大な鬼を封じる事ができるわけがない。

そしてその後は鬼の一方的な攻撃で奴がゴミのように、飛んでいく。だが奴はそれでも鬼に向かっていく・・・。

「があああ！」

ボン！

「ぐあああああ！！！」

「雄介さん！」

「そんな！」

「もう見てられねえよ！」

上から坊や、神楽坂明日菜、小動物が叫ぶ。

坊や達は見えていられないのか目をつむりだす。

鬼の一撃で吹き飛び体を動かすの辛いはずなのに、立ち上がることをする奴に

鬼が止めを刺そうとするからだ。

しかしここで鬼の動きが止まる。

何故だ？

「うがああああ！！！」

ズシン！

「なに！？何が起こったの！？」

「僕にもわかりません！、でも突然バケモノが・・・」

突然鬼が頭を抱え苦しみだす

神楽坂明日菜も鬼の異変に気づき疑問を口に出すが、坊やも理解で

きないようでわからないと答える。

私も理解できなかった、奴は一方的にやられていただけだ障壁を張るので精一杯のはず

だから、奴が鬼に何かしたとは思えない。

一体何故……？

「わたしを……わたしを封じなさい早く……今のうちに……」

「なに？」

頭を抱え苦しんでいる鬼が自分を封印してくれと懇願し始めた。どうゆうことだ、わけがわからない。

「私は貴方の力で封じ込められるために来ました」

「何を言う、俺は貴様なんか知らないぞ！」

「私です、私は……」

「……！？」

鬼の両手が頭から離れたとき、鬼の額に見覚えのある顔があった。そうか……それでさっきの映像を見せたのか。

「美奈子先生……」

「ちょ、ちょっと！どうして死んだはずの美奈子先生が鬼のおでこにいるのよ……？」

「そんなこと僕に聞かれても！」

「雄介の旦那！これは・・・」

上からまたしても神楽坂明日菜、坊や、小動物が叫ぶ。

私は何故あの女が鬼の額にいるのか理解したが他の連中は理解できていないようだ。

「鶴野くん、私は悪霊に殺された後、悪霊に霊界の地獄に連れて行かれ

そして私の魂は鬼に吸収されたのです、魔力の強い私の魂は鬼にとって格好の餌食でした

私は鬼に吸収され鬼の一部になったのです・・・でも、意思だけは残りました

だから、地獄から這い上がったこの鬼があなたの所に行くよう仕向けたのです」

「そんな・・・先生が鬼に・・・嘘だ、嘘だー！！」

「さあ、早く！この鬼をほおっておけば地上は地獄と化してしまう、私もろとも

鬼を封印するのよ！何をためらっているの鶴野くん」

「これ以上美奈子先生を苦しめるなんて、俺にはできない！」

確かに女ごと封印してしまえば女の魂は成仏することなく、永遠鬼の中に閉じ込められる事になるだろう。

「私の事は心配しないで、さあ封印を・・・くっ・・・」

ここで、鬼の意識が戻り始めたのか額の女が苦しみの顔を見せる。

「さあ、鶴野くん勇気を出して・・・あなたはの力で人々を守るのよ」

「美奈子先生・・・」

奴は覚悟を決めたのか、持っていたロケットを泣きながら左手に巻きつけ立ち上がる。

「うあああああー！！」

雄たけびを上げ悲しみを振り払い奴は鬼に向かって走り出す。

「宇宙天地 與我力量降伏群魔 迎來曙光！」

我が魔力において、邪悪なる鬼を左手に封じたまえー！！」

「ううう！」

奴は鬼を自分の左腕に鬼を女ごと封印した。
やはりな・・・。

私の想像通りの結末をむかえ景色は見慣れた私の部屋に戻る。

「これが、俺の左手の秘密だ・・・」

そして水晶をしまう奴、ふむ、思わず少し涙ぐんでしまった。
私はそれを必死に隠すのであった。

ーネギ視点ー

これが雄介さんの左手の秘密……。
僕は正直こんなにも重たい話だとは思いませんでした。
それから沈黙が続きます。
あ、そういえば……。

「雄介さん」

「なんだ？」

「セイバーさんは来ていないんですか？」

「そ、そういえばそうね！セイバーさんわすれたのかな！？」

話題変更のためにした質問に食いついてくるアスナさん。
これで、少しでも空気が変わるといいのですが。

「セイバーならいつでも呼べるのだが……。呼ぶか？」

「そうだな、あの女の話も聞きたいし呼ぶがいい」

エヴァンジェリンさんも呼ぶように言う

それは、エヴァンジェリンさんも僕の話題の変換に協力してくれた
のでしょうか？

「じゃあ、ちょっとスペースのあるここに呼ぶがかまわないか？」

「ああ」

雄介さんは一人分のスペースのある場所に指をさしてエヴァンジ
エリンさんに

聞きます。

一体何をするつもりなんでしょう？

「来い、セイバー」

パアア

「マスター、ただいま参上いたしました」

「え！？床から！」

床から魔法陣が展開され、その中心から鎧姿のセイバーさんが出てきた。

どうやら、召喚したようです。

しかし、アスナさんは理解できなかったのが驚いています。

「マスターここはどこです？見たことのない部屋のようにですが・・・」

「ここはエヴァンジェリンの家だ、そして俺の事情やお前の事を説明するために呼んだ」

「そうですか・・・」

理解したのかうなづくセイバーさん。

セイバーさんは事情を知っていたようだ。

しかし、左手の秘密はわかったけど何で正体を隠していたのかな？

「あの、雄介さん左手の秘密はわかったのですが、何で正体を隠していたんですか？」

「それは、ばれたら他の魔法使いに命を狙われるからだ」

「そんな、どうして……」

理解できなかった、正義の味方である魔法使いがあんな強大な鬼から人々を守った

雄介さんを狙うなんて……。

「この左手の事を知らないやつは俺を鬼と決めつけ殺しに来る、そういう正義バカが多いからだ」

「そ、そんな事はありません!!」

そうです、そんなことは絶対にあるはずはありません!

「フハハハハ!そうか、正義バカか!実に気に入ったぞ!鶴野、いや雄介これからは私の事はエヴァと呼べ、いやぁ実に気分がいい!」

エヴァンジェリンさんが大笑いしています。どこが気分がいいのか僕にはわかりません。

「それでは、私の話をしますがいいですか?」

会話が終わったと見てセイバーさんが聞いてくる。そうでした、セイバーさんの話を聞かないと……。

「まず、私はもう死んでいます」

「え!？」

「どうゆうことですか!？セイバーさん！」

セイバーさんがいきなり自分は死んでいると発言しました。ワケがわかりませんが、セイバーさんはちゃんとここにいて生きているのに。

「私は英霊と言われる存在です」

「英霊？」

「英霊とは神話や伝承などで過去に英雄と呼ばれる者達が幽霊となつたものです」

「でも、セイバーさんは生きてるじゃない」

なるほどこの女の違和感は死者だったからか。

「ここにいる私はマスターと呼ばれ一時的に肉体を得た存在です戻ろうと思えばいつでも零体化できます」

「そうなんですか・・・」

「ちなみにマスターと私の関係は主従ですが貴方達のしている仮契約はしていません

、そのオコジョと少年の関係とも言えるでしょう」

「へ」

なるほど従者でありながら使い魔ということか。
しかし英霊ということはこの女何者だ？

「で、貴様は何者だ？セイバーなどという英雄は聞いた事がない、
そろそろ本当の名前を教えたらどうだ」

「それは言えません」

「ほう、何故だ」

「英霊の名前がばれるという事は、相手に自分の弱点や過去を教えることになります
ですからいう事はできません」

「そうか・・・」

本当の名前は聞けなかったが昨日からの奴の格好を見れば剣士であることは

わかる、それにいつかわかることだ。

私はそれ以上聞くのをやめた。

「じゃあ今まで通り、セイバーさんでいいんですね？」

「はい、かまいません」

これでこの会話は終了した。

ふう、なんかあったな。

話が終了し俺と野菜たちは帰る事になった。

しかし、話をしている最中誰かに覗かれている気配がしたんだよな。

まあ、たいした奴じゃなかったしほっとけばいいだろう。

こうして俺と野菜は自宅に帰るのであった。

七話 今明かされる禁断の過去「嘘話」！鬼の手誕生の秘密！！（後書き）

次回 使用禁止！？第4コースの幽霊

はじめの方は覗きをしていた人の話で後は幽霊の話

次回もお楽しみに。

八話 使用禁止！？第4コースの幽霊

―刹那視点―

私は鍛錬のため森に向かったしかしそこでこの間あった銀髪の男性を見つけた。

この方向は……。

男性の向かう先にはエヴァンジェリンさんの住むログハウスしかない
一体エヴァンジェリンさんになんのように……。

私は好奇心から男性の後を追いました。

そして男性が入っていき私は家の中が見える角度に式紙を配置して離れる。

離れるとネギ先生達がログハウスに入っていく。

何故ネギ先生まで？

それから男性が水晶で己の過去を映し出す。

しばらく映像を見る、そして左手に鬼を封印する映像を最後に見た
なるほどそういう事だったのですか。

私は複雑な気持ちでした。

初めは私と同じ半妖だと思っていたのに本当は人間で人々を救うために鬼をその身に封じた男性。

私の知識によると自分の体に妖魔の類を封印するさい、その代償に半妖と同じ存在になる。

そのことを思い出した私は卑劣にも男性はやはり自分と同じ存在だと安心してしまいました。

私は自分を見つめなおすため、鍛錬に向かう。

それにしても、あの人は人間だったのに私と同じようにバケモノと罵られていた。

なのにそれでも戦う姿はとても気高かった。

私は男性の事を考え胸が高鳴るのを感じた、私は一体どうしたのだろっ……。

― 雄介視点 ―

今日俺は学校で変な噂を聞いた。

クラスの水泳部女子の話ではプールで幽霊を見たとか

それで、一時期プールの使用が禁止されたが今日禁止がなくなったようだ。

まあ、魔法先生あたりがなんとかしたんだろ。

そして、帰る準備をして寮に向かう。

向かう道中で野菜を見つけた、また面倒な事にならないように回れ右をするのだが……。

「あ、雄介さん丁度いい所に、ちょっといいですか？」

ああ……。

なんてこったい。

「どうかしたのか？」

「実は……」

野菜は事情を話し始めた。

何でも自分のクラスの生徒がプールで幽霊を見たんだそうだ。

それで、専門家だと判断した野菜は俺を頼るために探していたようだ少しは自分で何とかしようとは思わなかったのかこの野菜は……。

まあ、俺ももうすぐプールの授業が始まるし、

結構楽しみにしていたからなくなるのは正直いやだ

それにしても、魔法先生もうちょっと真面目に仕事をしろ！

しかたがない今回は協力してやるか……。

「じゃあ今晚麻帆帆良女子中学に行くからそこで待っている」

「はい、ありがとうございます！」

それから3時間後の夜の7時半中学校には誰もいない
さて、そろそろ野菜が来る時間だ。

「雄介さん！」

「ん？」

後ろの方から野菜の音が聞こえた、ようやく来たか。
そう思つて振り返る。

「雄介さん、こんばんわ」

「旦那、こんばんわっす！」

野菜の他にも神楽坂さんとオコジヨが来た。
まあ、いいか……。

「それじゃあ、プールに案内してくれ」

「え？雄介さん知らないんですか？」

神楽坂さんが聞いてくる。

「俺は転校生だから、場所を知らないんだ」

「そうなんですか、そういうば雄介さん学年はいくつですか？」

「俺は高等部の一年だ」

神楽坂さんに聞かれ答える。

そう、俺は中学三年の三学期にここに転校してそのまま高等部にエスカレーターで進級したのだ。

ここでの俺の年齢は16歳らしい。

「先輩だったんですか！？それじゃあこれからは雄介先輩と呼びますね」

「まあ、どっちでもかまわないが・・・」

先輩だと知った神楽坂さんは呼び方が変わった。

正直、先輩と呼ばれるのは嬉しい。

「それじゃあ、そろそろ行くつか」

「はい」

そして高等部と中等部が共同で使っているプールに向かう。

「ここがそうか・・・」

「はい」

霊水晶で見たりしてみたが何も感じない。

どういうことだ？

もう魔法先生達が何とかしたのだろうか？

「別に何も感じないのだが、本当に見たのか？」

「はい、クラスの水泳部の子が見たって・・・」

答える神楽坂さん、見たのなら少しでも気配が残っていると思うんだが・・・。
ん？

ぼう

「で、出た！」

「出ましたよ！雄介さん！」

「お願いしやす、旦那！！」

上から神楽坂さん、野菜、オコジヨが言ってくる。
しかしこれは・・・。

「これは、霊じゃない」

「へ？どうゆうことですか？」

「これは、あそこにある第4コースの飛台の記憶だ」

「記憶？」

「物には記憶が残るんだ、特によく使われたものはなこういった物

はたまに

過去をビデオテープのように再生するんだ、ほら、前に見せた俺の過去も

これと同じだ」

霊じゃない事を説明する俺。

なるほど、それで魔法先生が調べた後も目撃者が出たわけか。

その後、俺はもう勝手に再生されないように封印をして

それぞれ帰宅するのであった。

帰る時に聞いたのだが、明後日野菜は修学旅行なのだそうだ。

正直うらやましい、だが、厄介ことは勘弁だ大人しくフェイトにボ

コられて来い。

そんな事を考えながら自分の部屋の扉を開ける俺であった。

あれ？なんかナレーションになった・・・

八話 使用禁止！？第4コースの幽霊（後書き）

この話を書く為、修学旅行の日にちをずらしました。
さて次回は、恐怖の修学旅行！俺は行かないぞ！！

雄介「俺は行かないぞ！！」

作者「まあ、もうあきらめろよ」

雄「あきらめない俺は俺は・・・」

九話 恐怖の修学旅行！俺は行かないぞ！！たぶん・・・ (前書き)

夜編が短いためくっつけました。
それとタイトルも変更しました。

九話 恐怖の修学旅行！俺は行かないぞ！！たぶん・・・

― 雄介視点 ―

さて、今日は野菜たちの修学旅行の前日だ。

たしか、今日は神楽坂さんの誕生日だったな・・・。

まあ、どうでもいいか。

それよりも買物にいかないとな・・・。

実は昨日セイバーと食事をしたのだが、セイバーが米やらおかずやら色々平らげてしまったため、食糧不足となったのだ。

そして現在はレジに並び買物したら、運がいいことに福引の券を貰った。

なんでも商店街の企画らしい。

俺はその福引を見て福引会場に向かう。

結構並んでいるな。

見たところおばちゃんや女の人がいっぱいなんだかどうゆうことだ？

正直休日の昼ごろだとしても男の一人ぐらい並んでいても不思議ではないのだが。

それから待つこと30分、どうやらあともう少しで俺の番になるようだ。

俺は近くに景品の写真が張ってある看板が見えたので何があるか見た。

一等 ダイヤの指輪

二等 ブランドバックと化粧水のセット

三等 豪華ホテルとサービス付き京都旅行

なるほど、どおりで女性の客が集中するわけか……。しかし、京都旅行とブランドバックのセットは逆じゃないか？ まあいい、金に換えてしまえば食費や生活費もつくだろう。そう考えているうちに俺の番になった福引の券は2枚、つまり2回できるという事だ。

「それじゃあ、2回まわしてください」

「はい」

ガラガラ

カラン

「で、出ましたー！！一等賞！！おめでとーございますー！」

大声で一等が出たと叫ぶお姉さん、その声に反応してこっちに注目する通行人や並んでいる女性達。
正直視線が痛いです。

「で、では2回目どうぞ」

まだ興奮が収まらないのか、テンションが少し高い女性。
さて、回しますかな。

ガラガラ

カラン

「で、出ましたー！！二等賞の豪華京都旅行ー！！！」

テンションが最高潮になったのかさつきよりも大きな声を出す女性。注目度もさつきの比ではない。

その後、景品を渡されさつさと逃げ出す俺。

記念に叫んでいた女性が写真を撮らせて欲しいと言っていたが丁重に断った。

それから、景品を換金しようと専門の店に行くのだがどこもしまっている。

何故だ？

まあ、今度の機会にするかと寮に向かうため歩き出すのだが、泣いている小さな女の子が

目に入った、女の子はおかーさんと言って泣いている。

どうやら迷子になったらしい。

俺は女の子に声を掛けようと歩き出した。

「「ねえ」「」

「ふえ……？」

女の子に近づき話しかけたら、他にも俺と同じ考えの人がいたようで声が重なってしまった。

俺はその声の主を見ようと女の子に向いていた顔を向ける。

声の主は神楽坂さんだった。

「「あ……」「」

「？」

お互いに誰だか理解して思わず声が出る。

そしてそんな俺たちを不思議そうに見る女の子。

まあ、泣き止んだみたいでよかったのかな？
その後、女の子の事情を聞いて女の子のお母さんを神楽坂さんと女の子と俺で探す事になった。

「ふえ……」

「大丈夫だから、かならず見つかるから泣かないで」

探している途中で時々泣きそうになる女の子を優しく慰める神楽坂さんはまるでお母さんみたいだな……。
そんな事思いながら見ていると……。

「まあ、若い夫婦ね」

「旦那さんカッコいいなー、私もあんな人と結婚したいな……」

「私やあんたじゃ無理だつて……」

近くにいたおばちゃん女子高生の二人組みの声が聞こえる。
まあ、そう見られてもしょうがないな……。
俺は聞き流す事にしたのだが……。

「おねーちゃん？」

「ハヒー!!」

「どうしたの？おねーちゃん大丈夫？」

突然、奇声を上げる神楽坂さんとそれを心配そうに質問する女の子。

どつやらさっきの声が聞こえていたらしい。
純情だなー、真っ赤になっちゃって。
まあ、恥ずかしいのはわからんでもないがな。

「ほら、行くぞ」

「は、はい」

「うん！」

どつやら女の子は元気が出たようだ。

そして探す事、一時間。

ようやくお母さんが見つかった。

事情を聞くと、なんでも買物をしてる最中に見失ってしまったらしい。

その後、俺たちに感謝してくれるお母さん、正直別にいいのだが……。

そして、女の子と女の子のお母さんが手をつなぎ帰ろうと歩き出す。やっとな終わったか。

「おねーちゃん！おにーちゃん！ありがとうー！！それからおしあわせにー！！！！」

「ぶーーーーー！！」

終わったと思ったら爆弾を投下して去っていく女の子。
聞いた神楽坂さんは吹き出しゆでだこのようになってる。
そんな様子を見ていたまわりの人たちの視線がいたい。
だから俺達は人気のない公園にダッシュで逃げる。

「は〜疲れた〜」

「そ、そうですね・・・」

ベンチに座り休憩する俺と神楽坂さん。

俺のせいで面倒な事になったみたいだし何かお詫びしたほうがいいな。

あ、そういえば神楽坂さん今日が誕生日だったな。
ポケットにある景品の封筒を取り出した。

「はい、これ」

「なんですかこれ？」

「誕生日プレゼント」

「へ!?!」

突然の誕生日プレゼントに驚く神楽坂さん。

まあ当然の反応だよな。

「あの・・・どうして知ってるんですか？」

何故、自分の誕生日を知っているのか気になって聞いて来る神楽坂さん。

そういえばそうだよなんて言おう。

そうだ、たしか原作では昨日野菜たちのプレゼント騒動があったっけ。

「昨日、ネギ君たちが君にプレゼントを渡しているのをたまたま見

てしまったからね」

「そうだったんですか・・・ありがとうございます！」

突然のサプライズに喜び受け取る神楽坂さん。

そして中身を見て少し驚いた顔をして固まる。

まあ、中身は豪華京都旅行の券が入っていたいた封筒だからこの反応はしょうがないか。

でも売れば彼女の学費の足しになるだろう。

「中身だけでもしいらなかったら売ってもかまわないから」

「そんな！売るなんてしませんよ！！」

期限が過ぎたらただの紙切れになるから売るなら早くした方がいいんだけど・・・。

まあ、彼女がそういうならいいだろう。

「じゃあな」

「はい、あの・・・これ大切にしますね！」

俺が寮に帰ろうと歩き出したとき、旅行券を大切にすると宣言する神楽坂さん。

もしかして旅行券をコレクションする趣味でもあるのか？

そうして、寮の自分の部屋に帰るため歩き出す俺であった。

ーアスナ視点ー

今日私は、修学旅行の準備のため買い物をするため商店街に来了た。

そこで、泣いている女の子を発見して声を掛けたのだが。

「「ねえ」「

「ふえ・・・？」

私と同じように女の子に声を掛けた人がいてその人と声が重なってしまった。

声の主を見ようと顔を上げると、そこには雄介先輩がいた。

「「あ・・・」「

「？」

私と雄介先輩は見知った顔を見た事で思わず声を漏らす。

そして、女の子はそんな私達を不思議そうに見ている。

その後は、雄介さんと女の子と私で女の子のお母さんを探す。

でも、探している途中で時々不安になるのか女の子がなきだしそうになった。

「ふえ・・・」

「大丈夫だから、かならず見つかるから泣かないで」

私は女の子の目線までしゃがみ、女の子を慰める。

そして、そんな様子を暖かく見守る雄介さん。

雄介先輩、なんかお父さんっぽい。

私がそんなことを思っていると・・・。

「まあ、若い夫婦ね」

「旦那さんカッコいいなー、私もあんな人と結婚したいな・・・」

「私やあんだじゃ無理だつて・・・」

近くにいたおばさんと女子高生の二人組みの会話が聞こえてきた。私はそれを聞いた瞬間、顔が熱くなり固まってしまった。

「おねーちゃん？」

「ハヒ！」

「どうしたの？おねーちゃん大丈夫？」

突然、女の子に声を掛けられ思わず変な声を出してしまった。恥ずかしい・・・。

「ほら、行くぞ」

「は、はい」

「うん！」

雄介先輩は気にした様子もなく私達に言ってきた。

「うう、早くこの場を離れたい・・・」

そして1時間ぐらい探してようやく女の子のお母さんが見つかった。よかった。

お母さんの話を聞くと買い物物の途中で見失ってしまったようだ。
まあ、今後は気をつけるみたいだし大丈夫でしょう。
私は寮に帰ろうと歩き出した時。

「おねーちゃん！おにーちゃん！ありがとうー！！それからおしあわせにー！！！」

「ぶーーーーー！！！」

女の子がお礼を言ってくれたのは嬉しいがその後の言葉で思わず吹き出してしまった。

そして、まわりに視線が集まってきて私達はダッシュでその場を離れ、人気のない公園に来た。

それから、疲れた体を休ませえるため私達はベンチに腰を下ろす。

「は〜疲れた〜」

「そ、そうですね・・・」

ベンチに座り、疲れたと言う雄介さん。

私も思わず同意してしまった。

そして、雄介先輩がポケットから封筒を取り出す。

何の封筒だろう？

私は不思議に見ていたら、その封筒を私に突き出してきた。

「はい、これ」

「なんですかこれ？」

「誕生日プレゼント」

「へ!？」

封筒を渡され質問をしたらなんと、私への誕生日プレゼントだった。私は始め理解できず声を出してしまったがこれはしょうがないと思う。

「あの・・・どうして知ってるんですか？」

私は疑問に思った事を口にした。

たしか、雄介先輩には話していなかったと思うけど・・・。
なんで知っているんだろう？

「昨日、ネギ君たちが君にプレゼントを渡しているのをたまたま見
てしまったからね」

「そうだったんですか・・・ありがとうございます!」

なるほど昨日のあれを見ていたのか・・・。
って事は私が思わず涙ぐんだとこまで見られた？
私は恥ずかしさを隠すため勢いよくお礼を言って、プレゼントを受
け取る。

そして、封筒の中を見るとそこには指輪があった。

私は驚きすぎて固まってしまった。

「中身だけでもしいらなかつたら売ってもかまわないから」

「そんな!売るなんてしませんよ!」

そしてすぐに雄介先輩の言葉で再起動する。

こんな高いものもらって売れるわけがない！
しかし、これは本当に嬉しかった。
昨日のプレゼントも嬉しかったがこのような女の子っぽいものはなかった。

「じゃあな」

「はい、あの・・・これ大切にしますね！」

私がプレゼントの事を考えていると先輩が帰るようすで私に挨拶をした。

わたしは、返事をして大切にすることを伝え寮に帰った。

―雄介視点―

神楽坂さんと別れて現在は寮の自分の部屋にいる。

ポケットに入った物を片付けようと取り出す。

そしてポケットティッシュやサイフなどをいつもの引き出しにしまい最後に残ったを取り出そうと封筒を開ける。

すると中に入っていたのは神楽坂さんにあげたと思っていた

京都の旅行券だった！！

しまった！間違えた！！

まあいい、別に指輪なんかいらなかったし問題ない。

それに、この旅行券を明日売ればそれなりの金になるはず・・・。

「明日までじゃないか！！！」

なんてこった！期限が明日までだった！！

なるほど、だから三等賞だったのか。

ケチったな商店街のやつら！！

どうする！たしか高等部は代休やら記念日で休みがある。

くそ！なんか作威を感じる！！

しかしだ封筒の中のパンフレットでは豪華ホテルに温泉がありお土産に限定八橋がもらえるそうだ。

正直俺は温泉が好きで、とても行きたいと思う。

いや、よく考えてみる俺！

この旅行が野菜達と被るなんて天文学的数値だと思う。

そうだそんな偶然あつてたまるか！

俺は自分の旅行を楽しむ！！

決意を固めた俺は旅行の準備に入る。

九話 恐怖の修学旅行！俺は行かないぞー！！たぶん・・・（後書き）

次回 京都行きます！

十話 京都行きます！

― 雄介視点 ―

今日俺は旅行券を使用して京都に向かった。
そして京都についた今俺は京都巡りを楽しんでいる。
いやー来て良かった。
京都は小学校の修学旅行以来でとても嬉しい。

「鶴野さん！そろそろバスに乗ってください！
旅館へ出発しますよ」

「はい！今行きます！！」

バスガイドのお姉さんに言われバスに乗り込む。
ちなみに今日の旅館は露天風呂が有名の所らしい。
温泉が好きな俺にとっては良い知らせだった。
今から楽しみだ。
それからバスに進むこと1時間。

「旅館に到着しましたので忘れ物のないよう降りてください
明日はパンフレットに記載された時刻に迎えに来ますのでこの場所
で待っていてください
それでは、また明日」

バスガイドさんの指示に従い降りる乗客たち。
さて、俺も降りるかな。

バスから降りて旅館の中に入る。
パンフレットに豪華ホテルは明日と書いてあるが、正直この旅館も

高そうだ。

旅館の中に入り、受付で部屋の鍵を渡される乗客たち。俺も鍵を貰い自分の部屋へと向かう。

ガラ！

鍵を開け横開きの扉を開けて中に入る。

和の感じが出ていていい部屋だ。

俺は早速、髪を縛るヘアゴムと浴衣とタオル二枚と脱いだ服を入れる袋を持って目的である露天風呂に向かう。

たしか館内図だとこのへんに・・・お！あつた！！

男と書かれたのれんをくぐり脱衣所に入る。

脱いだ服を袋の中に入れて着替えの浴衣と頭を乾かすために使うタオルを籠に入れ。

もう一枚のタオルを腰に巻きつけ、髪もゴムで縛って中に入る。

ガラ

おー！誰もいないし予想以上の広さだ。

俺は掛け湯をして湯の中に入る。

「いい湯だ・・・」

落ち着く・・・ここ最近のトラブルも忘れられる

あー気持ちいい・・・。

「だ、旦那！じゃないですかー！」

「ゆー雄介さん！！なんでここにいますかー！！」

岩陰からひよっこりと顔を出す野菜とオコジヨ。

屋気楼しんきろうかめずらしいな・・・。

とりあえず現実逃避をする俺。

「あの・・・雄介さん聞いてますか？」

野菜が話しかけてきた来た事で再起動する俺。

「聞いている、風呂の中ぐらい静かにしてくれ」

「あ、すみません」

注意したら謝る野菜。

さてゆつたりしますかな。

気を取り直し体の力を抜き、温まる俺。

「あの、雄介さん・・・ちょっと相談に乗って欲しい事があるんです」

「なんだ」

野菜に相談に乗って欲しいと言われたが正直気が進まない。

しかし、ここで断るとつるさそうだしとりあえずテキストに相手をするればいいや

と思いきテキストに相手をする。

「実は・・・」

ガラ

野菜が喋ろうとした瞬間に入り口が開いた。

俺と野菜は岩陰に隠れる事にして気配を消す。

あれ？思わず隠れてしまったが別に問題ないのでは？

まあ隠れてしまったものはしかたがない見ないように後ろを向く。

「背はちっちゃいけど綺麗な人だねー」

「こつゆーのを大和撫子って言うんだぜ」

覗きをする、エロ坊主とエロオコジヨ。

おいおい、先生が覗きをしていいのかよ……。

「おい、ネギ君は一応教職員だろ」

「ハッ!!」

「そうだ、さつさとズラかるうぜ！」

逃げ出そうとする野菜とオコジヨ。

それと野菜、杖なんてどこから出した……。

「ふう……困ったな……魔法使いのネギ先生なら……なんと
かしてくれると思っただが……
やっぱり子供、あの人には遠く及ばないか……」

野菜に期待するだけムダだぞ桜咲さん。

しかし、あの人って誰だ？

ん？わずかな殺気が……。

「殺気！誰だ!？」

わずかな殺気に気づく桜咲さん。

俺も殺気の方を見たがやっぱり野菜、お前かー！
ばれたと判断し逃げ出す野菜。

って俺もやばくね？

「逃げるか！神鳴流奥義・・・斬岩剣！！」

「！！！！！！！！」

しゃがんで回避する俺と野菜。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！」

「風花武装解除！！！！」

「！！」

桜咲さんの夕凧を魔法ではじく野菜。
でも、この後はたしか・・・。

「フツ」

ガシ！！

「ぎゃぴい！！」

首と大事なモノをつかまれ奇声をあげる野菜。

「何者だ、答えねばひねり潰すぞ」

「あふう・・・」

アレを強く握られたのか、なんか感じた声を出す野菜。

正直気持ち悪い。

「……つて、あれ？ネ……ネギ先生？」

「あわ、あわわわわ」

「ア、アニキが……なにしてるんですか旦那！後ろ向いてないで、アニキを助けてくださいええ！！」

がくがく震えるネギを見て助けをこうオコジヨ。

あ！このバカオコジヨ！！！！

「へ？」

桜咲さんが俺の存在に気づいてしまった。
この間の件もあるし俺、襲われるー！！

「き……」

き？

「キヤーーーー！」

「は？」

「へ？」

「ん？」

突然の桜咲さんの叫び声、それに反応する俺と野菜たち。

たしかに普通の反応だが、今は違うんじゃないか？

その後タオルを巻き、落ち着いたのか話しかけてくる桜咲さん。そういえば俺いつまでこういていればいいんだ？

とりあえず、後ろむいたままお互いに自己紹介をする俺と桜咲さん。もう帰りたい。

「あの先程は、みつともない所を見せてすみません・・・」

「やい！桜咲刹那！！やっぱりてめえ！！関西呪術協会のスパイだつたんだな！！」

「ち、違います！私は敵じゃない、私は先生の味方です」

「へ？」

問い詰めるオコジヨだが敵ではないという桜咲さん。そして変な声を出すオコジヨと黙っている野菜。

「あ、あのそれってどういう」

「私はこのかお嬢様の・・・」

「ひゃあああああ！！」

桜咲さんが護衛と言おうとした途端ちょうど近衛さんの叫び声が聞こえた。

「じ、この悲鳴は・・・！！」

「このかお嬢様！？」

近衛さんの悲鳴に反応する野菜と桜咲さん。
どうでもいいけどそろそろあがりたい……。

「まさか奴ら、このかお嬢様に手を出す気か!？」

「え……お嬢様?」

走り出す桜咲さんにとりあえずついていく野菜さて、これでよつやくあがれる。

とりあえず湯から出て体を冷やす事に。

あゝそれにしてもなんでこゝなるのかな……。
なんかイライラしてきた。

「ひゃあああ!」

「ウキ!ウキ!」

サルの声が近づいてくる。

あーうぜえ!!

「うるせー!!」

「ウ……キ……」

目をつむり小さな魔力を鬼の手で切り裂き瞬時に元の人間の手に戻す。

「なんなん今の……?」

「大丈夫ですかお嬢様！」

近衛さんを追っていた桜咲さんが近衛さんの無事を確認する。
俺はその間に脱衣所に向かう。

「あ、ありがとうございます雄介さん」

「旦那怒らせるところえーな・・・」

「そうだね・・・」

「そうね・・・」

なんか言っているが早く脱衣所に行つて
部屋に帰る・・・。

十一話 京都行きますその2

―刹那視点―

まったくネギ先生には期待をしていたのにつかりだ。

私は露天風呂に向かいながら今日の出来事を考えていた。

列車の中のカエルといい清水寺での悪戯といい本当に情けない。

こんな時名も知らないあの人がいてくれたら。

まあいない人のことを考えてもしょうがない。

私は考えを振り払い明日はどうお嬢様を護衛するか考えながら女と書かれたのれんをくぐる。

服を脱ぎ籠に入れ体を隠せるくらいのタオルを持って。

扉を開ける。

ガラ

意外と広いな……。

私は近くにあつた桶で掛け湯をした時だ。

少し先の岩陰からわずかな殺気を感じた。

敵か!!

「殺気！誰だ!？」

私が岩に向かって叫んだがそこから誰かが逃げる気配を感じた。

「逃げるか！神鳴流奥義……斬岩剣!!」

「「「!？」」」

私は斬岩剣で岩を真つ二つにして逃げようとした人間に追撃をかけるため
刀を構える。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル!!」

「風花武装解除!!!!」

「!!」

相手は西洋魔法を使って私のエモノをはじく。
だが、甘い!!

「フツ」

ガシ!!

「ぎゃぴい!!」

私は魔法使いの呪文を唱えさせないように首を絞め体つきから男と
判断し
急所を掴む。

「何者だ、答えねばひねり潰すぞ」

「あふう・・・」

私があれを握る手に力を入れ質問をする。
しかしコイツつかまれているのに何て声をだすんだ。

正直気持ち悪いが我慢して答えを待つ……。
ん？この顔は……。

「……つて、あれ？ネ……ネギ先生？」

「あわ、あわわわわ」

「ア、アニキが……なにしてるんですか旦那！後ろ向いてないで、
アニキを助けてくださいええ！！」

私が敵だと思つて首に手を掛けていたのはネギ先生だったようだ。
そして、オコジヨ妖精が助けを求める声が聞こえた。
私はオコジヨが向いている方を見る。

そこにいたのはここに向かうときいたらいいなと考えていたあの人
だった。

「へ？」

な、なんでこんなところに！！

驚く私だが自分の格好を思い出す。

「き……」

顔が熱くなり恥ずかしさが頂点に上った私は……。

「キヤーー！」

「は？」

「へ？」

「ん？」

情けなくも叫んでしまった。

その後、タオルを体に巻き冷静になって自己紹介をする。

男性の名前は鶴野 雄介さんというらしい。

雄介さんは私に気を使って今だ後ろを向いています。

正直ありがたいです。

「あの先程は、みつともない所を見せてすみません……」

「やい！桜咲刹那！！やっぱりてめえ！！関西呪術協会のスパイだつたんだな！！」

「ち、違います！私は敵じゃない、私は先生の味方です」

「へ？」

とりあえず、醜態を晒した事を謝罪したのですが、オコジヨが何を勘違いしたのか私を

敵のスパイだと言ってきました。

私は誤解を解くため弁解をしたのですが、ネギ先生はまだ理解できていないのか

固まっています。

「あ、あのそれってどういう」

「私はこのかお嬢様の……」

「ひゃあああああ！！！」

ようやく、理解が出来たのか先生は質問をしてきますが。私が答えようとしたときこのかお嬢様の悲鳴が聞こえた。

「こ、この悲鳴は・・・！！」

「このかお嬢様！？」

私はこのかお嬢様の悲鳴の聞こえた方を向く。
まさか・・・！！

「まさか奴ら、このかお嬢様に手を出す気か！？」

「え・・・お嬢様？」

私は悲鳴の聞こえた脱衣所に向かうためはしりだしました。
するとネギ先生もついてきます。

ガラ！

「お嬢様！！」

「このかさん大丈夫ですか！？」

「いやあああ〜ん！」

「ちょ・・・ネギ！？なんかおサルが下着をー！ー！？」

「ウキ！ウキ！」

「キー!!!」

私とネギ先生が勢いよく扉を開け中を見る。
すると、お嬢様と神楽坂さんがサルに下着を脱がされていた。

「あーん!せつちゃんにネギ君!?見んといて~~~~!!」

「えう!一体これは・・・!?」

「こ、この小猿ども・・・」

私は怒りに震えながら夕凧を構える。

「このかお嬢様になにをするか~~~~!!」

「え~~~~!!!!」

私が怒号をあげたらビックリしたのかネギ先生が反応する。

「きゃ、桜咲さん何やってんの!?その刀本物!?!」

がし!

「駄目ですよお猿さん切ったらかわいそうですよ~~~~!!」

式紙だと気づかないのか先生は私を羽交い絞めにして行動を邪魔する。

私は味方だといったのにこの人は~~~~!!

「待って、二人とも!!!このかがおサルにさらわれるわよ~~~~!!」

「ひゃ~~~~！」

「お嬢様!~!」

神楽坂さんの言葉を聞いてお嬢様の声ができる所を見る。

サルたちがお嬢様を担いで連れ去ろうと露天風呂のほうに出て逃げる。

私は先生の羽交い絞めを解き飛び出した。

間に合え!!

「うるせー!!」

「ウ・・・キ」

怒号と共にお嬢様を担いでいた、サルたちは一瞬で細切れになった。私は細切れになった瞬間、私はお嬢様をキャッチしたのだが一体どうやって。

やっぱりこの人は強い・・・。

「なんなん今の・・・？」

「大丈夫ですかお嬢様!」

お嬢様が理解できていないので不思議がっている。私はすぐに無事を確かめた。

「あ、ありがとうございます雄介さん」

「旦那怒らせるとこえーな・・・」

「そうだね・・・」

「そうね・・・」

私はとりあえずお礼を言った。

だが、ネギ先生たちは怖くなったのか。

オコジヨの意見に同意している。

たしかに怖かった・・・。

「あ、あのーせっちゃんなんかよーわからんけど助けてくれたん？
あ・・・ありがとう」

「あ・・・いや・・・」

お礼を言ってくるお嬢様。

違うんです・・・お嬢様、わ、私はウチは・・・。

私は守れなかった自分が情けなくて、お嬢様をおろし
逃げ出した。

こめん・・・このちゃん・・・。

十一話 京都行きますその2（後書き）

次回 トイレのおサルさんが出たあゝっ！
お楽しみに！

十二話 饅頭

ーアスナ視点ー

私は今日露天風呂で思わぬ人を見た。

そう、雄介先輩だ。

何故、雄介先輩がここにいるのかネギにも聞いたけど。わからないらしい、まったく役に立たないわね！

しかし、さっきのこのかをさらおうとしていたおサルあは・・・それに桜咲さんの態度も気になる。

一体なんだったのだろう。

私はお風呂から出た後、ネギと一緒にこのかになにがあつたのか聞くことにした。

「うちな引つ越してアスナと同じ部屋になる前は京都に住んでたやろ？」

うちは小さい頃はえらい広くて静かな屋敷で育つたんやけど・・・山奥やから友達が一人もいーひんかつたんや、そんなある日・・・せつちゃんが来て初めての友達になつたん、せつちゃんは剣道やってて

怖い犬を追い払ったり、危ないときは助けてくれた」

「へー」

このかのはなしに思わず声が出てしまった。

何だ、このかの話聞く限りいい人じゃん桜咲さん。でもなんでそんな人があんな態度を？

「何やらうちが川で溺れそうになった時も一生懸命助けようとして

くれて・・・

結局二人とも大人に助けられたんやけど・・・
でもその後、せつちゃんは剣の稽古で忙しくなってあまり会わんよ
うになって
うちも麻帆良に引越して中一の時、せつちゃんもこっちに来て再
開できたんやけど・・・
でも・・・」

言葉を区切り涙を目に溜めるこのか。

「・・・なんかうち悪い事したんかなあ・・・せつちゃん昔みたい
に話してくれへんよー
になってて・・・」

「このか・・・」

「このかさん・・・」

その後、私はこのかを励ましつつ部屋に送った。
そしてロビーで待っているネギのところへ。

「このかさん寂しそうでしたね」

「うん・・・普段のこのかなら絶対あんな顔しないもん
あ・・・でも中一の新学期でちょっと落ち込んだことあったかな
・・・
水くさいなー何にも話してくれなかったなんて・・・」

このかの事を話ながら私とネギは見回りもかねて廊下を歩く。

「そつだ、桜咲さんは結局どうなつてんよ!？
敵なの？味方なの？」

「ふうむ・・・どうやら敵じゃねえみたいだが、本人に直接聞いた
ほうがよさそつだ」

何故か私の肩に乗っている力毛が答える。

あんたネギのペットなんだからネギのほうに行きなさいよ。
そして話を聞くために桜咲さんを探す事に・・・。

「あ、いたいた桜咲さん」

ネギと階段を降りているとき旅館の入り口に御札のようなものを張
っている桜咲さんを見つけた。

なにしてるの？

「な、何をやってるんですか？桜咲さん」

「これは式神返しの結界です・・・」

「へえー」

ネギが桜咲さんに質問をして桜咲さんが答える。

結界かそんなこともできるんだ桜咲さん。

それにしてもさっきの事もあつてか不機嫌だ。

それから私達は人気のない場所に移動してソファーに座り話をする。

「えと・・・桜咲さんは日本の魔法が使えるのですか？」

「ええ、剣術の補助程度ですが」

「なるほど、ちょっとした魔法剣士ってわけだな」

オコジヨと普通に会話をする桜咲さん。

そーかオコジヨが喋っても驚かない世界の人なんだ……。

その後、桜咲さんが味方でゴキヤ神鳴なんたらを説明してくれるが理解が出来なかった。

しかし、一つだけ理解が出来た。

「ちょっと何かヤバそうじゃん!？」

「まあ、今の時代は神鳴流と陰陽師は組む事がなくなりましたが・

」

「じゃ、じゃあ神鳴流って事はやっぱり敵じゃないですか!」

ネギが敵じゃないかと言うがさっき桜咲さんが味方って言ったの聞こえてなかったの？

「まあ、彼らから私を見れば西を裏切り東にいった裏切り者でも、私の望みはこのかお嬢様を守る事です

仕方がありません、私はお嬢様を守れば満足なんです」

「刹那さん……」

「……」

思いつめたように話す桜咲さん、そしてそれを聞いた私とネギついでにカモ

まあネギが桜咲さんの名前を許可なく呼んだのは置いて・・・。

「よし！わかったよ桜咲さん！！桜咲さんがこのかの事を嫌ってなくて良かった

それがわかれば十分！！友達の友達に友達だからね私も協力するよ！！！！」

バン

「わっ、か、神楽坂さん・・・」

「それじゃあ決まりですね！」

私は桜咲さんの友達になり協力するついでにこのかと仲良くさせようと考えた。

ネギは何かを決めたようだが何を決めたの？

「3-A防衛隊結成ですよ！！」

「えー・・・何よその名前」

突然やる気を見せるネギだがそのネーミングセンスはどうかと思う。桜咲さんも恥ずかしいようだ。

「さっそく、僕外に見回りに行つてきます！！」

「あ、ちよつとネギ・・・」

「大丈夫ですよ神楽坂さん、私達は班部屋を守りましょう」

そうして私と桜咲さんは自分が泊まっている部屋に行く。

「ただいまーって、あれ？皆寝てるわね・・・」

どうやらみんなもう寝てしまったようだ。

昼間のお酒まだの抜けてないのかな？

「でわ、私は各部屋を見回りますので」

「わかったわ、それじゃあ何時間かしたら交代ね、大丈夫このことは付きつきりで守るから」

「すみません、神楽坂さん、でも何かあったらすぐに呼んでください」

そして、見回りに行く桜咲さん。

その後このかが起きてトイレに行った。

さすがにトイレはしょうがないと思い部屋で待つ。

しかし10分経っても帰ってこないだから私はトイレの前に来ただけれど。

ゆえちゃんがトイレの前でピョンピョン飛んでいたから事情を聞いてみた。

話によるとこのかはお昼で飲みすぎたためおなかを壊したんじゃないか、と聞いた

たしかにその可能性はあると思い待つ、しかしここで桜咲さんが来て。

何かの異変に気がついたのか扉をこじ開ける。

すると中にはこのかの姿はなくトイレにお札が貼ってあった。

ちょうどそのタイミングでネギの声が頭に聞こえこのかがさらわれた事を話す。

そして、刹那さんが敵の気配を辿って追いかけ始めたので、私もついていく事にした。

―雄介視点―

風呂から出て、部屋に戻った俺だがこんなことでくじけはしない！風呂は後で入りなおせばいいし問題ない！！なぜ、今から入りに行かないかというと野菜たちがまだいる可能性があるからだ。

俺はゆったり入りたいたいだから時間を空けるのだ！しかし何をしようか・・・。

そうだ外に出て風景を見ながらお茶をしよう。

そうと決めた俺は自分の水筒に熱いお茶を入れ。

茶菓手に饅頭をもって外に出る。

いや〜いい感じに涼しくて気持ちいい。

さてと周辺の地図の書いてある看板を見て。

風景がいいと書いてある橋に向かった。

橋に着くとこれはたしかに風景が綺麗だ。

橋の向こうには昔ながらの京都の町があり屋形船の明かりがとてもいい感じに演出している。

俺は近くのベンチに座り。

お茶と饅頭を出す。

「ふ〜落ち着くな〜」

お茶をすすり幸せの気分には浸っていると・・・。

ズシャン！！

「うおー!!」

バシヤ!

上からデカイ何かが降ってきて俺は食べようとしていた饅頭と片手に持っていた

お茶の入ったコップを落としてしまった。

何なんだ一体!?

俺はデカイ何かを見るため顔をあげる。

「あら?さつきはどーもお世話になりましたな・・・」

いたのはでかいサルのきぐるみをきた女だった。

「まてー!」

「うち、ほなさいならかつこいいおにーさん」

野菜の声が聞こえ逃げるサル女。

そして、俺は落としてしまった饅頭たちを見る。

ふっ、クロス・・・。

俺は水筒を宿の自分の部屋に戻し。

標的の魔力を追う。

絶対に許さん・・・。

十三話 饅頭その2

―雄介視点―

あのサル女絶対に潰す・・・

俺はあの女の魔力をたどり駅の近くの階段に来た。
見つけた・・・。

なんか野菜たちもいるが関係ない。

シュン！

ガシイ！

「ひいつ!!！」

俺は瞬動で女の隣に移動して鬼の手で女の頭を掴む。
女は驚いて声をあげる。

そつだ、ボコボコにするまえに脅しまくってやろう。
食べ物の恨み思い知れ！

「てめえ、よくもやってくれたな・・・」

「あ・・・ああ・・・」

言葉に殺気をのせてやると女はびびりまくって震えている。

「ゆ、雄介さん!!ちょっと待ってください!!」

「そ、そつですよ雄介先輩!!」

「やめてください！雄介さん！！」

野菜、神楽坂さん、桜咲さんが俺を止めようと大声で叫ぶ。
野菜はどうでもいいがあの子二人に言われると……。

「つく！」

女は力が緩んだのを感じたのか。

逃げようとする。

させるか！くられ、アイアン……。

「ほら！ちゃんと受け取りや！！」

ガシ！

「なっ！！」

俺がアイアンクローを食らわせようと迫った時。

女は近衛さんを俺に投げ、呪符でどこかに転移した。

くそ！逃がした！！

「雄介さん、ありがとうございます」

「……」

お礼をいつてくる野菜。

あくだめだ、またイライラして来た。

「だ、旦那落ち着いてくだせえ、敵はもういないんすよ……」

「そ、そうですね、気持ちはわかりますが落ち着いてください」

オコジヨはともかく、神楽坂さんに言われたらしょうがない。
鬼の手を元の手に戻し、落ち着く。

それにしても皆なにをそんなに怖がっているんだ？
俺そんなに怖かったのか？

「そ、それよりもお嬢様は大丈夫なんですか？」

「ああ、よく眠っている」

桜咲さんが近衛さんの無事を聞いてきたので答えた。
特に外傷もないし、魔法の気配もない。
大丈夫だろ。

「そうですね・・・」

安心した顔をする桜咲さん。
そして・・・。

「ん・・・玉藻さん・・・？」

「・・・無事でよかったです、お嬢様」

目を覚ます近衛さん、無事でよかったと口を開く桜咲さん。
ん？なんかこの空気、俺はじゃまだな。

「寒くなったし、このままだと風邪をひくな俺」

「へ？」

「「「「え？」「」「」」

俺の突然の言葉にあっけを取られる近衛さんとその他。

「じゃあ、近衛さんをよろしく」

「え！？ちよつとまて・・・」

シュン！

桜咲さんに近衛さんを渡し瞬動で旅館に向かう。
さて、露天風呂に入って寝ますかな。

―刹那視点―

私はサル女駅の近くの階段に追い詰めたのだが、神鳴流の人間に邪魔をされた。

神楽坂さんはサル女の式神に邪魔をされているし、ネギ先生はお嬢様を盾にされ、攻撃ができないでいる。
くそ！どうしたら・・・。

「ホーホホホホ！まったくこの娘は役に立ちますなあ！
この調子でこの後も利用させてもらいますわ！」

「このかをどうするつもりよー！！」

式神と戦闘をしている神楽坂さんが調子に乗っているサル女に聞く。

「せやなー……まず口をきけなくして、つまいことつちらの言っ
事を」

聞く操り人形にでもするのがえーかな」

「な……」

「何ですって……?」

女の言葉に怒りをあらわにするネギ先生と神楽坂さん。
私も抑えられそうにない……。

「うちの勝ちやな……ほななーケツの青いクソガキども
おシーリ、ペーンペン」

私は我慢の限界が来て月詠と名乗っていた神鳴流の剣士を切り飛ば
し、神楽坂さんも
式神を送り還し女に突っ込もうと走り出す

「このかお嬢様に何をするか……!!」

「このかに何てことすんのよ!!」

しかし、ここで思わぬ出来事がおこった。

シュン!

ガシィ!

「ひいつ……!!」

雄介さんがとつじょ女の隣に現れたのだ。
雄介さんは銀の髪をなびかせ鬼の手で女の頭をわし掴みにする。
そして……。

「てめえ、よくもやってくれたな……」

「あ……ああ……」

女がした行為が許せないのか、凄まじい殺気を放ちながら女を睨む雄介さん。

私の近くにいる神楽坂さん、ネギ先生についでにオコジヨも殺気にあてられたのか
これ以上動こうとはしない。

でもこの殺気はまずいこのままだと雄介さんはあの女を……

「ゆ、雄介さん!! ちょっと待ってください!!」

「そ、そうですね雄介先輩!!」

「やめてください!! 雄介さん!!」

ネギ先生が私と同じ考えにいたったのか雄介さんを止めます。

そして、神楽坂さんと私も雄介さんを止めるため声を出します。

雄介さんに人殺しをしては欲しくないと思ってしまうた、ゆえの行動だった。

その後、雄介さんの殺気がなくなって来てこれで大丈夫と思ったとき。

「つく!!」

女は雄介さんに出来たわずかな隙をつき逃げ出す。

しかしそれ無駄だ雄介さんが逃すはずがない。

雄介さんは鬼の手でもう一度女を掴もうと迫るが、女がお嬢様を雄介さんに投げた。

あの女！！

雄介さんはお嬢様を受け止めるが、女はその隙に札でどこかに転移してしまった。

私達は雄介さんのところに行きます。

「雄介さん、ありがとうございます」

「・・・」

ネギ先生がお礼を言いますが、さっきの事を思い出して怒っているのか。

すごい威圧感を放っています。

「だ、旦那落ち着いてくださえ、敵はもういないんスよ・・・」

「そ、そうですね、気持ちはわかりますが落ち着いてください」

オコジヨと神楽坂さんが声を掛けた事で威圧感は消え、鬼の手も元の人の手になりました。

そして・・・。

「ん・・・玉藻さん・・・？」

「・・・無事でよかったです、お嬢様」

お嬢様が目を覚ましたようです。

よかった……。
それにしても玉藻って誰ですか？

「寒くなっただし、このままだと風邪をひくな俺」

「へ？」

「」「」「え？」「」「」

突然雄介さんが風邪をひくと言い出しました。
さすがにこれは意味がわかりません。

このかお嬢様とその他の人たちと私は思わず変な声が出てしまいました。

「じゃあ、近衛さんをよろしく」

「え！？ちよつとまて……」

シュン！

そしてそのままお嬢様を私に渡して瞬動でどこかに行ってしまった。
した。

もしかして雄介さんは……。

「せつちゃん、うち夢見たえ……へんなおサルにさらわれて
でもせつちゃんやネギ君やアスナそして玉藻さんが助けてくれるん
や」

「もう大丈夫ですかお嬢様……」

お嬢様の話を聞いてわかったことがあるさっきの玉藻という名前は
雄介さんの事だろう。

しかしどゆことだ、どっちかが偽名なのか？

「あ、このか言い忘れてたけど玉藻さんの本名は鶴野 雄介って名
前なんだよ」

「そうかーでもなんで嘘の名前を言ってたのかなー？

まあそれよりもよかったー、せつちゃん・・・うちのこと嫌ってい
る訳やなかったんやなー・・・」

「え・・・そ、そりゃあ、私かてこのちゃんと話し・・・」

なるほど玉藻のほづが偽名だったのか。

私はてつきり・・・

そしてお嬢様にお声を掛けていただいたとき思わず自分の本音が出
てしまいそうに

なるのに気がついた。

い、いかん！

「し、失礼しました！」

「え・・・せつちゃん」

「刹那さん・・・」

「えと、わ、私はその・・・御免!!」

「あっ・・・せつちゃん!!」

私はお嬢様の前にいるのが耐え切れず逃げてしまった。

「桜咲さん！！明日の班行動一緒に奈良回ろうねー！！
約束だよー！！」

突然後ろから神楽坂さんの声が聞こえた。

私は一度振り返り、旅館に一人帰った。

それにしても雄介さんはお嬢様のためにあんなに怒っていた。

もし、私が同じ事をされたら雄介さんは……。

つていけないこんなことを考えているからミスをするんだ！

私は頭をふり冷静になって自分の班の決められた部屋に入り眠りにつく。

十四話 告白の行方

― 雄介視点 ―

昨日はまいるいろあつたがもう大丈夫なはずだ。

俺は今、バスで奈良に来ている。

久しぶりに見る大仏は楽しみだ。

俺はバスを降りて、バスガイドさんに従い大仏の近くまで来た。

「それでは、みなさん2時間後にここで集合しましょう、なにかありましたらご質問
ください」

さて、来るとき色々教えてもらったし回るかな。

「あ、雄介さん！」

「先輩！」

「旦那!!！」

「雄介さん!!！」

おいおい、これは一体どういう事だ。

俺は聞き覚えのある声が聞こえ振り向く。

すると、野菜、神楽坂さん、オコジヨ、桜咲さんがいた。

何で？こいつら今日は映画村じゃなかったっけ？

もしかして間違っていた？

「なんだ？」

「いえ、昨日のお礼言いそびれていたの、ありがとうございました」

「別にいいんだが・・・それy・・・」

「アスナ、ネギ君一緒に大仏見ようよ！」

「へぶ！」

「せつちゃんお団子買ってきたえ、一緒に食べよー！！」

「え！？」

突然の早乙女さん、綾瀬さん、近衛さんの行動により。

さっきまで目の前にいた人間は全員拉致された。

よくわからんがよかったのか？

「あ、ああ、あのー、雄介さん」

「ん？ああ、宮崎さん久しぶりだな」

「は、はい！あ、あの、ふ、二人で回りませんか？」

最後の方がよく聞こえなかったが俺と回りたいということだろう。しかし何故？

そうか、野菜はさらわれたから俺に来たのか。

しかし早乙女さんたちは協力しているんじゃないのか？

わかったぞ、つまり野菜の好みやそうゆづの調査もとい尋問して

いるに違いない。
そういうことなら……。

「わかった、一緒に回るか」

「は、はい！よろしくお願いします！！」

この後の野菜の告白に緊張しているのか真っ赤だな。
少しでも緊張が解けるといいのだが……
それから俺達は大仏を見に行く事になった。

「なつかしい……」

「あ、あの雄介さん！わ、私！す……すき……
大仏が大好きで！！」

「そ、そうか……渋い趣味でいいんじゃないか」

懐かしいと俺が声をもらしたら突然、宮崎さんの大仏が大好き宣言。
あれ？これってもしかして……。
大丈夫だよ、違うよね？

「あ、あの雄介さんあの柱の穴ってなんだかわかりますか……？」

「ああ、アレは……」

しょんぼりしながら聞いてくる宮崎さん。
大仏の鼻について質問されたので答えた。
そうすると……。

「願いが！やります！くぐります！！」

突然元気になる宮崎さん。

そして、穴をくぐろうとするのだが……。

「お、お尻がハマツちゃいましたあ！！」

「はあ！」

その後なんとか脱出できた宮崎さんだが……。

「ごめんなさーい！！」

宮崎さんは俺に謝りながらダッシュでどこかに行ってしまった。

はあ、どうしよう……。

ーのどか視点ー

はあ、せつかく二人にでいたのに。

恥ずかしさで逃げてしまいました。

あれ、あそこにいるのは……。

「あ、アスナさん、ネギ先生に桜咲……さん？」

「……君は宮崎さん？」

「ど、どうしたの本屋ちゃん？なにがあったの！？」

「宮崎さん、なにかあったんですか！？」

珍しい組み合わせだったので思わず声をかけてしまった。

その後アスナさんとネギ先生が泣いている私を見て大きい声をだしてきたので

私は雄介さんに告白しようとかんばった事を思わず三人に話してしまい
ました。

「マジで！！雄介さんに告ったの!？」

「それは本当ですか!？」

「へー宮崎さんは雄介さんの事が好きだったんですね、しかしなにがあつたんですか？」

上からアスナさん、桜咲さん、ネギ先生の順番に私に聞いてきます。

「しようとしたんですけど・・・私ト口いので失敗してしまって・・・

あ、すみません桜咲さんとはあんまり話したことがないのにこんな話を

しちゃって・・・」

「いえ」

「宮崎さんはどうして雄介さんを好きになつたんですか？」

私が桜咲さんに謝るとネギ先生が好きになつた理由を聞いてきました。

「えと・・・雄介さんは優しくて頼りがいもあるし、それに昔話や童話に出てくる王子様や正義の味方みたいで、本当は見ているだけで満足だったんです

それだけで幸せな気持ちになれますから、でも今日は自分の気持ちを伝えてみようって

思ってた・・・」

「そ、そうなんだ・・・」

「・・・」

あれ？なんか桜咲さんと神楽坂さんの様子が・・・。

「あ、聞いてくれてありがとうございます、じゃあ・・・！」

私はもしかしたら二人も・・・。

私は雄介さんを探しに走り出しました。

十五話 告白の行方その2

―雄介視点―

さて、俺は宮崎さんがどこかに行ってしまったことで周りの人々にまるで女の敵めといわんばかりの視線に晒され耐えきれなくなり宮崎さんを探す事にした。

走った方向からこっちに来ているはずなんだが・・・。

俺は宮崎さんが走っていった方向にある公園にきて考える。

困ったなこのままバスに行ったりしたらなんか悪いし、本当に困った・・・。

「雄介さーん！！」

「ん？」

後ろの方から宮崎さんの声がしたので振り返る。

ああ、見つかってよかった。

「ゆ、雄介さん！わ、私・・・私、雄介さんのことであつた日からずっと好きでした！

わ、私は雄介さんのことが大好きです・・・！！それじゃあ失礼します！」

ホワット？走り去っていく宮崎さんを見て思考が止まってしまった。なんだ、どうゆうことだ野菜じゃないのか？作戦じゃあなかったのか？

しかし、告白をされてしまった・・・。

って！いい気分になっている場合じゃない！

カモくんが止めますが少し遅かったです、アスナさんはさっきより太い枝を片手でへし折ります。

あわわわわわ！刹那さんのとなりにあった大木が真つ二つに――！二人ともにこやかなのにはてしなく怖いです。

「さあ、私達はバスに戻りましょうか・・・」

「そうですね・・・」

「は、はい・・・」

二人がバスに戻るために歩き出します。

く、空気が重いです。

二人はどしてああなってしまったのでしょうか？

十六話 ホテルよりも大事なものがあ

― 雄介視点 ―

告白された後、なんとか冷静を取り戻した俺。

しかし、告白の返事をしていない帰ったらするべきか？

そうして、バスに乗り込み豪華ホテルについた。

おゝすごい、豪華ホテルというだけのことはある。

バスから見たのだがまるでラスベガスにでもありそうなホテルだった。

昨日と同じようにバスから降りてフロントに向かう。

受付嬢から鍵を受け取りさあ部屋へ行こうとしたときだ。

「そこをなんとかできませんか？」

「しかし、とうホテルはもう部屋がありませんので・・・」

ん？思わず声のするほうを見てしまったのだがなにかあったのだろうか？

「そうですか・・・」

受付の人と話していた男性がしょぼんと見るからに残念そうに玄関に歩き出す。

まるで、自殺でもしそうなくらいに暗かったので思わず俺は・・・。

「どうかしたんですか？」

「へっ？」

うお！振り返った男性の顔はとても青白かった。
一体何が……。

「あの、何でしょう？」

「あ、すみません実はさっき受け付けの人と話されてからとてもがっかりされていたので
気になってしまって、顔色も悪いし大丈夫ですか？」

「ああ、さっきのですか……実は……」

それから男性の話を聞くことになったのだが。

なんでも、今日はいつも単身赴任で家にいられずいつも娘さんや奥さんにさびしい思いを

させていたので今日と明日は休みをとって家族旅行に来たそうなのだが、このホテルの部屋が

全部埋まってしまっていたためどうしようか困っているようなのだ。俺は近くのホテルではだめなのか聞いてみたが娘さんがこのホテルに泊まることを楽しみに

していたそうだ、だからその娘さんにこれからなんて言おうか困っていたからあんなに暗くなっていたようだ。

そうか……家族のためにか……。

「ちょっとここで待っていてください」

「どうしてですか？」

「いいから、ここで待っていてください」

男性に待っているよう釘を刺し。
俺はある事をするため受付に行った。

「すみません」

「はい、どうかなされましたかお客様？」

「実は・・・」

俺って以外にお人よしなのかもしれないな。
そう思いながらホテルを出るのであった。

― 男性視点 ―

私は今日いつも何もしてやれなかった娘と妻を連れて家族旅行に来ている

しかし、受付で娘が今日一番楽しみにしている豪華ホテルは部屋が全部使われていて

泊まることができないと言われた。

私はまるでこの世の終わりのような感覚だった。

娘になんて言おうあんなに楽しみにしていたのに・・・。

私は娘の泣き顔をみたくはない、しかしこればかりは私が悪い。

来る前日に予約しておけばよかった。

仕事で疲れきって寝てしまった自分を殴ってやりたい。

激しい後悔と娘にどう言おうかで私は死にそうだった。

そんな時だ・・・

「どうかしたんですか？」

「へ？」

私は突然の声に変な声をもらして振り返る。

するとそこにはモデルではないかと思うほど美形な青年が立っていた。

私は青年に何の用があるのか尋ねるため口を開いた。

「あの、何か御用でしょうか？」

「あ、すみません実はさつき受け付けの人と話されてからとてもがっかりされていたので

気になってしまつて、顔色も悪いし大丈夫ですか？」

「ああ、さつきのですか・・・実は・・・」

私はよほど酷い状態に見えていたのだろう。

この青年は私を心配して声を掛けてきてくれたのだ。

最近の若い者はと思つていたが、考えをあらためる必要があるな。

私は心配してくれた、青年に話した。

もしかしたら、この青年に聞いてもらつて少しでも楽になろうと思つたからだ。

人に話せば楽になる事もあるというし、実際少しは楽になった。

話した後、青年は何か決めた顔をして口を開いた。

「ちょっとここで待っていてください」

「どうしてですか？」

「いいから、ここで待っていてください」

青年は私にここで待つようにと言われたのだが、私はわからず青年に質問したのだが

ここで待つているように言われ、青年は受付の方に行ってしまった。私はもしかしたらと思い期待をしておしまった。

しかし、青年は受付の人と話をしたらホテルから出て行ってしまった。

やっぱり無理だったか・・・。

「お待たせいたしましたお客様」

「へ？」

私は娘と妻が待っている車に向かうため歩き出したのだがさっき私と話していた受付の人が

私に声を掛けてきた、私は青年と会ったときと同じ声を出し振り返る。

「こちらが、お部屋の鍵となりますのでどうぞゆっくり」

そう言つて、私に部屋の鍵を渡し受付の場所に帰っていった。

私は理解できず啞然としていた・・・。

・・・そうだ！呆けている場合じゃない！

私は青年にお礼を言おうと急いでホテルを出た。

しかし、時はおそくもう青年の後ろ姿さえ見えなかった。

私は見えない青年に頭を下げ、娘達が待つ車に向かった。

十七話 キスしてしまいました

―雄介視点―

俺は男性に部屋を譲った後、自分が泊まるための宿を探し

現在部屋を借りて泊まっているのだが、魔法の気配がするのだ。

これはもしかして……。

おそらくオコジヨと朝倉さんの仕業だろう。

まったく魔法の秘匿はどうした……。

まあ、俺は関係ないし寝る前に風呂でも入るかな。

俺は洗面用具と着替えの浴衣を持って、部屋を出た。

「あの……雄介さん！」

「ん？」

後ろから声を掛けられ振り返る。

すると宮崎さん綾瀬さんがいた。

もしかして……。

「雄介さん……あの……」

顔を真っ赤にして途切れ途切れに話す宮崎さん。

やばいこれは確実に俺も巻き込まれているな。

だとすれば俺の取る行動は一つ！

「悪い宮崎さん俺は今から風呂なんだ風呂から出たら話を聞くから……」

「恨みはありませんが、お覚悟です!」

ブン!

「うお!」

「夕映!」

俺が最後まで喋る前に綾瀬さんが辞書のような分厚い本で俺に殴りかかってきたので

回避する。

しかしここまでするのはこれは本気でまずいな。

「のどか、このまま鶴野さんを気絶させるです、手伝ってください」

「えっと・・・うん」

宮崎さんと協力して俺を襲おうとする二人。
しかたがないこうなったら・・・。

「よくわからんが逃げさせてもらおうよ」

「そうはいかないです!」

俺が走り出そうとする素振りを見せたらあわてて襲ってくる綾瀬さん。

掛かった!!

「ほっ」

「なっ！」

「え？」

俺はこっちにくる綾瀬さんを飛び越えダッシュで男湯に向かう。

そう男湯にまで辿り着けばあの二人は追って来れない。

俺は階段を飛び降り一階へ降りる。

よしもう少しだ。

俺は地図を確認して風呂場に向かう。

「見つけたネ！雄介さん！」

目の前にクーフエさんと長瀬さんが現れた。

どうゆうことだ？二人は俺を狙う理由がないはず……。

俺は理由を考えていると。

「まさか玉藻殿の本当の名前が雄介殿とは聞いて驚いたでござる」

「そうネ、嘘はよくないヨ」

ああ、もしかしてあの二人俺の事ばらしたな。

ふつつつと小動物と朝倉さんに対する怒りがこみ上げてきた。

「それよりも、私と勝負するネ」

「その後はぜひ拙者と戦っていただくでござるよ雄介殿」

目標の風呂場は近いしかしこれでは辿り着けないこっぴなっぴこの二人を気絶させる

しかないな。

「じゃあ、行くね！」

ドン！

足に気を集中させダッシュを掛けてくるクーフェさん。
一般人にしては上位かもしれないが・・・遅い！！

トス

「かつ・・・」

ガシ

俺は突っ込んでくるクーフェさんの首に手刀を当てて気絶させ転ばないようにキヤッチした。
まったくこの戦闘狂め・・・

「では、次は拙者の番でござるな」

「ねえ、もうやめにしない？」

俺はクーフェを少しはなれたところに寝かせ長瀬さんに質問をする。

「いやでござる・・・」

シュカカ！

「うお！！あぶな！！！！！！」

俺は突然に投げられたクナイを飛んで避ける。
本当に危ない、当たったらどうするつもりなんだ。
俺は着地しようとして下を見る。
なっ！なんで……

「危ない！！」

「のどか！！」

「へ？」

俺が下にいる宮崎さんを確認して危ないと叫んだとき綾瀬さんも叫んだがもう遅い。

俺は宮崎さんに向かって落下した。

「くっ！！」

「ぎゃ！！」

俺はなんとか体を捻り回避しようとしたが……。
結局ぶつかりそして……。

「はっ！！」

「……」

やっちまった……。

俺は宮崎さんとキスしてしまった。

宮崎さんは変な声を出し気絶してしまった。

つまりこれは……仮契約をしてしまったということだよな……

くくくく・・・オコジヨと朝倉さん少し怖い目にあってもらおうか・・・
俺はゆらりと立ち上がりオコジヨの魔力を探り歩き出す。

「雄介殿あの・・・勝負は・・・」

「そうか・・・そういえば途中だったな」

長瀬さんの言葉を聞いて振り返る。

「お休み」

「え・・・」

瞬動で後ろに回り手刀で気絶させる。
さて行きますか・・・。

―和美視点―

私は今日ネギ君が魔法使いだという事を知った。

そして今、私とネギ君の相棒のカモっちと手を組んで。

ラブラブチツス大作戦を計画した。

内容はネギ君もしくは鵜野 雄介という一年上の先輩にキスをすれば勝ち

というものだ。

私とカモっちは監視カメラを見ながら食券を賭けた班の部屋にリアルタイムで実況をしている。

そして鵜野 雄介さんが本屋たちに追われ始めた。

「おーっと、ここで本屋、綾瀬チームが逃げ出した鶴野 雄介さんを追い始める！」

「さすが、旦那一筋縄じゃあいかないか……」

難しそうな顔をする力モつち。

そんなに凄い人なのかな？

私の目にはそんなに過ごそうな人には見えない。

たしかに綾瀬を飛び越えた脚力はすごいと思うがあれくらいだったらクーフェや長瀬でもできそうだ。

おっと実況を忘れてた、ええっと現在地は……。

!?

少し目を離して考え事をしているうちに鶴野 雄介さんはクーフェを倒してしまった。

すごい……私にはなにをしたのか見えなかったけど彼がなにかをしてクーフェを気絶させたのはわかった。

「すごい！鶴野雄介さん！クーフェを一撃で気絶させた！！あのモデルのような体格にどんな力が……」

私はとりあえず自分の仕事に集中する事にした。

あの早業は考えても無駄と思ったからだ。

その後、彼は長瀬のクナイを飛んで回避したのだが、着地地点に運悪く本屋が現れた。

彼は回避しようと体を捻るが間に合わずぶつかってしまふ。

しかしこれは……。

「おー！本屋まさかのキス！！この勝負本屋の勝ちー！！」

まさかのハプニングで見事キスした二人。

さて、そろそろお開きにしますかな。

「姉さん！不味い事になった！！」

私は本屋に賭けている人間はないと思い食券をかばんに押し込んでいるとき。

カモつちがやばそうな感じに叫んだ。

一体なん……。

私は自分の目を疑った、鶴野 雄介さんが一瞬で長瀬の意識を刈り取りこちらに向かってくるのだ。

「カモつちどうゆうこと！？」

「旦那をどうやら怒らせたらしいだから本気でやばいんだ！さっさとずらかるぜ！！」

「ちよつと待つてよ！！」

カモつちが脱兎のごとく逃げ出し始めた。

さすがの私もどれだけ不味い状況になったのか理解した。

私はまだ回収してない食券を放置して逃げ出すために放送室の扉に走ったのだが……。

ガチャ……

「よう、どこに行くんだオコジヨ……」

「ぎゃーーーーー！！旦那ーーーー！！」

カモつちが扉に着く前に扉が開かれ鶴野雄介さんが現れた。
見た感じかなりやばい……。

「これはどうゆうことだ？オコジヨ……」

「い、いや旦那オレつちはこの姉さんにそそのかされて……」

「姉さん？」

「ちょっとカモつちそれはないでしょ！だいたい魔法陣に関してはカモつちの責任じゃん！！」

カモつちが私を生贄にしようとしたのであわてて私も反撃した。
それにしても私これからどうなるの……。

「オコジヨとそこの女子生徒、少しお仕置きだ」

「「ぎゃー……！！」」

その後の事は覚えていない。

しかし、とんでもない思いをしてたのは事実だろう。

なぜなら私が目を覚ましたとき泡を吹いて倒れているカモつちが隣にいたからだ。

もしかしたら、私は気絶させられただけだったのかな？

それから、あの人のことを思い出す。

銀の髪にモデルのような体格に顔たしかに怖かったけど長瀬とクーフェを倒したとき

カッコいいと心のどこかで思っていた。

せっかく知り合えたんだしあの人のこともっと知りたいな……。

こうして私は廊下に出た所を新田に見つかり廊下に正座をさせられ

るのであった。

十八話 將軍様、死す!?

― 雄介視点 ―

俺はホテルを出て、昨日言われた待ち合わせ場所に来たバスに乗って次の観光地に移動した。

そして……。

現在俺はシネマ村に来ている。

これってアレだよな、月詠さん来るよね!?

顔も割れてるしやばいよね!?

まあ、関わらないように行動すれば大丈夫かな?

そんなことを考えながら俺はシネマ村で団子を食ったり、黄門様の土産を見たり

結構エンジョイしている。

それにしても旅行者のコスプレが多いな……俺もしてみようかな? そんなわけで俺はコスプレをするため移動を開始した。

「きゃー! カッコイイー!!」

「……どうも」

コスプレをするための衣装貸し出し所に着物を借りて着替えたのだが、女性店員達

と目が合い黄色い声を上げ一応それに答える。

さすが玉藻の顔、どこにいつてもこうなるんだな……。

現在俺の格好はアサシンの佐々木 小次郎で刀を腰にさし、髪は降りしている。

さて、他の場所を見て回るか。

俺は他のエリアを見回るため歩き出す。

「す、すみません一緒に写真とってもらえませんか？」

「いいですよ」

「やった！」

突然修学旅行で来ているだろう女子高生に声を掛けられ写真を撮る。これで32回目になる正直疲れた、俺は休める所がないか回りを見る。

ん？あれは・・・。

俺が回りを見ていると近くの店で500円で一回のくじ引きがやっていた。

俺は景品が気になり近くに行く。

なっ！！こ、これは・・・。

俺は景品を見て固まった、何故なら景品は俺が好きだった暴れん坊な將軍様のフィギュアだったからだ。

そう俺は、昔將軍様のドラマを見てはまっていた時期があったのだがこの世界でもテレビ放送しててみたら再びはまってしまったのだ。

俺は列に並び順番を待つ、それからしばらくして俺の番になった。

「では、何回にしますか？」

「一回でお願いします」

「わかりました、では先に500円お願いします」

「はい」

俺は店員に500円を払い箱の中に手を入れる。

来い！！

俺は勢いよく箱から手を出しくじを見る。

そこに書かれていたのは……。

あたり

よっしゃー！！！！キターー！！！！！！

俺は表面上は冷静を装い心の中では小さい俺が大勢フィーバーしている。

嬉しいぜ！やふおー！！！！

「おめでとつございます、ではこれが景品となります」

「ありがとうございます」

俺は景品の箱を受け取り近くにある茶店に座りフィギュアの入っている箱を開け中身を
取り出し見ている。

へ〜最近のフィギュアの出来はすごいな〜、よし帰ったら部屋に飾ろう。

俺はフィギュアの完成度に満足して箱に戻そうとするのだが……。

「ざんくーせーんー！」

ポロ

「NO……！！！！！！」

突然フィギュア夢中になっていた俺の所に斬撃が飛んできて俺には
当たらなかったが不幸にも

俺の大事な將軍様の首が飛びコロコロと地面に転がる。

俺は少しの間固まっていたが・・・。

將軍の首を飛ばした不届き物がある方を見る。

そうか・・・またか、また責様らかー！！！！

許さん・・・！許さんぞ！！罪人は打ち首じゃー！！！！！！

十九話 日本橋の決闘

―刹那視点―

私は現在お嬢様を連れて追っ手から逃げている。

くそつヤツ等め一般人がいるのに……。

だが、それは向こうが焦っている証拠……。

むっ!?!ここは!!

「あれ!?!ここシネマ村じゃん!!何よ桜咲さんシネマ村に来たか
つたんだ〜!?!」

それならはじめから言ってくればいいのに!!」

私の後ろをついてきた綾瀬さんと早乙女さん。

この二人を巻き込むわけにはいかない。

「綾瀬さん、早乙女さん!わ、私、このか……さんと、ふ、二人
きりになりたいんです!!」

ここで別れましょう!!」

「え!?!」

「お嬢様、失礼!!」

私は二人に言うと、お嬢様を抱えてシネマ村に入る。

ふう……これだけ人が居れば襲っては来れまい、ここで時間稼ぎ
をして

ネギ先生と合流すれば……。

―ネギ先生、ネギ先生……―

だめか・・・敵の攻撃でちびせつなどの連絡が切れてしまった。
しかしちびせつなを通してみたときかなり消耗していたようだし・・・。

「せつちゃん！せつちゃん」

「はい？」

私が振り向くと、着物姿のお嬢様が居た。

いつ着替えたんですか？

それにしてもお嬢様はキレイになられた・・・雄介さんもこういうおしとやかな方が・・・。

つて！私は何を考えているのだ！！敵が近くに居るといふのに！！！！

「へへへ、どうどう？せつちゃん」

「あ、その・・・とてもお似合いですよ」

「ありがとうございます」

とても素敵な笑顔を見せてくれるお嬢様、変な事を考えている場合じゃない

なんとしても私がお嬢様を守らないと。

「ホレホレ！せつちゃんも着替えんと！ウチが選んであげるー！！」

「え！？ちょ、ちょっと！お嬢様！？」

私はお嬢様に引つ張られ着替えをする事に。

まったく・・・私はこうゆうのが苦手なのに・・・。

「へ〜君、似合ってるね」

「あ、ありがとうございます」

お嬢様に選んでもらった新撰組の衣装を身にまとい腰に夕凧をさして外に出ようと

したらスタッフの人に褒められた、私は女なのだが……。正直複雑な気持ちになってしまった。

「それにしてもさっきの銀髪の人といい今日はすごいね〜」

「そうね〜銀髪の人もしかしてモデルかしら〜」

「あ、そうかも〜私、サイン貰っとけばよかった!」

「今更遅いわよ」

外に出る際、スタッフさんたちの会話が聞こえてきた。

銀髪の人って、まさか……。

私は強く心優しいあの人のことを思い出す。

もしかして雄介さんここに来ているのでしょうか？

まあ、あの人なら私を先回りすることなど見戯にも等しいのかもしれないが……。

もしかしたらこの近くに……。

私はキョロキョロと周りを見渡す。

やはり、私ごときではわからないか……。

「せつちゃん、せつちゃん、あの人たちが写真撮らせて欲しいって！一緒に

うつろー！」

「は、はい」

私の腕に抱きつきカメラに目線を送るお嬢様、あの人たちの格好を見る限り修学旅行生だろうか？

「それじゃあ撮りまーす！」

「ほら、せつちゃんポーズ」

「え、あ、は」

「ありがとうございますー！」

私はとつさに模擬刀を抜き構えてポーズをとる。

私は一体何をやっているんだ・・・？

女子高生らしき人たちは満足したのか写真を眺めお礼を私達に言うてどこかに

移動しようとして歩き出した。

「いやーさっきの銀髪のお侍さんといい今日はついてるねー」

「そうだよねー私もっとお話したかったなー」

「無理無理、あんたゆでだこみたいになつてたじゃん」

女子高生らしき人たちはおそらく雄介さんのことを話しながら去っていく。

雄介さん・・・私も人の事をいえませんがあなたも何をしているん

ですか？

ガガーーーー！！

「な！？」

「きゃ！？」

突然馬車が私とお嬢様の近くで急停止をする、一体なんなんだ！？
私は馬車に乗っている人物を見る。

「な！お前は……！？」

「どうも〜神鳴流です〜」

馬車に乗っていたのはついこの間戦った神鳴流の月詠だった。

こいつ一般人が居るのに一体どういふつもりだ？

私が睨みつけていると月詠は馬車から降りる。

「じゃなかったです、……その東の洋館のお金持ちの貴婦人に
ごじます〜」

そこな剣士はん、今日こそ借金のカタにお姫様をもらい受けに来ま
したえ〜」

何を言っているんだこいつは……まるで理解できん。

「な……何？な、何のつもりだこんな場所で」

「せつちゃん、劇や劇、お芝居や」

私は困惑していたが、お嬢様の一言で理解できた。
なるほど、劇に見せ掛けてお嬢様を衆人環視の中、堂々とお嬢様を
連れ去ろうと言う訳か！

「そうはさせんぞ！お嬢様は私が守る！」

「キヤー！せつちゃんカツコエー！！」

「え！？ちょ、お嬢様！？」

私が月詠に宣言したら、お嬢様に腕を抱きつかれてしまった。
お嬢様！今は自重していただきたいです！！

「そーおすかーほな仕方ありませんー」

「！？」

月詠が自分のつけていた手袋を外しはじめたのを見て、いつでも夕
凧を抜けるように構える。
何をするつもりだ？

「えーい！」

「む」

突然、月詠気の抜けた掛け声をかけ、私に手袋を投げつける。
私はそれを片手で受け止める。
一体何のつもりだ。
私は緩んでしまった警戒を強める。

「このか様をかけて決闘を申し込みます・・・30分後、場所はシ
ネマ村正門横の日本橋にて・・・

ご迷惑だと思えますけど、ウチ・・・手合わせしていただきたいん
ですー逃げたらいけまへんえー

刹那センパイ、ほな、助けを呼んでもかまへんえ〜」

そう言つてやつは馬車に乗り込みどこかに行つてしまった。

・・・仕方ない・・・やるしかないか・・・。
ん？

「ちよつと！桜咲さんどういうことよ！！」

「わあ！？」

突然、クラスメイトの人たちが出てきて私に質問攻めをしてくる。
そして私は違うといつているのにこの人たちは聞いてくれません。
それに私が好きなのは・・・。

つて！またそんなことを考えている場合ではないだろ私！！
私は首をつっこまないように言うのだが相手にしてもらえず。

結局状況に流され約束の時間となり指定された場所に來ている。

そして月詠が現れ、私は前に出てくるクラスメイト達は一般人であ
る事を伝えようと

するのだが、そこらへんはしっかりとしていたらしく無害な妖怪達
をクラスメイトたちに
向かわせる。

そこでネギ先生の式神が現れ私はすかさず本物のネギ先生にそつく
な姿にしてあげてお嬢様を任せる。

そして私は戦闘態勢に入り、月詠が刀を振るう。

「ざんくーせーん！！」

二つの刀から出る斬撃、私は一つは夕凧で相殺したのだが一つはどこかに飛んで行ってしまった。

すると、どうだろう、うしろから凄まじい魔力と気を感じる。

この邪悪な魔力はまさか……。

私が振り返るとそこには雄介さんが立っていた。

二十話 仇うち

―雄介視点―

俺は今、かつてないほど怒り狂っている。

あの女・・・月詠は俺の大事なものを壊した。

だから俺はもう二度とこんな真似ができぬようトラウマを植えつけてやる！！

そう決心をして桜咲さんの隣まで歩く。

「あ・・・あの、雄介さん？」

俺の気迫にドン引きしているのか後ろに一步下がる桜咲さん正直つらいが

今はどうでもいい、今は將軍様の仇をとるときだ！！

「はー・・・お兄さん凄い気迫やなー・・・うち興奮します」

「・・・黙れ」

なんか変態チックな事をいつているがどうでもいい。
はやくこいつをボコボコにしたい。

「刹那先輩もええけど、お兄さんが一番ですわ」

ガシ！

「黙れと言ったぞ？」

俺はたらたらと喋る月読に我慢が出来ず瞬動で背後に回り鬼の手で頭を掴む。

「は、やっぱりお兄さん最高ですなー、うちゾクゾクします」

俺の殺気でもだえ始める変態、こいつもしかしてマゾか？

「アレ見てアレー！！」

「ほら、お城の上！あそこでも劇やってるよ！」

「お嬢様！」

ギャラリーの声に反応して見てみると野菜と近衛さんが追い詰められている。

たしかにあんな場面があったけどなにやってんだあの野菜は！！

桜咲さんも気づいて近衛さんのところに向かっている。

それにしても俺はここ最近いろんな出来事があったせいか原作コミックの最初の方を忘れてきている。

だからあのサル女の名前の思い出せなかったのだ。

「お兄さん、お嬢様が気になりますかー？でも、もしお嬢様が死んだらお兄さんどうなるんか

ちよっと興味が出てきましたえ」

「なっ！？」

「ほな、ちよっとお嬢様の腕か足を切り落としてきますー」

ヤツは俺のアイアンクローから逃れ、城の上を目指して跳躍する。

させるか!!

俺は鬼の手を伸ばしてヤツの脚を掴んで橋に叩きつけた。

「がっ!!」

打ち所が悪かったのか気絶する月詠。

あー！しまったー！！

俺は重大な失敗をしてしまった、何故ならトラウマを植えつけるはずだったに気絶させてしまったからだ。

ワザワザ起こすのもめんどくさいし、しかたがない次の機会にとっておくか……。

ワー!

パチパチ!!

ん?なんか周りが騒がしいな。

俺が振り返るとギャラーリーに歓声と拍手が送られている近衛さんと桜咲さんが居た。

どうやら終わったようだ。

「雄介さん、今からお嬢様のご実家に向かいますので付いてきてください」

桜咲さんにお誘いを受ける俺だが……。

あれ?もしかしてこれってヤバイのでは?

そうだよね、確実にフェイトに目を付けられるよね。

まあ、金髪幼女がなんとかするだろうし俺はここで退散しよう。

「いや、おれは……」

「雄介さん、家に来てほしんやけど・・・ダメ？」

「い、いやその・・・」

「お願いします！ぜひ付いてきてください！！」

俺が断ろうとしたとき、近衛さんの上目遣いの頼みと桜咲さんの必死なお願いに
抗えなかった俺は・・・。

「わかった・・・」

ーフェイト視点ー

遠くから今回の戦いを見ていたが・・・。

彼は一体何者だ？

千草さんの情報ではかなり強く銀髪で左手に鬼の手を持つ男だそう
だ。

朝から彼を見張っているが特に動きはなく左手も人間のものにしか
見えない。

もしかしたら、何かの見間違いなんじゃないかと思いつながら見てい
る。

すると彼はバスで移動した後、シネマ村に入り普通に旅行を楽しん
でいた。

もしかして本当に見間違えだったのでは？

そう思つて帰ろうとしたところ、日本橋のところで月詠さんの気と
近衛 このかの護衛の

気を感じた。

たしか、今日さらいに行くと言つていたっけ。

僕が二人の戦いを見ていると強大で邪悪な魔力を感じた。しかもこの魔力量はナギ・スプリングフィールドを超えている。僕は魔力の発生場所を見る、そこには銀髪で左手に鬼の手をもつ男が立っていた。

もしかして彼は、彼女達がここで仕掛けてくる事を読んで先回りしていたというのか？

でも偶然ではそんなことはありえない。

彼は確実に読んでいたのだろう。

そして銀髪の男と月詠さんの戦いが始まった。

しかし、彼は一瞬で月詠さんの背後に回り頭を鬼の手で掴む。

そんな・・・僕にも知覚できない速度なんて・・・。

それから、お嬢様がきになったのか彼に隙ができ月詠さんは拘束から脱出して千草さんのところに

向かうが鬼の手が彼女の脚を掴まれ橋に叩きつけたれてしまう。

そしてそのまま彼女は気絶したのかピクリとも動かなくなった。

千草さんのほうも失敗したらしく撤退して行った。

僕も彼らが離れた後、月詠さんを抱え転移する。

まったく、とんだバケモノがいたものだ。

僕は計画成功の確率の低さに嘆息をしてアジトに戻った。

二十一話 決戦の前に（前書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。
空いた時間でこつこつ書いてみました。
これからも応援よろしくお願いします。

二十一話 決戦の前に

― 雄介視点 ―

近衛さん達の頼みを断れなかった俺は近衛さんの実家に行き
現在ご飯や酒を飲んでいたりする。

正直未成年だから断ろうと思ったが場の空気を壊すのも悪いと思い
飲む事にした。

しかしそろそろ酔いが回ってきて、このままだと戦いに支障をきたす
と判断した俺は外に出る。

は〜風が気持ち〜。

外の風に当たりつつ、景色を楽しむ。

それにしても、フェイトは何時来るんだ？

原作では時間なんて書いてなかったし夜としかわからない。

もし隙をつかれ石化されたらさすがにまずい、別に石化はいいんだ
後で治してもらえるし。

問題は野菜みたいに俺も魔法抵抗が高くて窒息するかもしれないと
いう事だ。

他の事を忘れてきても、あれは仮契約イベントだからその部分はよ
く覚えている。

久しぶりに従者呼ぶかな。

その方が助かる可能性も高まるし、フェイトが俺に対する興味も分
散されるし。

そうと決まれば・・・。

「こい、セイバー」

いつものように床から出てくるセイバー。

「なんですか、マスター」

「実はここら一帯の見回りをして欲しい」

「別にかまいませんが何故でしょう？」

少し、不思議そうな顔をするセイバー。

あ、そういえばセイバーに話していなかったっけ。

「俺、説明中」

「・・・と、いうわけだ」

「了解しました、それでは行ってまいりますマスター」

事情を把握したセイバーはすぐさま行動を開始した。

これで大丈夫だとは思っけど、少しのもしかしたらという不安はある。

セイバーを信用していないわけではないが、保険としてもう一人呼ぼう。

さて、誰にするか・・・。

数分ぐらいたったころだろうか、俺は誰にするのかを決めた。

「やっぱり、地獄先生のパートナーといたらあの人だよな」

俺は、いつもセイバーを呼ぶ感じであの人を呼ぶ。

「来い、ゆきめ」

すると床から雪が吹き上げ、白い着物を着た雪女のゆきめが姿を現

した。

いや、ぬぐべくファンにはたまらないね、もっと早く呼べばよかったよ。

そんなことを考えつつゆきめに話しかけようと近づくと、しかし俺は思い出してしまった。

セイバーを呼んで質問をした時、俺の都合のいいようになっていたことを……。

つまり、彼女は……。

「御主人さま！ やつと呼び出してくださいましたね！！ 私ご主人さまの事を待っていたんですよ！！！」

ゆきめは俺の姿を確認すると、叫びながら俺に抱きついてきた。

どうやら俺の予想が当たっていたらしい……。

その後、ゆきめを落ち着かせ自己紹介と事情説明をする。

ちなみにセイバーにした嘘話も鬼の手を通して話した。

本当に鬼の手って便利だね。

話が終わった後、ぬぐべく原作での事をいくつか質問した。

しかし、彼女は知らないと言う、そのうえ幼い頃助けたのが俺になっている。

たしかに周りの人間にどういう知り合いかと聞かれたときに都合がいい。

本当に都合がいいようになってるんだな……。

まあ、この事について考えるのをやめてゆきめにセイバーと同じように見回りを頼んどいた。

ちなみにセイバーのことを思い出して鬼の手で話したので問題はあまりないだろう。

凍りずけにされそうになっただけ……。

さて、これで大丈夫だろう俺は適当な部屋でごろごろしてますかな。俺は近くの部屋で眠る事にした。

あわよくば、二人が連中を撃退してくれることを願おう・・・。
そして俺は眠りの世界へと旅立った。

二十一話 決戦の前に（後書き）

短くてすみません。

次回もよろしくお願ひします。

二十二話 決戦その1（前書き）

お気に入り件数がかなりの数になりました。

正直とても嬉しいです。

これからも頑張っていくので応援よろしくお願いします。

二十二話 決戦その1

―雄介視点―

ふあ〜よくねた〜。

俺は沢山の気配を感じ取り目を覚ました。

そうか・・・もう来たのか。

まあセイバーやゆきめも向かっているだろうし俺も行くかな。瞬動をつかい桜咲さんたちの近くに現れる。

「雄介さん！無事だったんですか！？」

「「雄介さん！！」」

「よかったぜ旦那〜！！」

上から、野菜、桜咲さんと神楽坂さん最後にオコジヨ。

歓迎してくれる三人と一匹、さてフェイトに関わらないためにここに残りますかな。

セイバーたちもすぐに来るだろうし片付いたら見物を決め込もう。そうと決めた俺は桜咲さんたちのほうを向き先に行くように促す。

「ここは、俺に任せて助けに行け」

「は、はい！！」

「頼みます！！」

「気おつけてください！！」

「旦那！後で必ず！！」

野菜が返事をして、桜咲さんと神楽坂さんとオコジヨがおれに言葉を送って飛び出す。

そしてそれを阻止しようと動き出す鬼達。

そうはいくか！！

「行かせん！！」

俺は鬼の手を使いやつらを牽制する。

そう、お前達はここに残り俺と戦ってもらう、そうじゃないと・・・
爺の言い訳に使えないだろう！！

「つく！この出来損ないの鬼があああ！！！！」

邪魔されたのがよっぽどイラついたのか鬼が大群で押し寄せてくる。
さて、さっさと終わらせませますかな。

「宇宙天地 與我力量」

降伏群魔 「エクスカリバー！！！！」

俺が経文を唱えて鬼達を一掃する予定だったのだが突然セイバーが
現れエクスカリバーで
鬼達を一掃した。

黄金の光が眩しいです・・・。

「大丈夫ですか、マスター？」

「ああ、平気だ」

「そうですか・・・それは「ご主人様ー！！！」

「ぐふ！」

セイバーが俺の無事を確認した後横からゆきめが突撃をかましてきた。
痛い。

「な、なんなんですか貴女は！？マスターから離れなさい」

「ふん！そうゆう貴女こそ誰よ、ご主人様は私の婚約者なのよ！！！」

なんか二人が仲間割れを始めた、しかしゆきめよ俺はいつからお前の婚約者になったんだ？

まあ、その後もこんな感じでヒートアップする二人。

俺は面倒になって、二人から離れようとしたのだが・・・。

「あらら、お兄さんモテモテですな〜」

突然の第三者の声に止まる二人。

声の主はゆっくりとこちらに歩いてきてその姿を現した。

「どうも〜、神鳴流です〜」

はあ、また面倒な奴が・・・。

おれは嘆息をついて目の前の月詠（変態）を見る。

すると俺の視線がうれしいのかクネクネし始めた正直怖いな。

「はあ〜、お兄さんやっぱり最高ですな〜私もう・・・

辛抱できません!!」

そう変態が叫ぶと二本の刀を構え俺に突っ込んでくる。
あー!めんどくせー!!

なぜなら相手は変態、めんどくさいにもほどがある。

俺は鬼の手を構え変態を見据える。

「ざんてつせーん」

変態は刀を俺に振り下ろす。

よし、このまま刀を掴んで遠くまで放り投げてやる。

俺は振り下ろされる刀を掴もうと鬼の手を刀に伸ばす。

ガキン!

しかし振り下ろされた刀は、止まる。

黄金の剣と氷の剣によって……。

「マスターに「ご主人様に」、指一本触れさせない!!!!」

「あらら〜」

セイバーとゆきめに攻撃を止められた変態はあらら〜言いながら残念そうな顔をしつつその目は新しい

獲物を見つけた獣のようだった。

うわ〜二人ともご愁傷様。

新しいターゲットになった二人に心の中で同情しつつどうしようかと考えていると。

「おや、ほとんど終わってしまったようだね?」

「アイヤー、さっきの光すごかったネ！」

俺の後ろからクーフェイさんと龍宮さんが現れた。

そういえば二人とも原作で戦っていたね。

そんなことを思い出しつつ二人に話しかける。

「まあ、終わったかな、二人はどうするんだい？」

「せっかく来たんだ、あそこの神鳴流の女を足止めでもすると、クーは・・・帰るか？」

「そんなのイヤある！！！」

俺が質問をすると、どうやら変態の相手をしてくれるようだ。そういえば原作でも戦ってたな。

しかし暇になったクーフェイも帰らず残ると言っている。

こういう場合は・・・。

「二人で戦ったらどうだ？」

「私は別にかまわないが・・・」

「むー私は一対一がいいネ」

俺の提案にお金さえもらえればどうでもいい龍宮さんは賛成してくれたけど

クーフェイさんは一対一がいいようだ。

まったくしかたがないな。

「交代で戦ったらどうだ？」

「それネ！雄介さん頭いいアル！！」

「ま、私は助つ人料がもらえれば別にかまわないが・・・
彼女達を止めなくていいのかい？」

俺の提案が採用されたとき龍宮さんが俺の後ろを指差して来る。
まさか・・・。

俺は振り返り見てみると、現在変態は・・・二人の攻撃に逃げているのだがもう無理そうな感じになっていた。
龍宮さんたちに提案しておいてこれはないと思った俺は二人を止めるため声を掛ける。

「セイバー、ゆきめ、戻って来い」

「はっ！」

「うっ、わかりました」

セイバーが変態を突き飛ばし、ゆきめと戻ってきた。
ゆきめよ、なんでそんなに不機嫌？

「あともうちちょっとでご主人様に敵対するゴミを排除できたのに」

小声でブツブツ言っているゆきめだがちゃんと聞こえている。
これがもしかしてヤンデレというやつだろうか？
ぬぐぐぐも苦労したんだな。

そんなことを考えつつ二人に龍宮さんたちのことを話す。

「では、私達はネギたちの方へ向かいましょう」

「は？」

説明を終えた後にセイバーが床に魔法陣を作る。

これっていつぞやの転移魔法！？

ちよっと待ってー！ー！！

俺は止めようとしたのだが時はすでに遅かった。

俺とセイバーとゆきめの三人は転移した。

願わくは戦闘場面ではありませんように

二十二話 決戦その1（後書き）

何も勘違いがないように見えますが
実はあるのです！！それから主人公が現れたのが仮契約前の場面だ
だったので

見事仮契約のフラグを折ってやりました。

あと、皆さんにアンケートをとろうと思います。

内容は後書きに作者と主人公の会話をいれるかどうかです。

期限は三日となります。

それでは次回をお楽しみに。

感想待ってますBY作者

二十三話 決戦その2

―マナ視点―

私は学園長の依頼を受けて現在近衛の家に来ている。
そして目の前にはかなりの鬼や魑魅魍魎が大量に居る。
まったく依頼料は弾んでもらうからな。

「クーは大きさが人間くらいの弱いのを頼む」

「あ、バカにしてるあるネ」

クーは一般人だ、さすがに限界があると思いきわつたつもりな
んだが……。

まあ、本人が言うならいいだろう。

私はライフルを構える。

「私が撃つたら、行け」

「わかったネ！」

私が引き金に指を掛けたとき。

目の前の鬼達は黄金の光に飲まれ消えた。

いったい何が……。

視界が回復しまわりを見渡すと鬼達は居なくなっていた。

「アヤッせつかくの敵が」

クーはそんな事を言いながらうなだれているが私はそれどころでは

なかった。

あの正体不明の光をだした人物がもし自分達の敵だったらと思うと冷や汗が止まらない。

逃げるかどうかを考えるかをおかしの四人組がいた。

一人は見覚えがある。

銀の髪に左手に鬼の手を持つ男。

たしか鶴野 雄介……。

さっきの光はもしかして彼が？

そう思うと納得がいく確かに規格外の彼ならこれくらいのこととは簡単だろう。

それにあの二人は……。

私は見た事のない二人組みを見る。

一人は騎士の格好をし、西洋剣をもつ金髪の女、もう一人は白い和服に氷の剣を腕につけている女、

もしかして雪女か？

それにしてもあの二人の力、彼ほどではないが十分規格外のものを感ずる。

まったく彼の周りはバグだらけか……。

バグな三人に呆れつつ敵と思わしい女を見る。

あの太刀筋は神鳴流か？

私はよく刹那と仕事をしているからあの太刀筋が神鳴流とすぐにわかった。

つは、いけないこのままだと依頼料を学園長に払ってもらえない。

私は今月がピンチなのを思い出しクーと鶴野 雄介のいる場所まで移動する。

「おや、ほとんど終わってしまったようだね？」

「アイヤー、さっきの光すごかったネ！」

クーと私は彼に近づき話しかけた。
少し嫌味な感じで話しかけてしまったのはしょうがない。

「まあ、終わったかな、二人はどうするんだい？」

「せっかく来たんだ、あそこの神鳴流の女を足止めでもすると、
クーは・・・帰るか？」

「そんなのイヤある！！」

私が帰るかどうかクーに聞くとクーは帰らないと言った。
まあ予想はしていたが・・・。

「二人で戦ったらどうだ？」

「私は別にかまわないが・・・」

「むゝ私は一対一がいいネ」

暇になるであろうつひとりに気を使って彼が提案をする。
まあ私は金さえもらえれば別にいいのだが、武人であるクーは嫌な
ようだ。

「交代で戦ったらどうだ？」

「それネ！雄介さん頭いいアル！！」

「ま、私は助っ人料がもらえれば別にかまわないが・・・
彼女達を止めなくていいのかい？」

クーが彼の案によようやくOKを出した所で私は女の様子を見たのだが……。
神鳴流の女は彼の仲間らしき二人組みにもうやられそうになっていた。

「セイバー、ゆきめ、戻って来い」

「はっ！」

「うう、わかりました」

彼が仲間の二人に指示をすると二人は素直に戻ってきた。

そしてイチャイチャとなんかやり取りをし始めた

うん、なんか胸がムカムカして黒い感情が出てきた。

クーもそうなのか三人のやり取りを睨んでいる。

そしてやりとりが終わったのかと思ったら女二人が彼に抱きつき転移した。

ふ……なんか知らないがとても腹が立ってきた。

「クー……行くぞ」

「了解ネ……全殺しヨ……」

「へ？」

私達のただらなる雰囲気を感じたのか変な声を出している女。

お前には憎しみも何もないが……。

私達の気がすむまでボコボコにしてやる！！

二十三話 決戦その2（後書き）

作者「いや、この作品も気がついたら二十三話、私がんばったな」

雄介「そうだな、よく頑張ったよ」

作「それにしても君は規格外の存在なのにどんどん進化してるよね」

雄「言わないでくれ、今回もセイバーがやった事なのに俺がやった事みたいに見えるからあまり触れないで」

作「まあ、そのうちいいことあるさ」

雄「たとえば？」

作「・・・」

雄「・・・」

作「さて次回は・・・」

雄「たとえば!？」

作「さて次回・・・」

雄「無視すんなー!ー!ー!」

感想待ってます。

二十四話 スクナ死す

―雄介視点―

さて、セイバーに強制転移された俺の目の前には……。

「まさか、ここで君が現れるなんてもしかして狙っているのかい？」

野菜と対峙しているフェイトがいた。

それにスクナも復活しているし……。

おいおい、本当にどうなっているんだよセイバー……。

君はフェイトのいうとおり狙っているのかい？

俺は少し不安になってきたよ。

「雄介さん……すみません、僕は……」

「気にするな」

野菜がぶつくさ謝罪しようとしてきなので言葉をさえぎる。

そして状況確認……。

周りを見渡すとスクナに空を飛ぶ少女とその少女に担がれる少女。

俺たちを睨む白髪少年。

あれ？これってマジでクライマックス？少女は？

キョロキョロと周りを見てみても変態な姿の幼女はいなかった。

もしかして、俺のせい？

幼女がいなのは自分のせいかも知れないと考え始めたとき、石の槍が飛んできた

「うお!!」

一応避けたのだが俺のズボンにかすってしまった。
やべえやべえ。

「余所見をしていたのにアレを避けるなんて・・・やっぱり君はバケモノだね、

そんなにお嬢様や神鳴流の少女が気になるのかい？」

おいおい、俺も異常だとは思っけどバケモノは酷くね？俺のガラスのハートにひびが

三センチぐらい入ったよ。

それにしても酷いな〜このジーパンお気に入りだったのに・・・。

あれ？

俺は破れたズボンをよく見てみる。

あれ？たしか俺ここにケータイ入れていたんだよな・・・。

そう、旅行前に機種替えした最新の携帯・・・二万いくらかもしたとても高い携帯。

パソコンの変わりにして動画をよく見ていた俺の大事な携帯・・・。

俺は石の槍が飛んで行ったほうを見る。

すると・・・ネジや液晶何かの機械の部品のようなものが点々と転がっている。

そして見覚えのある下半身がない俺のドナル 限定ストラップが転がっていた。

・・・
・・・
・・・

その姿を見た俺は今まで亡くなった大事な者達を思い出す。

饅頭・・・将軍様フィギュア・・・そして俺のケータイ・・・

ついでにドナルド。

俺は残った理性を使いまわりをもう一度見る。

・・・よし、魔法関係者以外はいないな・・・。

確認をした俺は脳内にバリバリ最強を流しながらこいつらをボロボロにする前に

アレをするぬぐべぐのあれカツコイイよね。

「雰囲気が変わったね、一体なにを・・・まあいい、あの神鳴流剣士はやらせてもらうよ」

ヤツが桜咲さんたちに石の槍を投げよと構えるが俺は鬼の手を空に掲げる。

するとフェイトは投げる姿勢を解いて俺を見る。

なんか周りの視線が集中しているが、かまわないもう機会はないだろうしこれだけはぜひやっておきたい。

「美奈子先生みんなを守りたいんだ、先生が封じている鬼の封印を解き放ってください」

『!!!』

まさに中二病・・・しかしファンなら一度はやってみたかった。後悔もしないし反省もしない!!

「かまいません!やってください!!」

俺は高らかに宣言して封印を解き始める。

なんか周りが言っているけど封印を解き始めたので良く聞こえない。

「う、うがああああ!!」

うげっ！凄いい力・・・どんどん内からあふれ出てきている。
やべえ！もしかして俺ってかなり迂闊な事した！？

後悔してももう遅い、自分でも戸惑うくらいの方に気を失い体がど
んどん鬼に侵食されていく。

どれくらいたっただろうか・・・俺が目を覚ますと・・・。

「ヤツはまだ動いていない今がチャンスや！スクナやってしまい！
！」

スクナが俺に拳を振るってきて俺はそれを片腕で掴んで止める。

「な！！スクナの全力を片腕だけで・・・」

顔を青くするサル女、そういえばコイツには饅頭の借りがあったな。
俺はニヤリと笑いサル女を見る。

「ひい！！！」

俺の視線にびくつきガタガタと震えるサル女。

これが饅頭の仇じゃーーーー！！！！

掴んでいた腕を離し、殴るために振りかぶる。

「え！ちよ、ちよつとまつ・・・！！！」

なんかサル女がわめいているが知ったこっちゃない。

スクナの顔面に狙いを定め・・・。

食らえ！！地獄先生サンダーパンチ！！！！

思いつきり腕を振るった。

そして、グシャっという感触が拳に伝わり。

スクナの頭が消し飛んだ。

そして頭を失ったスクナは砂が崩れ去るように消えていった。
あれ？ちよつと弱すぎじゃね？

鬼神なんて呼ばれているもんだからてつきりもつと強いのかと思っ
ていたんだけど・・・。
すっかり冷静になってしまった俺は周りがどんな状況なのか見てし
まった。

いつの間にかきていた幼女は・・・。

「はなせ！ぼーや！！ここで死なせてやるのがアイツのためだ！！
！」

「だめです！まだ雄介さんを戻せるかもしれないですよ！！」

なんか野菜ともめている。

そして神楽坂さんたちは・・・。

「そんな・・・雄介さんうちらを助けるために・・・」

「しつかりしてくださいお嬢様！！」

「そうよこのかまだ手はあるはずよ！！」

おいおい、なんかかなりやばくね？

おそろおそろ従者たちを見てみると。

「マスター、勝てるかどうか解かりませんが鬼から貴方を救って見
せます」

「ご主人様・・・私はご主人様に殺されても本望です、無謀だとし
てもきつと貴方を助けて見せます！」

なんか、特攻しようとしてる。

ちよつと、これって空気にまずいよね？

なんか助かりました〜じゃ、俺確実に殺されるよね？

なんか頭が痛くなってきた・・・。

思わず頭に手をやってしまう。

「ちよ、ちよつと皆！！アレを見て！！！！」

突然の神楽坂さんの歓喜した叫び声。

今度は一体なんなの・・・？

頭を片手で抱えつつ見してみる。

「あ！！あれって！！！！」

「そつだぜ！旦那が鬼を封印したときとそっくりだ！！」

野菜とオコジヨが神楽坂さんに便乗してなんか言っている。

ん？たしかに言われてみれば頭を手で抱えているし似ているかもしれない。

そつだ！これを利用しよう！！

うまく喋れるといいが・・・。

『皆・・・よく聞くんた・・・』

『！？』

出来る限り苦しそうな感じを演出しつつ言葉を紡ぐ。

その声に反応しみんな驚愕の顔をして俺を見る。

さてここから先何も考えていないけどどうしよう

心の中で泣き出し出してちゃって涙の姿にもどろろか考える俺であった。

二十四話 スクナ死す（後書き）

作者「ようやくスクナまで来れた・・・」

雄介「それにしてもあっけなさすぎじゃね？」

作者「それは私の実力不足ですorz」

ゆ「じめん・・・」

さ「べつにいいです」

ゆ「さて次回には俺戻ることが出来るの？」

さ「・・・」

ゆ「・・・ねえ」

さ「課題が終わってから考えるよ」

ゆ「マジかああああ！！！」

感想待ってます。

二十五話 スクナ死す 2

ーネギ視点ー

僕達は雄介さんのおかげで無事、このかさんの所まで辿り着いたのですが白髪の少年の妨害にあってスクナが復活してしまいました。そして、刹那さんは……。

「これが私の正体です。奴らと同じ醜いバケモノ……、でも誤解しないでください

お嬢様を守りたいのは本心ですから……今まで秘密にしていたのはお嬢様や皆さんに嫌われなくなかったから……怖かったからです」

刹那さんは背中に白い翼を生やしました。

刹那さんはバケモノと言っていますが僕はそうは思いませぬ。むしろ御伽噺に出てくる天使のようでした。

「なーに言ってるんの刹那さん、翼が生えるなんてカッコいいじゃん。それに……このかはこの位でキライにならないよ」

アスナさんも似たような事を思ったのでしよう、刹那さんの翼を褒めます。

「ほーら！止まってないで早く行って刹那さんここは私とネギがなんとかするから！！
いいわよね、ネギ！」

「はい!!」

僕とアスナさんは白髪の少年に向かって構えをとります。

「ほら、刹那さん」

「は、はい!!」

刹那さんはつつすらと涙を浮かべ、その白い翼を広げて空に飛び出しました。

さて、僕達も……。

「悪いけど終わりだよ」

「なっ!?!」

「どういうこと!?!」

僕達の目の前に白髪の少年が突然現れた。

僕とアスナさんは驚きの声を上げます。

いったいどうやって!?!

「どうして僕が君達のすぐ近くにきたのか不思議そうな顔をしているね」

やっぱり君はこの程度か……」

少年は僕に指をさし呪文を唱えだします。

まずい! せめてアスナさんだけでも!!

すぐに離れる事が無理と判断した僕はアスナさんの正面に立って魔法障壁を全力で展開します。

「石化の・・・!?」

少年が最後の呪文を言い終わる前に橋の床が光りだしました。

これは・・・転移魔法!? 一体誰が・・・。

「まさか、ここで君が現れるなんてもしかして狙っているのかい？」

転移魔法で現れたのは雄介さんとセイバーさんと誰でしょう? 白い着物を着た女の人でした。

少年も表情はわかりませんが驚いているようです。

でもそんな少年を無視して雄介さんはキョロキョロと視線を動かします。

何かあるのかと思いい僕も見ます。

すると上空で刹那さんがこのかさんを抱えて空を飛んでいるのが見ええました。

よかった、どうやら成功したようです。

でも手放しに喜べません。

何故なら雄介さんに残ってもらっておいで結局スクナの封印をままと解かれてしまったからです。

「雄介さん・・・すみません、僕は・・・」

「気にするな」

僕が謝罪の言葉を口にした時、雄介さんが遮ります。

確かに雄介さんの言った通りです。

今は気にしている時ではありません。

僕が少年に目を向けると少年は無詠唱で余所見をしている雄介さんに石の槍を飛ばしてきました。

危ない！

でも雄介さんは槍を回避しました。

・・・すごい。

「余所見をしていたのにアレを避けるなんて・・・やっぱり君はバケモノだね、

そんなにお嬢様や神鳴流の少女が気になるのかい？」

確かに、完全に意識してないのに槍を避けるなんてバケモノじゃないかと僕も思う。

すると雄介さんの雰囲気が変わり辺りが冷たくなったような感じがありました。

「雰囲気が変わったね、一体なにを・・・まあいい、あの神鳴流剣士はやらせてもらうよ」

少年が石の槍を刹那さんに向けます。

すると雄介さんは鬼の手を天に掲げ・・・。

「美奈子先生みんなを守りたいんだ、先生が封じている鬼の封印を解き放ってください」

『!!!』

突然の言葉、少年は意味がよくわからないのか雄介さんを観察している。

でも僕達は知っている。

赤く強大な力をもつ鬼を・・・。

ダメです！雄介さん！！ぼくがその言葉を口にしようとしたとき雄介さんは・・・。

「かまいません！やってください！！」

その左手からどんどん鬼の姿に変わっていった。

「ゆ、雄介さん！やめてください！！」

「雄介さん！！」

「アニキ！姐さん！！とんでもねえ力だ、ここに居たらヤバイ！！早く離れる！！！！」

僕とアスナさんが雄介さんに叫ぶと同時に駆け寄ろうとしたとき力モクンが僕達に離れるよう指示をします。

確かに近くに居るだけで気が遠くなりそうだけど、僕は！！

「う、うがああああ！！」

突然の咆哮と同時に魔力と気によって生まれた暴風が僕達に襲い掛かります。

「うあああああ！！」

「きゃああああ！！」

「姐さん！アニキ！！このままだとぶつかる！！」

僕たち三人は暴風に吹き飛ばされ力モクンの言葉を聞いて瞑っていた目を開ける。

すると目の前には木が……。
ぶつかる!!

そう思い体に魔法を使おうとしたのですがもう遅かった。
体に力を込めて衝撃に備えると……。

がし!

何かに体をホールドされ、見てみるとセイバーさんでした。
どうやら助けてくれたようです。

そういえばアスナさんは!?

一緒に飛ばされたアスナさんを探すためキョロキョロと見渡します。

「ネギー!」

すると少し上の方からアスナさんの声が聞こえ上を向きます。

そこには雄介さんと一緒に居た白い着物の女の人がセイバーさんと
同じようにアスナさんを抱えています。

それから僕達は雄介さんの下に行くため走り出しました。

さっきまで居た場所に向かっていくと沢山の木がなぎ倒されていま
した。

さっきの暴風の強さを物語っています。

そして他のところに目を向けると……。

立ち上がったならスクナと同じくらいの大きさであろう赤い鬼がいた。

「アスナさん!ネギ先生!大丈夫ですか!?!」

「アスナー!ネギくん!!」

僕達に気がついた刹那さんがこのかさんを抱えてこちらに降りてき
ます。

どつやら無事のようによかったです。
合流した僕達はとりあえず今後の事を話し合いました。

「ねえ、ネギあんたはどうすれば雄介さんを戻せると思う？」

「わかりません、でもあの様子からまだ鬼は覚醒していないと思うんです」

「そうですね、たしかにあの鬼は動いていませんし覚醒していないと思うてもいいでしょう」

アスナさん、僕、刹那さんが言います。

そう、鬼はまだ動いていないそれはまだ完全に鬼になっていないという事になる。

だから動き出す前になにか対策を練らないと・・・。

「困っているようだな、ぼうや？」

「こんばんは、ネギ先生」

「エヴァンジェリンさん！茶々丸さん！」

突然エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが転移魔法であらわれまして。

よかった！エヴァンジェリンさんなら雄介さんを助ける方法を知っているも知れない。

僕はエヴァンジェリンさんにこの状況を話します。

「それよりも、エヴァンジェリンさんはどうしてここに居るんですか？」

僕が状況説明を終えると刹那さんがエヴァンジェリンさんに質問をします。

あ、確かに。

その事を茶々丸さんに説明してもらいましたがそれを聞いた皆さんが少し引きました。

五秒に一回って学園長先生大丈夫なのかな？

「それよりもだ、ぼつやアイツは・・・鶴野雄介はもう助からん、鬼から開放するには殺してやるしかもつない」

『なっ！』

エヴァンジェリンさんのことばで皆さん目を見開きます。

そして啞然としている僕らをみてエヴァンジェリンさんが話を続けます。

「私ですら勝てないと思う鬼に乗っ取られたんだ、もう助ける道はない」

「そんな!?!」

「エヴァちゃん！ウチよくわからんのやけど雄介さんはウチのせいであんなふうになってしまったん!?!」

叫ぶ僕と、状況がいま一つ掴めていないこのかさんがエヴァンジェリンさんに言う。

でも、このかさんの言ったことは半分は当たっている。

雄介さんはこのかさんや僕達を守るために封印を解いた

『美奈子先生みんなを守りたいんだ、先生が封じている鬼の封印を

解放放つてください』

思ひ出す雄介さんの言葉。

みなさんも僕と同じことを思っているのでしょうか、とてもつらい顔をしています。

いけない、僕は教師なんだなんとかしないと……。

そう思った時……。

ボツ!!

何かの音がして皆さんが視線を音のするほうに視線を向けます。

すると視線の先では、頭がなくなってしまったスクナがさらさらと砂のように消えていきます。

そんな!

僕達はスクナが消えた事よりつらい現実を見ました。

そう、雄介さんに封印されていた鬼が完全に目覚めてしまったからです。

「さて、ここは私に任せろ」

「エヴァンジェリンさん!」

エヴァンジェリンさんが巨大な魔力を放出しています。

す、すごい魔力です、僕と戦ったときと比べ物にならないくらいの魔力をエヴァンジェリンさんから感じます。

でも……。

「はなせ!ばーや!!ここで死なせてやるのがアイツのためだ!!」

「だめです！まだ雄介さんを戻せるかもしれないですよ！！」

僕はエヴァンジェリンさんを羽交い絞めにして止めます。

まだ可能性はゼロじゃない！！絶対に雄介さんを助けて見せます！！

「ちょ、ちよつと皆！！アレを見て！！！」

突然アスナさんが指をさし嬉しそうな声を出すアスナさんを見て僕はアスナさんの指差す方を見ます。

見えるのは頭を抑える鬼・・・もしかして！！

「あ！！あれって！！！」

「そうだぜ！旦那が鬼を封印したときとそっくりだ！！」

僕とカモクンも頭を抱える鬼を見て歓喜の声を上げます。

まだ、可能性は残っている！

あの映像や雄介さんの過去をしっている人は喜びの顔を浮かべます。しかし・・・。

『皆・・・よく聞くんだ・・・』

『！？』

鬼から聞こえた雄介さんの声・・・でもそれはとても苦しそうな声だった。

二十五話 スクナ死す 2 (後書き)

テストのため少し休みます。

二十六話 終わりよければ全てよし

『今から俺の、もてる限りの力を使って鬼を再封印する』

苦しそうに、苦しそうに悟られるな、バレルな!!

俺はともかく必死に演技して、野菜たちに話しかける。

「本当ですか！？雄介さん!!」

「お前という奴は・・・、本当に規格外のバグキャラだな」

野菜と幼女が何かっているが面倒なので封印処理を開始する。

まあ、一瞬で戻れるけど徐々にやった方がいいよね？

こうして僕は徐々に人間に戻して行く。

あれ？今更だけど俺すっぽんぽんになるんじゃない？

上半身がほぼ人間の姿になってようやく気がついた。

「・・・セイバー」

「はい、何でしょうか？マスター」

「ちょっと近衛さんの家から着るもの借り来てくれない？」

「なるほど、わかりました」

察してくれたのか、セイバーは近衛さんと一緒に着るものを探しに行ってくれた。

ふう、これでようやく宿に帰れる。

「障壁突破；石の槍；」

「!?!」

突如、野菜の後ろに現れたアーウェンクルスが石の槍を野菜に放つ。
あの野郎！俺の、俺の生贄になにすんじゃー！ー！！

野菜がいなくなったら、物語が完全に狂って、俺に厄介ごとが集中
放火するだろうが！！

俺は鬼の手、いや鬼の腕を素早く動かして、石の槍ごとアーウェンク
ルスを切り裂く。

「無に還れ」

決めセリフは忘れない。

もう、俺の中二病は一生、治らないんじゃないかと思う。

「鬼を抑えている状態からこの反応速度……。本当に君はバケモ
ノだね……。」

今日は引かせてもらおうよ、鬼の手をもつ男」

パシヤン……。

ふう、これで本当に終わりかな？

「あの、雄介さんありがとうございました」

「ああ」

野菜……頼むから早く強くなってくれ。

俺が面倒だから。

マジで頼むから！！

その後は石像にされていた人たちは元に戻り。

野菜や俺達に感謝し、宴会騒ぎとなった。

その際後ろに控えていた巫女さん達がイケメンはあはあと言ってい

たような気がするが、

気のせいだろう。

おやすみなさい。

京都編は次で終了。

たぶん！！！！

二十六話 終わりよければ全てよし(後書き)

どうも皆さんお久しぶりです。更新が遅れ本当に申し訳ございませんでした。

これからも頑張っていくので応援よろしくお願いします。

PS:オリジナル小説『まほ×がく』を始めました。
評価や感想をお待ちしております。

雄介「いやー、ようやく戻れたな。俺」

作者「いやー、本当にどうするか悩みまくったよ」

ゆ「そのわりには短いな」

さ「しょうがないじゃん！一番ぶんな案がこれしかなかったんだから!」

ゆ「・・・」

さ「何？その冷たい視線」

ゆ「・・・・・・」

さ「やめてえええええ!!!!」

次回もお楽しみに。

27話 京都終了のお知らせ。

― 雄介視点 ―

やれやれ。

本当にこの世界に飛ばされてから色々あったもんだ。

そんな事を、考えながら黄昏る俺。

現在俺はこのかさんの自宅の廊下を歩いている。

え？なんでこのかさんって呼んでいるかって？

昨日そう呼ばないと泣く、と脅迫を受けて、こうなりました。

他のメンバーも名前で呼べ、と言われ、皆名前で呼ぶようになってしまった。

まあ、べつにいいんだけどね。

しばらく、景色を楽しみながら長い廊下を歩く。

「僕だって皆に正体がバレたらオコジヨですよ！！」

それに、エヴァンジェリンさんは吸血鬼だし茶々丸さんは口ポで、雄介さんなんて鬼ですよ！！」

景色を楽しんで歩いていたのだが、野菜少年は刹那さんに抱きつき、何か大声で叫んでいる。

つて、俺は鬼かよ！

せめて、左手に鬼の手を持つ男と言って欲しい！

「ネギ先生！そんな無茶を言わないでくださいー！！」

少し足の速度を速めて、現場に近づく。

しかし、来ない方がよかったと現場を見て思った。

なぜなら・・・

「私だって、去りたくないですよ！」

「だったら、居ればいいじゃないですか！」

「だーかーらー！」

「若いつて、いいなー・・・」

「急に老け込まないでください」

野菜は刹那さんに抱きつき（羨ましいぞ！コンチクショウ！！！！）
幼女とロボはそれを見て和んでいる。

まさにカオス！！

十歳の性欲はここまで乱れていたのか！？
将来のウェールズが心配だ。

「お？来ていたのか？」

「おはようございます、雄介様」

「おはよう、それでこの状況は何？」

「それは・・・」

うむ、どうやらエロイベントではなく、野菜が去ろうとする刹那さん
を止めているようだ。

実に羨ま・・・けしからん。

「そうか」

「で、お前は止めに行かないのか？」

「刹那の意思を尊重する」

「なるほど、お前も傍観か」

「大変よ！刹那さー！ーん！ー！」

「大変やー」

「「ぶべらー！」「」

幼女との会話が終わると、このかさんとアスナさんが二人にとび蹴りをかました。

おお、いい一撃だ。

「ほら！刹那さん、行くよ！ー！」

「せつちゃん！」

「はい！ー！」

アスナさんとこのかさんが刹那さんに手を伸ばし、刹那さんが笑顔でその手を取る。

青春だねー。

って、俺はおっさんか！

「雄介さんも行きますよー！ー！」

「雄介さーん！」

刹那さんの手を握ったアスナさんとかさんは俺にも声を掛けてきた。

おやおや、俺もですか・・・。

「やれやれ」

「ふん！そう言いながらうれしそうではないか。そんなに女子中学生がいいのか？」

「残念です。私はまだ二歳・・・。」

「おいおい・・・。」

誤解だ、確かにぴちぴち女子中学生はすばらしいと思うが。俺は女子高生の方が・・・。

「ほれほれ、呼んでござるよ、雄介殿。」

「そつネ！」

「あ、後で取材させてください、主に恋愛関係について・・・。」

「それは、私も詳しく聞きたいね。そうだ、雄介さん。今度美味しい餡蜜屋にでも・・・。」

「コラー！モタモタしないであんた達も来る！！」

何時の間に来ていたの？

俺が気をとられている隙に、全員集合。

さて、帰りますか。

麻帆良へ！！

やあ、皆！

楽しんで頂けたかな？

俺、鶴野 雄介はいつだって、君達の味方だぞ！

もし、君達の近くに妖怪が現れたら、何時でも駆けつけるから

ゆ〜べ〜って、呼んでくれよな！

あ〜それから、君の学校にステキな女の先生が居たらすぐに知らせてくれよな。

『雄介さん！』

あ、ああ、皆。「冗談だよ冗談。」

ねえ君たち！コレだけはよく覚えていてほしいんだけど……。

妖怪は君たちの欲望や悪い心、弱い気持ちを狙ってくるんだ。

だから妖怪に襲われないように、何時までも純真な心を忘れずに、毎日を過ごしてくれよな！

さて、この京都編もそろそろ終わりだ。

それじゃあ、皆さん！ご一緒に！

『死んでまさかのトリップ（ネギま）』は永遠に不滅だー！
ばんざー！ーいー！』

「え？まだ続く？終わらないの？」

27話 京都終了のお知らせ。(後書き)

遅れて申し訳ございません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9232r/>

死んでまさかのトリップ（ネギま）

2011年9月30日21時42分発行